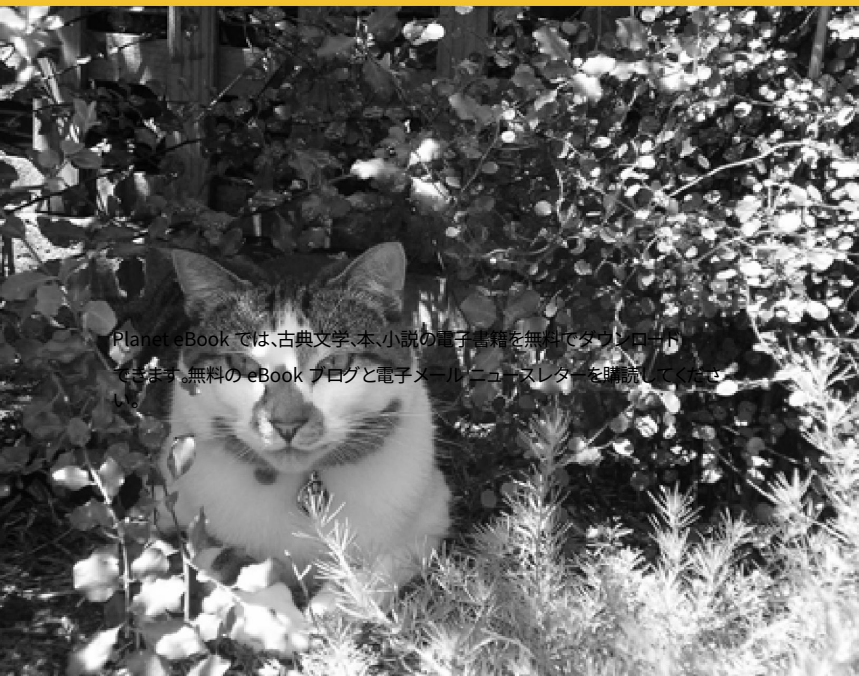
Machine Translated by Google

ジャングルブック

ラドヤード•キプリング著



Planet eBook では、古典文学、本、小説の電子書籍を無料でダウンロードできます。無料の eBook ブログと電子メールニュースレターを購読してください。

Machine Translated by Google

モーグリの兄弟

今、鳶のランが、コウモリのマングが自由になった夜を家
に持ち帰ります。 群れは塒と小屋に閉
じ込められていますが、私たちは夜明けまで
解放されています。

これは誇りと力、タロン、タッシュ、クロー
の時です。

ああ、声を聞いてください!—ジャングルの法則を守るすべ
ての狩猟を頑張ってください!

ジャングルの夜の歌

シーオニー丘陵のとても暖かい夜の七時でした。ウルフ神父が一日の休息から目覚め、体を掻き、あくびをし、足の眠気を払拭するために次々と足を広げました。チップ。

母オオカミは、大きな灰色の鼻を転がり、金切り声を上げている4匹の子グマの上に下げて横たわり、月が彼ら全員が住んでいる洞窟の口を照らしていました。 「オーガー！」オオカミ神父は言いました。 「再び狩りをする時が来た。」彼が丘を飛び降りようとしたとき、ふさふさした尾を持った小さな影が敷居を越えて泣き叫んだ、「幸運を祈ります、オオカミの首長よ。」そして幸運と強くて白い歯は高貴な子供たちに付き物であり、彼らはこの世の飢えた人々を決して忘れないでしょう。」

Machine Translated by Google

それはジャッカル、皿をなめるタバキでした。インドのオオカミはタバキを軽蔑しています。タバキはいたずらをしたり、おとぎ話をしたり、村のゴミの山からぼろ布や革の切れ端を食べたりして走り回っているからです。しかし、彼らも彼を恐れています。なぜなら、タバキはジャングルの中で誰よりも気が狂いがちであり、その後、彼はかつて誰も怖がっていたことを忘れて、邪魔なものすべてを噛みながら森を駆け抜けます。トラでさえ、小さなタバキが気が狂うと逃げたり隠れたりします。狂気は野生の生き物にとって最も恥ずべきことだからです。私たちはそれを水恐怖症と呼んでいますが、彼らはそれをデワニー、つまり狂気と呼んで逃げます。

「それでは、入って見てください。でも、ここには食べ物がありません。」とオオカミ神父は硬直して言いました。

「オオカミにとっては、いいえ」とタバキは言った、「しかし、私のような意地悪な人間にとっては、乾いた骨は良いご馳走です。私たち、ギドゥル•ログ（ジャッカルの人々）は誰を選ぶべきでしょうか？』彼は洞窟の奥まで小走りで行き、そこで肉のついた鹿の骨を見つけ、座って楽しそうに端を鳴らしていました。

「おいしい食事をありがとう」と彼は唇をなめながら言った。
「高貴な子供たちは何と美しいのでしょう！」彼らの目はなんて大きいのでしょう！そしてとても若いです！確かに、確かに、王の子供たちは最初から人間であることを私は思い出したかもしれません。

さて、タバキさんも他の誰よりも、子供たちを面と向かって褒めてくれるほど不幸なことはないということを知っていました。オオカミの母と父が不快そうにしているのを見て、彼は喜んだ。

タバキはじっと座って、自分のしたいたずらを喜んでいたが、意地悪くこう言った。

Planet eBook.comで無料の電子書籍を入手

Machine Translated by Google

「偉大なる者、シア•カーンは狩り場を移した。彼は次の月を目指してこの丘の間で狩りをするつもりだから、私にそう言ったのです。」

シェア•カーンはワインンガの近くに住んでいたトラでした
20マイル離れた川。

「彼には権利がない！」ウルフ神父は怒って言い始めた――「ジャングルの法則により、彼には正当な警告なしに住居を変える権利はない。彼は10マイル以内にいるすべてのゲームのトップを怖がらせるでしょう、そして私は最近、2人で殺さなければなりません。

「彼の母親は、いたずらで彼をルングリ（足の不自由な人）と呼んだわけではありません」と母狼は静かに言いました。 「彼は生まれた時から片足が不自由でした。だからこそ彼は牛しか殺さなかったのです。
今、ワインンガの村人たちは彼に腹を立てていますが、彼は私たちの村人たちを怒らせるためにここに来ました。彼が遠くにいるとき、彼らは彼を求めてジャングルを探し回るでしょう、そして私たちと私たちの子供たちは草に火が着いたら走らなければなりません。確かに、私たちはシア•カーンにとても感謝しています！」

「彼に感謝の気持ちを伝えましょうか？」タバキは言った。

'外！'ウルフ神父が言いました。 「外に出て、あなたのマスと一緒に狩りをしてください-
ター。あなたは一晩で十分な害を及ぼしました。」

「行きます」タバキは静かに言った。 「茂みの中でシア•カーンの声が聞こえます。私はメッセージを自分自身に保存していたかもしれません。』

オオカミ神父が耳を傾けると、下の小さな川に流れ込む谷底で、何も獲れず、ジャングル全体がそれを知っていようとも気にしないトラの、乾いた、怒った、嫌味な、歌うような鳴き声が聞こえました。

'ばか！'ウルフ神父は言いました。 「あの騒音で夜の仕事が始まるなんて！」彼は私たちの雄牛を彼の太ったワインンガの雄牛と同じだと思っているのでしょうか？

Machine Translated by Google

ああ、そうだね。今夜彼が狩るのは雄牛でも牡鹿でもない』
母狼は言いました。 「それは人間です。」

その鳴き声は、コンパスの四方八方から聞こえてくるような、うなり声のようなものに変わっていた。その騒音は、屋外で眠っている木こりやジプシーを当惑させ、時にはトラの口に突っ込んでしまうこともありました。

'男！'オオカミ神父は白い歯を見せながら言いました。
「ふぁっ！」水槽の中には人間を食べなければならないカブトムシやカエルが足りないのか、そして私たちの地上にも！」

理由なく何かを命令することは決してないジャングルの法則では、子供たちに殺し方を教えるために人を殺す場合を除き、すべての獣が人を食べることを禁じており、その場合は群れや部族の狩猟場の外で狩りをしなければならない。

その本当の理由は、人殺しは遅かれ早かれ、象に乗って銃を持った白人がやってくることを意味し、何百人もの褐色男性が銅鑼やロケット弾やたいまつを持ってやってくることを意味するからだ。そうすれば、ジャングルにいる全員が苦しみます。獣たちが互いに言い合う理由は、人間はすべての生き物の中で最も弱く、最も無防備であり、人間に触れるのはスポーツマンらしくないからである。人食い動物は汚くなり、歯がなくなるとも言われていますが、それは本当です。

喉を鳴らす音はさらに大きくなり、最後には喉をいっぱいに鳴らしました。
「あああああ！」虎の突撃の。

それから、シアから遠吠えが聞こえた――非トラの遠吠えだった――
氏族長。 「彼は逃したよ」と母狼は言いました。 'それは何ですか？'

ウルフ神父が数歩走り出すと、シア•カーンが雑木林の中を転がりながら野蛮につぶやき、つぶやいているのが聞こえた。

Planet eBook.comで無料の電子書籍を入手

Machine Translated by Google

「あの愚か者は、木こりの焚き火に飛び込む以上に分別が無く、足を火傷してしまったのだ」ウルフ神父はうめき声を上げて言った。 「タバキは彼と一緒です。」

「何かが坂を登ってきます」と母狼は片耳をピクピクさせながら言いました。「準備をしてください。」

茂みの中で藪が少しカサカサ音を立て、オオカミ神父はお尻を下に下げて飛び降りる準備を整えた。

そして、もしあなたがそれを観察していれば、世界で最も素晴らしいもの、つまり春の半ばにオオカミが確認したものを見たでしょう。彼は自分が何に飛び跳ねているのか理解する前にバウンドし、それから自分自身を止めようとした。その結果、彼は4、5フィート空中に真っすぐに飛び上がり、地面からほぼ離れた場所に着地した。

'男！'彼は言いました。 「男の子よ。見て！'

彼の目の前には、低い枝につかまって、ただ歩くことのできる裸の茶色の赤ん坊が立っていた――夜にオオカミの洞窟にやって来たときと同じくらい柔らかく、えくぼのある小さな原子のようだった。彼はウルフ神父の顔を見上げて笑った。

「あれは男の子ですか？」母狼は言いました。 「見たことないよ。ここに持ってきて。'

自分の子を動かすことに慣れているオオカミは、必要に応じて、卵を割らずに口に入れることができる。そして、オオカミ父は子の背中で顎を閉じていたにもかかわらず、子たちの中に卵を置く間、歯は一本の皮膚を傷つけることさえなかった。

「なんて少ないんだろう！」なんて裸で、なんて大胆なんだろう！』母狼は静かに言いました。赤ちゃんは温かい皮に近づこうと、子グマの間をかき分けて進んでいた。 「あ、ハイ！」彼は他の人たちと一緒に食事を取っています。それで、これは男の子です。さて、自分の子供たちの中に男の子を誇ることができるオオカミがかつて存在したでしょうか?

Machine Translated by Google

ドレン？

「そのようなことは時々聞いたことがありますが、私たちの群れや私の時代には一度もありませんでした」とウルフ神父は言いました。 「彼には毛がまったくなく、足で触れただけで彼を殺すことができた。
でもほら、彼は上を向いていて恐れてはいません。』

シア•カーンの大きな四角い頭と肩が入り口に突き刺さったため、月光は洞窟の口から遮断された。タバキは後ろで「ご主人様、ご主人様、ここに入りました！」と金切り声を上げていた。

「シェア•カーンは私たちに大きな名誉を与えてくれます」とウルフ神父は言いましたが、彼の目はとても怒っていました。 「シア•カーンには何が必要ですか？」

「私の採石場。男の子がこっちに行ったんです」とシア•カーンさんは語った。
「両親は逃亡した。それを私にくれ。』

シア•カーンはウルフ神父の言うとおり、木こりの焚き火に飛び込み、火傷した足の痛みに激怒した。しかし、オオカミ神父は、洞窟の口が虎が入ってくるには狭すぎることを知っていました。彼がどこにいたとしても、シア•カーンの肩と前足はスペースが足りずに窮屈だった。それは、樽の中で戦おうとする人間の場合と同じだった。

「ウルフ族は自由な民族だ」とウルフ神父は言った。 「彼らは、縞模様の牛殺しからではなく、群れの長からの命令を受けます。この男の子は私たちのものです、私たちが望むなら殺しても構いません。』

「あなたがたは選ぶが、選ばないのである！」選択するということは何の話ですか？私が殺した雄牛の代わりに、私は正当な報酬を得るためにあなたの犬の巣穴を覗いて立つ必要があるでしょうか？話すのは私、シア•カーンです！」

虎の咆哮が洞窟を雷鳴で満たした。マザーウルフ

Planet eBook.comで無料の電子書籍を入手

Machine Translated by Google

彼女は体を振りながら子熊たちを振り切って前に飛び出し、その目は暗闇の中の二つの緑の月のように、シア•カーンの輝く瞳に向けられていた。

『そして答えるのは私、ラクシャ（悪魔）です。この男の子は私のものです、ルングリ、私にとっては私のものです！彼は殺されてはならない。彼は群れとともに走り、群れとともに狩りをするために生きなければならない。そして最後には、見てください、裸の子を狩る者、カエルを食べる者、魚を殺す者、彼があなたを狩ることになるでしょう！今すぐそこから、あるいは私が殺したサンブールのそばまで（私は飢えた牛を食べません）、あなたは母親のところに戻ります、ジャングルの焼けた獣、あなたは世界に来たときよりも足が不自由です！行く！'

ウルフ神父は驚いて見守った。彼はほとんど忘れていた――他の五匹のオオカミたちと正々堂々と戦ってマザー•ウルフに勝った日のこと、彼女が群れで走ったとき、お世辞のためにデーモンと呼ばれなかった日のことを、ほとんど忘れていた。シア•カーンは父ウルフと対峙したかもしれないが、母ウルフに立ち向かうことはできなかった。なぜなら、自分がいる場所では母ウルフが有利であり、死ぬまで戦うことを彼は知っていたからである。そこで彼はうなり声をあげながら洞窟の口から後ずさりし、意識がはっきりしたときこう叫びました。

「それぞれの犬が自分の庭で吠えます！」この人間の子の育成に対してパックが何を言うのか、私たちは見てみよう。この子は私のものです、そして私の歯に耐えるために、彼は最後には来るでしょう、おお尻尾の泥棒！

母オオカミは子供たちの間で息を切らしながら身を投げ出し、父オオカミは重々しく彼女に言いました。

「シア•カーンはこれほどの真実を語っている。その子はきっとパックに表示されます。あなたはまだ彼を飼うつもりですか、母上？

「彼を守ってください！」彼女は息を呑んだ。 「彼は裸で、夜に一人でやって来た」

ジャングルブック

Machine Translated by Google

そしてとてもお腹が空いた。それでも彼は恐れなかったのです !ほら、彼はすでに私の女の子の一人を脇に押しやりました。そして、あの足の悪い肉屋は彼を殺して、ここの村人たちが復讐のために私たちの隠れ家をくまなく探し回っている間、ワイングンガに逃げていたでしょう !彼を引き留めますか ?必ず私が彼を守ります。静かに横たわって、小さなカエル。おお汝モーグリ――カエルのモーグリに代わって私は汝をそう呼ぶことにする――シア•カーンが汝を狩ったように、汝もシア•カーンを狩る時が来るだろう。

「しかし、私たちのパックは何と言うでしょうか ? 」ウルフ神父は言いました。

ジャングルの法則では、オオカミは結婚するとき、所属していた群れから脱退してもよいと非常に明確に定められています。しかし、彼の子供たちが立ち上がるのに十分な年齢になるとすぐに、他のオオカミが彼らを識別できるように、通常月に一度満月のときに開催される群れ評議会に彼らを連れて行かなければなりません。この検査の後、子たちは自由に好きな場所に走ってよいが、最初の一獲千金を殺すまでは、群れの成長したオオカミが子オオカミの1頭を殺しても言い訳は認められない。殺人者が見つかった場合、刑罰は死刑です。そして少し考えてみれば、きっとそうだろうということがわかるでしょう。

父ウルフは子供たちが少し走れるようになるまで待ってから、群れ会議の夜、彼らとモーグリと母ウルフをカウンシル•ロック（100頭のオオカミが隠れることができる石と岩で覆われた丘の頂上)に連れて行きました。強さと狡猾さで群れ全体を率いていた偉大な灰色の一匹オオカミ、アケーラは岩の上に体長いっぱいに横たわっており、その下にはアナグマ色の退役軍人たちから、あらゆる大きさと色の40頭以上のオオカミが座っていた。自分たちだと思っていた若い黒人の 3 歳児に、一人で立ち向かってください。

Planet eBook.comで無料の電子書籍を入手

Machine Translated by Google

できた。一匹狼が彼らを一年間率いてきました。彼は若い頃に二度オオカミの罠にはまり、一度は殴られて死んだまま放置された。それで彼は男性の作法や習慣を知っていました。ザ•ロックではほとんど会話がありませんでした。

父親と母親が座っている円の中心で子グマは互いに転がり、時折、年長のオオカミが静かに子グマに近づき、注意深く彼を見つめ、音を立てない足取りで元の場所に戻っていった。時々、母親は自分の子を月明かりの外へ押し出して、見落とされていないことを確認することがありました。アケーラは岩の上からこう叫びました。「あなたは法を知っています、あなたは法を知っています。」よく見ろよ、オオカミたちよ！』そして、心配した母親たちは、「見て、よく見て、オオカミたちよ！」と呼びかけました。

ついに――そして、時が来て母オオカミの首の剛毛が持ち上がった――父オオカミは、彼らが彼を呼んでいた「カエルのモーグリ」を中央に押し込み、そこで彼は笑いながら座って、月明かりに輝く小石で遊んでいた。

アキーラは決して前足から顔を上げず、単調な叫び声を上げ続けた。「よく見てね！」くぐもった咆哮が岩の陰から聞こえてきた――「この子は私のものだ」と叫ぶシア•カーンの声だった。彼を私に渡してください。自由民は男の子と何の関係があるの？』アケーラは耳をひくひくすることさえなかった。彼が言ったのはただ「よく見て、オオカミたちよ！」だけだった。自由民は、自由民以外の命令と何の関係があるのでしょうか？元気そう！'

深いうなり声の合唱が響き渡り、4年生の若いオオカミがシア•カーンの質問をアキーラに投げ返した。「自由民は男の子と何の関係があるの?」さて、ジャングルの法則では、紛争が生じた場合には、

Machine Translated by Google

子グマが群れに受け入れられる権利については、父親と母親ではない群れの少なくとも 2 人のメンバーがその子を代弁しなければなりません。

「誰がこの子の代弁者？」アケーラは言いました。 「自由な人々の中で発言する人はいますか？」答えはなかった。母オオカミは、もし戦いになったら、それが最後の戦いになるだろうと覚悟を決めた。

それから、群れの評議会で許可されている他の唯一の生き物は、オオカミの子たちにジャングルの法則を教える眠そうなヒグマのバルーです。年老いたバルーは、木の実と根と蜂蜜だけを食べるので、好きなところに行ったり来たりすることができます。 ――後肢に立ち上がってうめき声を上げた。

「男の子――男の子？」彼は言った。 「私はその男の子供の代弁者です。男の子には害はありません。私には言葉の才能はありませんが、真実を話します。彼をパックと一緒に走らせ、他の人と一緒にエントリーしてください。私自身が彼に教えます。』

「もう一つ必要です」とアケーラは言いました。 「バルーが話しました、そして彼は私たちの若い子たちの先生です。」バルー以外に誰が話すでしょうか？』

黒い影が円の中に落ちた。それはブラックパンサーのバギーラで、全身真っ黒だったが、光の加減でヒョウの模様が水に浸した絹の模様のように浮かび上がった。誰もがバギーラのことを知っていましたが、誰も彼の道を横切ろうとはしませんでした。なぜなら彼はタバキのように狡猾で、野生の水牛のように大胆で、傷ついた象のように無謀だったからである。しかし、彼の声は木から滴る野蜜のように柔らかく、皮膚は羽毛よりも柔らかかった。

「おお、アケーラ、そして自由の民よ」と彼は喉を鳴らした、「私にはあなた方の集会に参加する権利はないが、ジャングルの法則によれば、もし

Machine Translated by Google

新しい子に関しては致命的な問題ではないが、その子の命は代償を払って買えるかもしれないという疑念がある。そして法律には、誰がその代価を支払ってよいか、支払わなくてもよいかについては規定されていません。

私は正しいですか？

'良い !良い！'いつもお腹が空いている若いオオカミたちは言いました。 「バギーラの話を聞いてください。カブは値段で買えます。それが法なのです。』

「私にはここで発言する権利がないことを承知しておりますので、ご退場をお願いいたします。」

「それでは話してください」20人の声が叫んだ。

「裸の子供を殺すのは恥ずべきことだ。それに、彼が成長したら、あなたにとってもっと良いスポーツをしてくれるかもしれません。バルーが彼の代理として発言した。さて、バルーの言葉に、もしあなたが法に従ってその男の子を受け入れるのであれば、ここから半マイルも離れていない場所で、新たに殺された雄牛と太った雄牛を一頭加えます。難しいですか？』

たくさんの声が飛び交い、『何が問題だ ?彼は冬の雨で死ぬだろう。彼は太陽で焼けつくだろう。裸のカエルは私たちにどんな害をもたらすのでしょうか ?彼にパックと一緒に走らせてください。雄牛はどこですか、バギーラ ?彼を受け入れさせてください。』そして、アケーラの深い湾がやって来て、「よく見て、よく見て、オオカミたちよ！」と叫びました。

モーグリはまだ小石に深い興味を持っていました、そしてオオカミがやって来て一つ一つ彼を見たとき、彼は気づきませんでした。ついに全員が死んだ雄牛を探しに丘を下り、残ったのはアケーラ、バギーラ、バルー、そしてモーグリのオオカミだけでした。シア•カーンはモーグリが引き渡されなかったことに非常に腹を立てていたため、夜中でもまだ咆哮を上げていた。

「ああ、よく吠えろ」とバギーラがひげの下で言った、「この裸のものがあなたを吠える時が来るから」

Machine Translated by Google

別の曲に合わせないと、私は人間のことを何も知りません。』

「よくやったよ」とアケーラさんは言った。 「男性とその子供たちは、非常に賢明。彼はやがて助けてくれるかもしれない。』

「本当に、困ったときの助けです。なぜなら、パックを永遠にリードすることを望む人は誰もいないからです」とバギーラは言いました。

アキーラは何も言わなかった。彼は、あらゆる群れのリーダーに訪れる、力が失われ、ますます弱っていき、ついにはオオカミに殺され、新しいリーダーが現れて、自分の順番で殺されるときのことを考えていました。

「彼を連れ去って、彼を訓練してください」と彼はウルフ神父に言った。自由民の一人にふさわしい。』

こうしてモーグリは雄牛の代金とバルーの好意でシーオニー•ウルフ•パックに加わることになった。

さて、あなたはまるまる10年か11年を飛ばして、モーグリがオオカミの中で送った素晴らしい人生を推測するだけで満足しなければなりません。なぜなら、それを書き表したら、非常に多くの本が埋まってしまうからです。彼は子供たちと一緒に育ちましたが、もちろん、彼らは彼が子供になるほとんど前に成長したオオカミでした。そしてオオカミ神父は、草のざわめき一つ一つ、暖かい夜の空気の呼吸一つ一つ、頭上のフクロウの鳴き声一つ一つ、ねぐらにいるコウモリの爪の一つ一つの引っかき音まで、自分の仕事やジャングルの中での物事の意味を教えた。しばらく木の上で過ごし、プールで飛び跳ねるあらゆる小魚の飛沫は、ビジネスマンにとってオフィスの仕事が意味するのと同じくらい彼にとって意味があった。学習していないときは、太陽の下で座って眠り、食事をしてまた眠りました。汚れたり暑いと感じたときは、森のプールで泳ぎました。そして彼が蜂蜜を欲しがったとき（バルーは彼に言いました）

Machine Translated by Google

蜂蜜とナッツは生肉と同じくらいおいしいと彼はそのために登った、そしてバギーラが彼にその方法を教えてくれた。バギーラは枝の上に寝そべって「おいで、弟よ」と呼びました。モーグリは最初はナマケモノのようにしがみついていましたが、その後は灰色の猿と同じくらい大胆に枝の間を飛び降りました。パックが出会ったときも、彼はカウンシル•ロックで代わりを務めました。そこで彼は、オオカミをじっと見つめると、オオカミは目を落とさざるを得なくなることに気づき、楽しみのために見つめていました。

オオカミは毛皮のとげやイガにひどく悩まされるため、友人の肉球から長いとげを摘み取ることもあった。彼は夜になると丘の中腹を下りて耕作地に入り、小屋にいる村人たちをとても好奇心旺盛に眺めていたが、バギーラがジャングルの中に巧妙に隠したドロップゲートが付いた四角い箱を見せたので、男性に対して不信感を抱いていた。彼は危うくそこに入りそうになったので、それは罠だと彼に言いました。彼はバギーラと一緒に森の暗く暖かい中心部に行き、眠い日中ずっと眠り、夜にはバギーラがどのように殺人を行ったかを見るのが何よりも好きでした。バギーラは空腹を感じたので右も左も殺し、モーグリも同様だった――一つの例外を除いて。彼が物事を理解できる年齢になるとすぐに、バギーラは彼に、牛の命と引き換えに牛の群れに買われたのだから決して牛に触れてはいけないと言いました。

「ジャングルはすべてあなたのものだ」とバギーラは言った。「そして、あなたが殺せるほど強いものはすべて殺すことができます。しかし、あなたを買った雄牛のために、若い牛も年老いた牛も決して殺したり食べたりしてはならない。それがジャングルの法則だ。』モーグリは忠実に従いました。

Machine Translated by Google

そして彼は、自分が何かの教訓を学んでいるということも知らず、食べること以外何も考えていない成長しなければならない少年のように、成長し、強くなった。

マザーウルフは一度か二度、シア•カーンは信用できる生き物ではない、いつかシア•カーンを殺さなければならない、と言いました。しかし、若いオオカミならそのアドバイスを一時間ごとに覚えていたであろうが、モーグリはまだ少年だったため、そのアドバイスを忘れてしまった――たとえ人間の言葉を話すことができたなら、自分をオオカミだと呼んだだろうが。

シア•カーンはいつもジャングルで道を横切っていた。アキーラが成長して弱くなるにつれて、この足の悪いトラは、パックの若いオオカミたちと大の友達になり、彼らはスクラップを求めて彼を追ってきたが、それはアキーラには決して許されないことであった。もし彼が自分の権威を適切な限界まで果敢に押し広げていたら。それからシア•カーンは彼らをお世辞にして、このような優秀な若い狩人たちが瀕死のオオカミと人間の子供に導かれることに満足しているのかと不思議に思ったものだ。 「彼らは私にこう言います」とシア•カーンは言う、「評議会ではあえて彼の目を見てはいけないと。」そして、若いオオカミたちはうなり声を上げ、毛を逆立てました。

どこにでも目と耳があるバギーラは、このことについて何かを知っており、一度か二度、モーグリに、いつかシア•カーンが自分を殺すだろうと非常に多くの言葉で語った。

モーグリは笑ってこう答えます。「私はパックを持っているし、あなたも持っています。そしてバルーはとても怠け者ですが、私のために一撃や二撃を加えてくれるかもしれません。なぜ恐れる必要があるのでしょうか？』

あるとても暖かい日のこと、バギーラは聞いたことから新しい概念を思いつきました。おそらくヤマアラシの一輝が彼に言ったのだろう。しかし、彼らがジャングルの奥深くにいて、少年が頭を下にして横たわっているとき、彼はモーグリに言いました。

Machine Translated by Google

バギーラの美しい黒い肌、「弟よ、シア•カーンがあなたの敵だと何度言ったことでしょう？」

「その手のひらにあるナッツの数だけ」とモーグリは言いましたが、当然のことながら数えることはできませんでした。 「どうしたの ?私は眠いです、バギーラ、そしてシア•カーンはずっと尾を長くして大声で話しています—孔雀のマオのように。

「しかし、今は寝ている場合ではありません。バルーはそれを知っています。私はそれを知っている;パックはそれを知っています。そして愚かな愚かな鹿さえも知っています。タバキもあなたに言いました。』

「ほー！」ホー !とモーグリは言いました。 「少し前にタバキが私のところに来て、私は裸の男の子で豚の実を掘るのには適さないと失礼な話をしました。しかし、私はタバキの尻尾を掴んで、ヤシの木に向かって二度振り、より良いマナーを教えました。」

「それは愚かでした。タバキはいたずら好きですが、あなたに密接に関係することをあなたに話しただろうからです。」その目を開けてください、弟。シア•カーンはジャングルであなたを殺す勇気はありません。しかし、覚えておいてください、アケーラは非常に高齢であり、すぐに彼が自分の責任を果たせなくなる日が来ます、そしてそのとき彼はもうリーダーではなくなるでしょう。あなたが最初に評議会に連れて行かれたときにあなたを見守ったオオカミの多くも高齢であり、若いオオカミたちは、シア•カーンが教えたように、人間の子は群れに居場所がないと信じています。もう少ししたら、あなたも男になるでしょう。』

「では、兄弟たちと一緒に逃げるべきではない男とは何ですか？」とモーグリは言いました。 「私はジャングルで生まれました。私はジャングルの法則に従いました、そして私たちの足から棘を抜いていないオオカミは一人もいません。確かに彼らは私の兄弟です！

Machine Translated by Google

バギーラは体を伸ばして半分閉じた
彼の目。 「弟よ」彼は言った、「私の顎の下を感じてください。」

モーグリが力強い茶色の手を差し出すと、バギーラの絹のような顎のすぐ下で、巨大なうねる筋肉が光沢のある髪ですべて隠されており、小さなハゲの部分を見つけました。

「ジャングルでは、私、バギーラがそのマーク、つまり首輪のマークを持っていることを知っている人は誰もいません。それでもなお、弟よ、私は人間の間で生まれました、そして私の母が死んだのも人間の間でした――ウーディポールにある王の宮殿の檻の中で。あなたがまだ裸の子供だったとき、私が評議会であなたのために代償を払ったのはこのためでした。

そう、私も人間の間に生まれました。私はジャングルを一度も見たことがありませんでした。
彼らは鉄格子の中で私に鉄鍋で食事を与えましたが、ある夜、私は自分がバギーラ、つまりヒョウであり、人の遊びではないのだと感じ、足の一撃で愚かな鍵を壊して立ち去りました。そして私は男の道を学んだので、ジャングルではシア•カーンよりも恐ろしい存在になりました。そうじゃないですか？』

「そうですよ」とモーグリは言いました。「ジャングル全体がバギーラを恐れています。モーグリを除いては全員です。」

「ああ、あなたは男の子なんですね」とブラックパンサーはとても優しく言いました。 「そして、私がジャングルに戻ったのと同じように、あなたも評議会で殺されなければ、最後には人間の元に、つまりあなたの兄弟である人間の元に戻らなければなりません。」

「でも、どうして――でも、どうして私を殺そうと思う人がいるのでしょう？」とモーグリは言いました。

「私を見てください」バギーラは言いました。そしてモーグリは彼を目の間でじっと見つめた。大ヒョウは30分以内に顔をそむけた。

Machine Translated by Google

「だから」と彼は葉の上で足を動かしながら言った。 「私でさえあなたを目の間で見ることはできません、そして私は人間の間に生まれました、そして私はあなたを愛しています、弟。他の人たちはあなたと目が合わないのであなたを憎んでいます。あなたは賢いからです。あなたが彼らの足から棘を抜いたからだ――

あなたは男だからね。』

「そんなことは知りませんでした」とモーグリは不機嫌そうに言い、濃い黒い眉の下で顔をしかめた。

「ジャングルの法則って何ですか？」最初に叩いてから舌を与えます。あなたの非常に不注意によって、彼らはあなたが男であることを知りました。しかし、賢明になってください。アキーラが次の殺害を逃したとき、そして狩りをするたびに金を稼ぐためにさらに多くの費用がかかるとき、パックは彼とあなたに敵対するだろうと私の心の中にはあります。

彼らはロックでジャングル評議会を開催するだろう、そうすれば――そして――私はそれを手に入れるだろう！』バギーラは飛び上がりながら言った。「急いで谷にある男性用の小屋に行き、そこで栽培されている赤い花を少し持って行きなさい。そうすれば、時が来たら、私やバ•ルー、あるいはパックの仲間たちよりも強い友人を得ることができるでしょう」あなたを愛しています。赤い花を手に入れてください。』

赤い花バギーラとは火を意味しますが、ジャングルの生き物だけが火をその固有名で呼ぶことはありません。すべての獣はそれに対して致命的な恐怖を抱いて生きており、それを説明する百もの方法を発明します。

「赤い花？」とモーグリは言いました。 「それは夕暮れ時に小屋の外に生えています。いくつかもらいますよ。』

「そこには男の子供の声が聞こえます」とバギーラは誇らしげに言いました。「それは小さな鉢で育つことを忘れないでください。すぐに入手して、いざというときのためにそばに置いておきましょう。』

'良い！'とモーグリは言いました。 '囲碁。でも、確かにそうですよ、おお、私のバー-

Machine Translated by Google

ギーラ』――彼は立派な首に腕を回し、その大きな目を深く見つめた――『これはすべてシア•カーンの仕業だと確信しているのか？』

「私を解放してくれた壊れた鍵のおかげです、きっと弟よ。」

「それでは、私を買ってくれた雄牛の代わりに、シア•カーンにこの代償を全額支払うつもりだ。それでは、もうちょっと終わるかもしれない」とモーグリは言い、飛び去った。

『あれは男だ。それがすべて男だ」とバギーラは再び横になりながら独り言を言った。「ああ、シア•カーン、10年前のあのカエル狩りほど黒い狩りはなかった！」

モーグリは森の中を遠くまで、懸命に走り続けていましたが、彼の心は熱くなっていました。夕霧が立ち込める中、彼は洞窟に来て息を吸い、谷を見下ろしました。子どもたちは外に出ていましたが、洞窟の奥にいる母オオカミは、自分のカエルが何かを悩ませていることを呼吸で察知しました。

「何ですか、息子さん？」彼女は言いました。

「シア•カーンのコウモリのおしゃべりだ」と彼は電話をかけ直した。「今夜は耕した畑の中で狩りをするんだ」そして彼は茂みを通って谷底の小川まで下に向かって飛び降りた。そこで彼は、狩りをする群れの叫び声と、狩られたサンブールの怒鳴り声、雄鹿を追い払うときの鼻息を聞いたので確認した。それから、若いオオカミたちの邪悪で苦々しい遠吠えが聞こえました。「アケーラ！」アケーラ！一匹狼にその強さを見せつけましょう。パックのリーダーのための余地!春よ、アケーラ！

一匹狼は飛び上がって掴み損ねたに違いありません。モーグリは歯がパチンと鳴る音と、その後叫び声を聞いたのです。

Machine Translated by Google

サンブールは前足で彼をひっくり返した。

彼はそれ以上何も待たずに、急いで先に進みました。そして村人たちが住んでいる耕作地に駆け込むと、叫び声は後ろで小さくなった。

「バギーラは真実を語った」と彼は小屋の窓際の牛の飼料の中に座り込みながら息を切らした。 「明日はアケーラにとっても私にとっても一日です。」

それから彼は窓に顔を近づけて、囲炉裏の火を眺めました。彼は、夜に夫の妻が起きてきて、黒い塊を与えているのを見た。そして朝が来て、霧が真っ白で冷たかったとき、その男の子供が、内側に土を詰めた籐の鍋を拾い上げ、真っ赤に焼けた木炭の塊を詰めて、毛布の下に置き、掃除に出掛けるのを見ました。側溝の牛たち。

「それだけですか？」とモーグリは言いました。 「子グマにそれができれば、何も恐れることはありません。」そこで彼は角を曲がって少年に会い、手から鍋を取り、少年が恐怖で吠えている間に霧の中に消えていきました。

「彼らは私によく似ています」とモーグリは、女性がそうするのを見たように鍋に息を吹き込みながら言いました。 「この子は、私が食べ物を与えないと死んでしまいます。」そして彼は赤いものの上に小枝と乾いた樹皮を落としました。丘の中腹で、彼はコートに月長石のように朝露が輝いているバギーラに出会った。

「アケーラは逃したよ」とヒョウは言いました。 「昨夜彼らは彼を殺したでしょうが、あなたも必要でした。彼らは丘の上であなたを探していました。

「私は耕された土地の中にいた。私は準備ができています。見る！'モーグリ火鍋をかざした。

'良い！今、私は男たちが枯れ枝を突き刺しているのを見たことがあります。

Machine Translated by Google

その先に赤い花が咲きました。怖くないですか？』

'いいえ。なぜ恐れる必要があるのでしょうか ?私は今、夢ではないにしても、オオカミになる前に赤い花の隣に横たわっていたことを覚えています。それは暖かくて快適でした。」

その日モーグリは一日中洞窟に座って、火鍋の手入れをしたり、乾いた枝をその中に浸して様子を観察したりしていました。彼は満足のいく枝を見つけた。夕方、タバキが洞窟に来て、カウンシル•ロックで指名手配されていると失礼に告げたとき、タバキが逃げ出すまで笑い続けた。それからモーグリは笑いながら評議会へ行きました。

一匹狼のアケーラは群れのリーダーシップがオープンであることのしるしとして岩のそばに横たわり、シア•カーンはスクラップで育てられたオオカミたちを従え、公然とお世辞をもらいながらあちこち歩き回った。バギーラはモーグリの近くに横たわり、火鍋はモーグリの膝の間にありました。全員が集まると、シア•カーンは話し始めた。アケーラが全盛期だった頃は、絶対にそんなことはしなかったであろうことだ。

「彼には権利がない」とバギーラがささやいた。 「そう言ってください。彼は犬の息子です。彼は怯えるだろう。』

モーグリは飛び起きた。 「自由の民よ」と彼は叫んだ、「シア•カーンがパックを率いるのか？」トラは私たちのリーダーシップと何の関係があるのでしょうか？」

「指導部がまだオープンではなく、発言を求められているのを見て――」とシア•カーンは話し始めた。

'誰によって？'とモーグリは言いました。 「我々はみな、この牛の肉屋に媚びるジャッカルなのだろうか？」パックのリーダーシップはパックのみにあります。

Machine Translated by Google

「黙れ、汝の子よ！」という叫び声が聞こえた。 「彼に話させてください。彼は私たちの律法を守ってくれました。」そしてついに、群れの先輩たちは「死んだ狼に語らせろ」と叫びました。パックのリーダーが殺害を逃した場合、彼は生きている限りデッドウルフと呼ばれますが、それは長くはありません。

アケーラは疲れた顔で年老いた頭を上げた。

「自由の民よ、そしてシア•カーンのジャッカルであるあなたたちも、私は12シーズンにわたってあなたたちを殺しに行ったり来たりさせてきたが、その間、一人も罠にはめられたり、負傷したりしたことはない。」今、私は殺しを逃しました。あなたはその陰謀がどのように作られたかを知っています。私の弱さを知らせるために、どうやって私に未体験の金をつぎ込んだか、あなたは知っています。それは巧妙に行われました。あなたの権利は、今ここカウンシル•ロックで私を殺すことです。そこで私は尋ねます、一匹狼を終わらせるために誰が来るのでしょうか？ジャングルの法則により、あなた方が一人ずつ来るのは私の権利だからです。』

アケーラと死ぬまで戦おうとする狼は一人もいなかったため、長い沈黙が続いた。するとシア•カーンは「ああ！」と叫びました。この歯のない愚か者と私たちは何の関係があるのでしょうか？彼は死ぬ運命にあるのです！

それは長生きしすぎた子熊です。自由な人々よ、彼は最初から私の肉だった。彼を私に渡してください。私はこの人狼の愚かさにはうんざりしている。彼は10シーズンにわたってジャングルを悩ませてきた。子熊をくれ、さもなければいつもここで狩りをするが、骨一つも渡さない。彼は男であり、男の子供であり、私は骨の髄から彼を憎んでいます！」

すると、群れの半数以上が「男だ！」と叫びました。男！
男は私たちと何の関係があるのでしょうか？彼を自分の場所に行かせてください。』

「そして村の人々全員を我々に敵対させるのか？」ハマグリのシア•カーン。
「いいえ、彼を私に渡してください。彼は男性であり、

Machine Translated by Google

私たちの誰も彼を目の間で見ることはできません。

アケーラは再び頭を上げて言いました、「彼は私たちの食べ物を食べました。」彼は私たちと一緒に寝ました。彼は我々のためにゲームを動かしてくれた。彼はジャングルの法則を一言も破っていない。」

「また、彼が受け入れられたとき、私は雄牛で彼の代金を支払いました。
雄牛の価値はわずかですが、バギーラの名誉は、おそらく彼がそのために戦うことになるでしょう」とバギーラは最も穏やかな声で言いました。

「10年前に雄牛が払ったんだ！」パックは怒鳴りました。 「私たちはどうするの
10歳の骨の世話をしますか？

「それとも誓約のため？」バギーラは白い歯をむき出しにして言った。
彼の唇の下に。 「まあ、あなた方は自由民と呼ばれていますね！」

「人の子はジャングルの人々と一緒に走ることはできない」
シア•カーンが吠えた。 「彼を私に渡してください！」

「彼は血を除いて私たちの兄弟です」とアケーラは続けた、「そしてあなたはここで彼を殺すでしょう！」実のところ、私は長生きしすぎた。あなたがたの中には牛を食べる者もいるし、シア•カーンの教えのもと、暗い夜を通って村人の玄関先から子供たちをさらっていると聞いた者もいる。したがって、私はあなたがたが臆病者であることを知っており、私は臆病者に向けて話します。私が死ななければならないことは確かであり、私の命には何の価値もありません。そうでなければ、私は男の代わりにそれを差し出すでしょう。しかし、群れの名誉のために、あなたがリーダーなしでいることで忘れてしまったちょっとした問題ですが、もしあなたが子グマを自分の場所に行かせるなら、私の時が来たら私はそうしないと約束します死ぬためには、あなたたちに対して歯を一本むき出しにしてください。戦わずして死ぬ。そうすれば少なくともパック3の命は救われるだろう。これ以上は私にはできません。しかし、もしあなたが望むなら、何の落ち度もない兄弟、つまり代弁者であり、兄弟である兄弟を殺すことから来る恥辱を、私はあなたがたに救うことができます。

Machine Translated by Google

ジャングルの法則に従ってパックに組み込まれました。

「彼は男だ、男だ、男だ！」パックは怒鳴りました。そしてほとんどのオオカミがシア•カーンの周りに集まり始め、シア•カーンの尻尾は変わり始めていた。

「今やビジネスはあなたの手の中にあります」とバギーラはモーグリに言いました。 「私たちには戦う以外に何もできません。」

モーグリは直立し、手には火鍋を持っていました。それから彼は両腕を伸ばし、評議会の面前にあくびをした。しかし、彼は怒りと悲しみで激怒していました。なぜなら、オオカミのように、オオカミたちは自分がどれほど彼を憎んでいるかを一度も彼に話しなかったからです。

'あなたに耳を傾けます！'彼は泣いた。 「この犬の暴言は必要ない。あなたは今夜、私が男であると何度も私に言いました（実際、私はあなたと一緒に死ぬまで狼であったでしょう）、あなたの言葉は真実であると感じます。だから私はあなたたちをもう私の兄弟とは呼びませんが、男性がそうすべきであるように、[犬]を垂れ流してください。あなたが何をするか、何をしないかは、あなたが言うことではありません。その問題は私にあります。そして、この問題をもっとはっきりと理解できるように、人間である私が、あなたがた犬が恐れている赤い花を少しだけここに持ってきました。」

彼が火鍋を地面に投げつけると、赤い石炭の一部が乾いた苔の束に火をつけ、燃え上がり、飛び上がる炎を前に評議会全員が恐怖のあまり後ずさりした。

モーグリは枯れ枝を火の中に突っ込み、小枝が燃えてパチパチと音を立て、縮こまるオオカミの中で頭上で回転させました。

「あなたこそが主人なのです」とバギーラは小声で言った。

「アケーラを死から救ってください。彼はいつもあなたの友人でした。

人生で一度も慈悲を求めたことのない厳しい老オオカミのアケーラは、少年が立っているとモーグリに哀れむような視線を向けた。

Machine Translated by Google

全身裸で、彼の長い黒い髪は、影を飛び跳ねさせ、震えさせる燃えるような枝の光の中で肩の上に投げられていました。

'良い！'モーグリはゆっくりと周りを見つめながら言いました。 「あなた方は犬であることが分かりました。私はあなたから私の同胞へと行きます――もし彼らが私と同胞であれば。ジャングルは私には閉ざされているので、私はあなたの話やあなたとの交友関係を忘れなければなりません。しかし、私はあなたがたよりももっと慈悲深いでしょう。私は血のつながったあなたの兄弟以外の何ものでもなかったので、私が人間の中の男になったとき、あなたが私を裏切ったように、私はあなたを人間に裏切らないことを約束します。彼が足で火を蹴ると、火花が舞い上がった。 「パック内の私たちの間には戦争があってはならない。しかし、出発する前に支払わなければならない借金があります。」彼はシア•カーンが座って炎を見て愚かに瞬きしているところまで大股で進み、彼の顎の房を掴んだ。事故に備えてバギーラも続いた。 「起きろ、犬！」モーグリは泣きました。 「男が話したら、立ち上がれ、さもなければそのコートに火をつけてやる！」

シェア•カーンの耳は頭の上に平らに置かれ、燃え盛る枝がすぐ近くにあったので目を閉じた。

「この牛殺しの犯人は、私が子供の頃に殺さなかったので議会で私を殺すと言った。したがって、私たちは男性であるときに犬を殴るのです。ひげをかき混ぜてください、ルングリ、そして私は赤い花をあなたの食道に押し込みます！彼がシア•カーンの頭を枝で殴ると、虎は恐怖の苦しみで泣き叫んだ。

「ぱっ！」焦げたジャングルキャット—今すぐ行きましょう！しかし、次に私がカウンシル•ロックに来るときは、男が来るのと同じように、頭にシア•カーンの皮をかぶっていることを覚えておいてください。残りは、アケーラは自由に好きなように生きます。あなたがたは彼を殺さない、

Machine Translated by Google

それは私の意志ではないからです。また、あなたがたはもうここに座って、私が追い出した犬の代わりに誰かであるかのように舌を巻きながら舌を巻きつけることもないと思います。行く！'火は枝の端で激しく燃え上がり、モーグリが円の周りを右に左に攻撃すると、オオカミは毛皮を燃やす火の粉を上げながら遠吠えしながら走りました。最終的にモーグリの役割を果たしたのは、アケーラとバギーラ、そしておそらく 10 頭のオオカミだけでした。そのとき、モーグリはこれまでの人生で一度も傷ついたことがなかったので、心の中で何かが傷つき始め、息を整えてすすり泣き、涙が顔を伝いました。

'それは何ですか？それは何ですか？'彼は言った。 「離れたくない
ジャングル、これが何なのか分かりません。私は死ぬのですか、バギーラ？

「いいえ、弟よ。それは男性が使うような涙だけです」とバギーラさんは言いました。 「今、私はあなたが人間であり、もはや人間の子供ではないことを知りました。これより先、ジャングルは確かにあなたに対して閉ざされています。彼らを堕落させてください、モーグリ。それはただの涙です。』そこでモーグリは座って、心が張り裂けそうなほど泣きました。そして彼はこれまでの人生で一度も泣いたことがありませんでした。

「さあ、男性のところに行きます」と彼は言った。でもその前に母にお別れを言わなければなりません。 」そして、オオカミ神父と一緒に彼女が住んでいる洞窟に行き、四匹の子グマが惨めに吠える中、オオカミ神父は彼女のコートの上で泣きました。

「あなたがたは私を忘れないでしょうか？」とモーグリは言いました。
「私たちが痕跡をたどることは決してできないよ」と子グマたちは言いました。
「あなたが大人になったら丘のふもとに来てください。そうすれば私たちはあなたと話します。そして私たちは夜にあなたと遊ぶために農地に行きます。」

Machine Translated by Google

'すぐに来る！'ウルフ神父は言いました。 「ああ、賢い小さなカエルさん、すぐにまた来てください。あなたのお母さんも私も年をとったからです。』

「すぐにおいで」と母狼は言った、「私の小さな裸の息子。聞いてください、人の子よ、私は自分の子供たちを愛したとき以上にあなたを愛しました。

「必ず行きます」とモーグリは言いました。 「そして私が来るときは、シア•カーンの皮をカウンシル•ロックの上に置くことになるだろう。私を忘れないでください !ジャングルにいる彼らに、決して私を忘れないように伝えてください！」

夜が明け始めたとき、モーグリは人間と呼ばれる神秘的な存在たちに会うために、一人で丘の中腹を下りていました。

Machine Translated by Google

狩猟の歌
Seeonee パック

夜が明けるにつれて、サンブールの鐘が一度、二度、そして何度
も鳴り響きました。
そして、雌鹿が飛び上がり、雌鹿が野生の鹿が食事をす
る森の池から飛び上がった。
この私は、一人で偵察していて、一度、二度、
そして何度も見ました！
夜が明けるにつれて、サンブールの鐘が一度、二度、そして何度
も鳴り響きました。
そしてオオカミがこっそり戻ってきて、オオカミがこっそり戻
ってきて 待っている群れに言葉を届けるために そ
して私たちは探して見つけて、彼の跡を追いかけました 一度、二度、そして何
度も！
夜が明け始めると、オオカミの群れは一度、二度、そして何度も叫
びました！
ジャングルに足跡も残らない！

暗闇でも見える目、暗闇！
舌を――舌を与えてください !ハーク !おお、ハーク！
一度、二度、そしてまた！

カアの狩り
彼の斑点はヒョウの喜びであり、彼の角はヒョウの喜びです。

Machine Translated by Google

バッファローの誇り。

ハンターの強さは皮の光沢でわかるので、清潔にしてください。

ブロックがあなたを投げ飛ばすかもしれないし、眉間の濃いサンブールが流血するかもしれないとあなたが気づいたなら。私たちに知らせるために仕事を止める必要はありません。私たちはそれを10シーズン前から知っていました。

見知らぬ人の子を虐げないで、姉妹と兄弟として歓迎してください。なぜなら、彼らは小さくてふわふわしていますが、クマが彼らの母親である可能性があるからです。

「私に似た者はいない！」子熊は自分が最初に殺した事を誇りに思って言います。しかし、ジャングルは広く、カブは小さいです。彼に考えさせて、じっとさせてください。

バルーの格言

ここで語られていることはすべて、モウ•グリがシーオニー•ウルフ•パックから追い出されるか、虎のシア•カーンに復讐する少し前の出来事である。それはバルーが彼にジャングルの法則を教えていた頃のことだった。大きくて真面目な年老いたヒグマは、こんなに早く弟子ができたことを喜んでいました。なぜなら、若いオオカミは自分たちの群れや部族に適用されるジャングルの法則しか学ばず、覚えたらすぐに逃げてしまうからです。狩猟の詩「音を立てない足、音を立てない足」を繰り返すことができます。暗闇でも見える目。ねぐらの風を聞くことができる耳、鋭い白い歯、これらすべてはタバキを除く私たちの兄弟の痕跡です

Machine Translated by Google

私たちが憎むジャッカルとハイエナです。」しかし、人間の子としてのモーグリは、これ以上に多くのことを学ばなければなりませんでした。時々、黒ヒョウのバギーラは、ペットの様子を見るためにジャングルをくつろぎにやって来て、モーグリがバルーにその日の教訓を復唱している間、木に頭をぶつけてゴロゴロと喉を鳴らしていました。少年は泳ぐのとほぼ同じように登ることができ、走るのとほぼ同じように泳ぐことができました。そこで、法の教師であるバルーは彼に木と水の法則を教えました。腐った枝と健全な枝を見分ける方法。地上50フィートの上で野生のミツバチの巣に出会ったとき、どうやって彼らに丁寧に話しかけるのか。マング•ザ•バットが正午に木の枝で邪魔をしたとき、彼に何と言えばよいでしょうか。そして、彼が水しぶきを浴びる前に、水たまりの中の水ヘビに警告する方法。ジャングルの人々は誰にも邪魔されるのが好きではなく、侵入者に向かって飛び立つ準備ができています。それから、モーグリはまた、ジャングルの人々の誰かが自分の敷地の外で狩りをするときはいつでも、それが終わるまで大声で繰り返さなければならない、見知らぬ人の狩猟の叫びを教えられました。翻訳すると、「お腹が空いたのでここで狩りをする時間を与えてください」という意味です。その答えは、「狩りをするのは食べ物のためであって、楽しみのためではない」です。

これらすべてを見ると、モーグリがどれだけ暗記しなければならなかったのかがわかります。モーグリは同じことを 100 回以上言うのにとてもうんざりしていました。しかし、バルーがバギーラに言ったように、ある日、モーグリが手錠をかけられ、かんしゃくを起こして逃げ出したとき、「男の子は男の子であり、彼はジャングルの法則をすべて学ばなければなりません。」

「でも、彼がどれほど小さいかを考えてみてください」とブラックパンサーは言いました。もし彼が自分の思いどおりにしていれば、モーグリを台無しにしていたでしょう。'どうやって

Machine Translated by Google

彼の小さな頭であなたの長い話をすべて理解できるでしょうか？』

「ジャングルには、殺してはいけないほど少ないものはあるだろうか？」いいえ。だからこそ私は彼にこれらのことを教え、彼が忘れたときに非常に優しく彼を殴るのです。」

『そっと !柔らかさについて何を知っていますか、老いた鉄の足よ？』バギーラはうめいた。 「彼の顔は今日、あなたの――柔らかさのせいで傷だらけです。うーん。』

「無知によって危害を加えるよりは、彼を愛している私によって頭から足まで傷つけられるほうがいいのです」とバルーは真剣に答えた。 「私は今、鳥やヘビ族、そして自分の群れを除く四本足で狩りをするすべての者たちとともに彼を守るジャングルのマスター•ワードを彼に教えているところだ。」彼は今、その言葉さえ覚えていれば、ジャングルにいるすべての人からの保護を要求できる。それは少し殴る価値があるではありませんか？

「それでは、この子を殺さないように注意してください。彼はあなたの鈍い爪を研ぐような木の幹ではありません。しかし、そのマスターワードとは何でしょうか ?私は助けを求めるよりも、助けを与えるほうが好きだ」――バギーラは片足を伸ばし、その先にあるスチールブルーの引き裂くノミのような爪に感嘆した――「それでも私は知りたいはずだ」

「私はモーグリに電話します、そして彼はそれを言うでしょう - 彼が望むならば。来いよ、弟よ！』

「ハチの木みたいに頭が鳴っているよ」不機嫌な小さな声が彼らの頭上で言うと、モーグリはとても怒って憤慨して木の幹を滑り降り、地面に着きながら付け加えた、「私はバギーラのために来たのであって、あなたのためではない、太った古いバルー！

「それは私にとってすべてです」とバルーは傷つき悲しみながらも言った。 「それではバギーラに、マスターの言葉を伝えてください」

Machine Translated by Google

今日私があなたに教えたのはジャングルです。』

「どの人向けのマスターワード?」モーグリは自慢して喜んで言いました。「ジャングルにはたくさんの舌がある。私はそれらをすべて知っています。

「あなたは少しは知っていますが、あまり多くは知りません。ほら、バギーラ、彼らは決して先生に感謝しないのよ。小さなオオカミの子が、バルー爺さんの教えに感謝して帰ってきた者は一人もいない。では、偉大な学者よ、狩猟民族に代わって言葉を言ってください。」

「あなたたちと私は同じ血を引いています」とモーグリは言い、すべての狩猟民族が使用するクマのアクセントの言葉。

'良い。さて、鳥の話です。』

モーグリは繰り返し、最後に凧の笛を鳴らした。文。

「さあ、蛇人間の話だ」バギーラが言った。

答えは完全に言葉では言い表せないヒスという音で、モーグリは後ろに足を蹴り上げ、両手を叩いて自分を称賛し、横向きに座るバギーラの背中に飛び乗り、光沢のある肌にかかとで太鼓をたたきながら最悪の事態を引き起こした。 Baloo で思いつくような顔。

'よしよし !ちょっと打撲するほどのことだよ」とヒグマは優しく言いました。 「いつかあなたも私のことを思い出すでしょう。」それから彼は脇を向いて、これらのことをすべて知っている野生のゾウのハティにマスターワードを懇願したことと、ハティが水ヘビからスネークワードを得るためにモーグリをプールに連れて行った経緯をバギーラに話しました。モーグリはそれを発音できなかったし、ヘビも鳥も獣もモーグリを傷つけることはなかったので、ジャングルでのあらゆる事故に対してモーグリはかなり安全になったことを説明した。

「そうすれば、誰も恐れることはありません」とバルーは言葉を切り上げ、彼の頭を撫でた。

Machine Translated by Google

誇りを持って大きな毛皮で覆われたお腹。

「自分の部族を除いては」バギーラは小声で言った。そしてモーグリに大声で「肋骨を大事にしてね、弟よ！」こんなに上下に踊っているのは何ですか？』

モーグリはバギーラの肩の毛皮を引っ張ったり、激しく蹴ったりして自分の意見を通そうとしていました。二人が彼の話を聞いていると、彼は声を張り上げて叫んでいました、「それで私は自分の部族を持って、一日中枝の間を彼らを導いていきます。」

「この新たな愚かさは何ですか、小さな夢想家よ？」バギーラは言った。

「そうだ、そしてバルー爺さんに枝と土を投げつけろ」とモーグリは続けた。「彼らは私にこう約束してくれました。ああ！

「おお！」バルーの大きな足がバギーラの背中からモーグリをすくい上げ、少年が大きな前足の間に横たわると、クマが怒っているのが見えました。

「モーグリ、あなたはバンダルログ、つまりモンキーピープルと話しているんですね。」とバルーが言いました。

モーグリはパンサーが...
そしてバギーラの目は翡翠の石のように硬かった。

「あなたは、モンキーピープル、灰色の猿、法のない人々、あらゆるものを食べる人々と一緒にいました。

それは大変恥ずべきことだ。』

「バルーが私の頭を傷つけたとき、」とモーグリは言いました（彼はまだ仰向けでした）、「私が立ち去ったとき、灰色の類人猿が木から降りてきて、私を憐れみました。」他の誰も気にしませんでした。彼は少し鼻を鳴らした。

「モンキーピープルの哀れさ！」バルーは鼻を鳴らした。『渓流の静けさ !夏の涼しさ

Machine Translated by Google

太陽 !それから、おとこ ?』

「それから、そしてまた、彼らは私にナッツやおいしい食べ物をくれました、そして彼らは私を腕に抱えて木のてっぺんまで運び、私には尻尾がないことを除いては血のつながった兄弟だと言いました、そしてそうあるべきですいつか彼らのリーダーになるだろう。』

「彼らには指導者がいない」とバギーラ氏は語った。 '彼らはうそをつきます。彼らはいつも嘘をついていたのです。』

「彼らはとても親切で、また来ようと言ってくれました。なぜ私はモンキーピープルの中に入れられなかったのですか ?彼らも私と同じように自分の足で立っています。彼らは硬い足で私を殴ることはありません。彼らは一日中遊んでいます。起きさせてください !悪いバルー、許してくれ !
また一緒に遊びますよ。』

「聞いて、この子熊」とクマは言いました。その声は暑い夜の雷のように鳴り響きました。

「私はあなたに、木々に住む猿の民を除いて、ジャングルのすべての人々のためにジャングルの法則をすべて教えました。彼らには法律がありません。彼らは追放者だ。彼らは自分自身の言葉を持たず、耳を傾けたり、のぞき見したり、枝の上で待っているときに盗み聞きした言葉を使います。彼らのやり方は私たちのやり方ではありません。彼らにはリーダーがいません。彼らには記憶力がありません。彼らは自慢したりおしゃべりしたり、自分たちがジャングルで偉業を成し遂げようとしている偉大な人々であるかのように振る舞っていますが、木の実が落ちただけで彼らの心は笑いに変わり、すべてが忘れられてしまいます。ジャングルに住む私たちには彼らとは関わりがありません。私たちは猿が飲むところでは飲みません。私たちは猿が行くところには行きません。彼らが狩る場所で私たちは狩りをしません。彼らが死ぬところで私たちは死ぬわけではありません。今日まで私がバン•ダル•ログについて話しているのを聞いたことがありますか ?』

「いいえ」とモーグリはささやき声で言いました。森はとても険しかったからです。

Machine Translated by Google

まだバルーは終わっていた。

「ジャングルの人々は彼らのことを彼らの口から、そして彼らの心から追い出しました。彼らは非常に多く、邪悪で、汚く、恥知らずであり、もし彼らに一定の欲求があるなら、ジャングルの人々に注目されることを望んでいます。しかし、彼らが私たちの頭に木の実や汚物を投げつけても、私たちは彼らに気づきません。」

木の実や小枝の雨が枝の間から降り注いだとき、彼はほとんど話さなかった。そして細い枝の間で咳や遠吠え、そして怒って飛び跳ねる音が聞こえた。

「モンキーピープルは禁じられています」とバルーは言った、「禁じられています-」ジャングルの人々の巣窟。覚えて。'

「禁じられています」とバギーラは言いました。「でも、バルーはあなたに警告すべきだったと今でも思います。」

「私は――私は？」彼があんなに汚いもので遊ぶとはどうやって予想したんだろう。モンキーピープル！ふふふ！

新鮮なシャワーが頭の上に降り注ぎ、二人はモーグリを連れて小走りで立ち去った。バルーが猿について言ったことは完全に真実だった。彼らは木のてっぺんに属しており、獣が上を見上げることはめったにないので、サルとジャングルの人々がお互いの道を横切る機会はありませんでした。しかし、病気のオオカミ、負傷したトラ、クマを見つけるたびに、猿たちは彼を苦しめ、面白半分で、そして注目されることを期待して、どんな獣にも棒や木の実を投げました。それから彼らは、意味のない歌を叫び、金切り声を上げ、ジャングルの人々を木に登って戦うように誘ったり、彼らの間で何もないことをめぐって激しい戦いを始めたり、死んだサルをジャングルの人々が見える場所に置いたりしました。彼らはいた

Machine Translated by Google

常に指導者がいて、独自の法律や慣習があればいいのに、そんなことはなかった。なぜなら、彼らの記憶はその日ごとに保持されないからである。そこで彼らは、「バンダルとは何だ」ということわざをでっち上げて物事を妥協した-log ジャングルは後で考えるだろう、と今考えてください。」そしてそれは彼らを大いに慰めました。どの獣も彼らに近づくことができませんでしたが、その一方で、どの獣も彼らに気付かなかったのです。だからこそ、モーグリが遊びに来たとき彼らはとても喜び、バルーがどれほど怒っているかを聞いたのです。

彼らはそれ以上のことをするつもりはまったくありませんでした。Bandar-log にはまったく意味がありませんでした。しかし、彼らのうちの一人が彼にとって素晴らしいアイデアを発明し、モーグリは風を防ぐために棒を編むことができるので、部族に留めておくのに役立つ人物であると他の全員に言いました。それで、もし彼らが彼を捕まえたら、彼らは彼に彼らに教えさせることができました。もちろん、モーグリは木こりの子供として、あらゆる種類の本能を受け継ぎ、どうやってそれを作るようになったのか考えずに、落ちた枝で小さな小屋を作っていました。木の上で見ていたサル•キー•ピープルたちは、彼の劇が最も素晴らしいと考えた。今度こそ、彼らは本当にリーダーを持ち、ジャングルで最も賢い人々になるつもりだ、と彼らは言いました - あまりに賢いので、他の誰もが彼らに気づき、羨望するでしょう。

そのため、彼らは昼寝の時間になるまで、ジャングルの中をとても静かにバルー、バギーラ、モーグリを追って行きました。そしてモーグリは自分自身を非常に恥ずかしく思って、これ以上することはないと決心してヒョウとクマの間で眠りました。モンキーピープルと一緒に。

次に彼が思い出したのは、自分の脚と腕に手が置かれている感触だった――硬くて強い小さな手――そして、

Machine Translated by Google

顔に枝が打ち寄せ、それからバルーが深い叫び声でジャングルを目覚めさせ、バギーラが歯をすべてむき出しにして幹を跳ね上がるのを、揺れる枝の間から見つめていた。バンダルログは勝ち誇ったように吠え、バギーラが従わなかった上の枝に逃げていき、「彼は私たちに気づいた！」と叫びました。バギーラは私たちに気付かなかった。ジャングルの人々は皆、私たちの技術と狡猾さを賞賛しています。」それから彼らは飛行を始めた。そして、樹林帯を通るモンキーピープルの飛行は、誰も説明できないものの一つです。彼らには通常の道路と交差点、丘の上り下りがあり、すべて地上 50 フィートから 70 フィート、または 100 フィートの高さに配置されており、必要に応じて夜間でも移動できます。最も強いサルのうちの 2 匹がモーグリを脇の下に捕まえ、彼と一緒に木々のてっぺんを通って 20 フィートの高さで飛び去りました。

もし彼らが一人だったら、2倍の速さで進んだかもしれないが、少年の体重が彼らを阻んだ。モーグリと同じように気分が悪くてめまいがしていた彼は、ワイルドなラッシュを楽しまずにはいられなかったが、遥か下方にちらりと見える大地が彼を怖がらせ、何もない空気の上でブランコの終わりにあるひどいひっくり返りとジャークが彼の心を自分の心の中に引き戻した。歯。

付き添いの者が彼を木に駆け上らせ、巣の一番上の細い枝がその下でパチパチと折れ曲がるのを感じると、咳き込み、ヒューヒューという音を立てて空中に向かって外側と下に飛び上がり、彼らの手でぶら下がったり、引き上げたりした。足を隣の木の下肢に近づけます。

マストの上にいる男が海の向こう何マイルも見渡すことができるように、彼はまだ緑のジャングルを何マイルも先まで見渡すことができ、その後、枝や葉が激しく打ちつけられることもありました。

Machine Translated by Google

そうすれば、彼と彼の二人の護衛は、ほとんど地に戻るところだった。それで、バンダルログの部族全体が、はねたり、ぶつかったり、叫び声を上げたりしながら、捕虜のモーグリとともに木々の道をなぎ倒しました。

しばらくの間、彼は落とされるのではないかと恐れていた。それから彼は怒り始めましたが、苦労するよりもよく知っていて、それから考え始めました。最初にしたことは、バルーとバギーラに連絡を返すことでした。サルのペースでは、友人たちが遠くに置き去りにされるだろうと彼は知っていたからです。下を向いても意味がありませんでした。枝の上面しか見えなかったので、上を見つめると、はるか遠くの青い空に、凧のランがバランスを取りながら車輪を動かしながら、ジャングルで物が死ぬのを待っているのが見えました。ランは、サルが何かを運んでいるのを見て、その荷物が食べられるかどうかを調べるために数百メートル下に降りました。モーグリが木のてっぺんまで引きずり上げられていくのを見て、モーグリが凧に呼びかけるのを聞いたとき、彼は驚いて口笛を吹いた――「あなたと私は血が同じだ」。枝の波が少年の上に迫ったが、チルはバランスをとって次の木に向かい、小さな茶色の顔が再び浮かび上がってくるのを見た。 「私の跡をマークしてください！」モーグリは叫びました。 「SeeoneeのPackのBalooとCouncil RockのBa-gheeraに伝えてください。」

「誰の名前で、兄弟？」ランはモーグリを一度も見たことがなかったが、もちろんモーグリについて聞いたことはあった。

「モーグリ、カエル。彼らは私を呼んでいます !私の軌跡をマークしてください！

空中に振り回されながら最後の言葉は金切り声でしたが、ランはうなずき、塵にしか見えなくなるまで立ち上がって、そこでぶら下がって見守っていました。

Machine Translated by Google

望遠鏡の目で、モーグリの護衛が旋回するときの梢の揺れを見つめた。

「彼らは決して遠くへは行かないよ」と彼は笑いながら言った。 「彼らは自分たちがやろうとしたことを決してやりません。常に新しいものをつついているのがBandar-logです。今回、私が少しでも視力があるとすれば、彼らは自分たちで問題をつついてきたのです。なぜなら、バルーは駆け出しではないし、私が知っているように、バギーラはヤギ以上のものを殺すことができるからです。」

それで彼は翼を揺らし、足を下に集めて待ちました。

その間、バルーとバギーラは怒りと悲しみで激怒していた。バギーラはこれまで登ったことがなかったので登ったが、細い枝が彼の体重で折れ、爪が樹皮でいっぱいになって滑り落ちた。

「どうして子熊に警告しなかったのですか？」彼は、猿たちを追い越そうとぎこちない速足で出発した哀れなバルーに向かって怒鳴った。 「あなたが彼に警告しなかったら、彼を打撃で半殺しにしたことに何の意味があるでしょうか？」

「急げ！おお急ぎなさい！私たちは――まだ捕まえられるかも知れません！」バルーは息を呑んだ。

『そのスピードで！負傷した牛を疲れさせることはありません。法の教師、子牛を殴る者、あれが 1 マイルも往復すると、体が破裂してしまうだろう。じっと座って考えてください！計画を立てる。追いかけている場合ではありません。私たちが近づきすぎると、彼らは彼を落とすかもしれない。』

『アルーラ！うわー！彼らは彼を運ぶのに疲れて、すでに彼を落としてしまったかもしれない。 Bandar-log を誰が信頼できるでしょうか?
死んだコウモリを私の頭に乗せてください！黒骨を食べさせてください！刺されて死ぬかもしれないので、私を野生のミツバチの巣に転がして、ハイエナと一緒に埋めてください、私はとても悲惨だから-

Machine Translated by Google

クマのブル !アルララ !わおおお !おおモーグリ、モーグリ !なぜ私はあなたの頭を折る代わりに、モンキーフォークに対して警告しなかったのですか ?今では、おそらく私がその日のレッスンを彼の頭から追い払ってしまったかもしれない、そして彼はマスターの言葉なしでジャングルの中で一人になるでしょう。」

バルーは前足で耳を押さえ、うめき声を上げながら転がり回りました。

「少なくとも、彼は少し前にすべての言葉を私に正確に教えてくれました」とバギーラは焦りながら言いました。 「バルー、あなたには記憶も敬意もありません。もし私、ブラックパンサーがヤマアラシのイッキのように体を丸めて吠えたら、ジャングルはどう思うでしょうか？

「ジャングルが何を考えているかなんて気にしない？」彼はもう死んでいるかもしれない。』

「スポーツで枝から落としたり、怠惰で殺したりしない限り、私はこの子を恐れることはありません。彼は賢明でよく教育されており、そして何よりもジャングルの人々を恐れさせる目を持っています。しかし（そしてそれは大きな悪ですが）彼はバンダルログの支配下にあり、彼らは木の上に住んでいるために、私たちの人々を恐れることはありません。」バギーラは考え込むように片方の前足をなめました。

「私なんてバカだ！」ああ、私は太っていて、褐色で、根掘り葉掘りの愚か者だ」とバルーは言い、ぐいっと体をほどきながら言った、「野生の象のハティが言うことは真実です。『それぞれが自分の恐怖に従う』。そして彼ら、バンダルログは、ロックスネークのカーを恐れています。彼は彼らと同じように上手に登ることができる。彼は夜に若い猿を盗みます。彼の名前のささやきは、彼らの邪悪な尻尾を冷たくします。カアのところに行きましょう。』

「彼は私たちに何をしてくれるでしょうか？」彼は足なので、私たちの部族の者ではありません。

Machine Translated by Google

それよりも、そして最も邪悪な目で見られました」とバギーラは言いました。

「彼はとても年をとっていて、とても狡猾な男だ。何よりも彼はいつも

お腹空いたよ」とバルーは期待を込めて言った。 「ヤギをたくさん飼うと約束してください。」

「彼は一度食事をすると丸一ヶ月眠ります。彼は今眠っているかもしれないし、たとえ起きていたとしても、自分のヤギを殺してしまったらどうするだろうか？」カーのことをあまり知らなかったバギーラは当然ながら疑念を抱いた。

「その場合は、あなたと私が一緒に、老狩人が彼に理性を理解させるかもしれません。」ここで、バルーは色あせた茶色い肩をパンサーにこすりつけ、彼らはロックパイソンのカーを探しに出かけました。

彼らは、彼が午後の日差しの暖かい棚の上で体を伸ばし、美しい新しい毛皮に見とれているのを見つけました。なぜなら、彼はここ10日間、肌を変えるために隠居生活を送っていたからです。そして、今では彼はとても立派になっていて、大きな丸い鼻をなびかせていました。地面に叩きつけられ、体30フィートを幻想的な結び目や曲線にひねり、これから来る夕食のことを考えながら唇をなめていた。

「彼は何も食べていません」と、美しく斑点のある茶色と黄色のジャケットを見るやいなや、バルーは安堵のうめき声を上げて言いました。 「気をつけろ、バギーラ！」彼は肌を変えた後はいつも少し目が見えなくなり、非常に素早く攻撃します。」

カーは毒蛇ではなかった――実際、彼はむしろ毒蛇を卑怯者として軽蔑していた――しかし、彼の強さは抱擁にあり、一度巨大なとぐろを誰かに巻きつけてしまえば、それ以上言うことはなかった。 「良い狩りをしましょう！」バルーはおしりをついて座りながら叫んだ。同種の他のヘビと同様に、カーも耳が遠く、最初はその鳴き声が聞こえませんでした。それから彼は、頭を低くして、どんな事故にも備えて丸まって-

Machine Translated by Google

えっと。

「我々全員にとって良い狩りができました」と彼は答えた。 「ああ、バルー、ここで何をしているの？」良い狩りをしてね、バギーラ。私たちのうちの一人は少なくとも食べ物が必要です。進行中の試合に関するニュースはありますか?今は雌鹿ですか、それとも若い雄鹿ですか？私は乾いた井戸のように空っぽです。』

「私たちは狩りをしているんです」とバルーは何気なく言った。彼はカーアを急いではいけないことを知っていました。彼は大きすぎます。

「一緒に来る許可をください」とカーは言いました。 「バギーラもバルーも、あなたにとって打撃など大したことはないが、私は――何日も木道で待ち続け、若い猿の偶然を頼りに半夜かけて登らなければならない。プシャー！枝は私が若い頃のものではありません。腐った小枝と乾いた大枝がすべてだ。』

「もしかしたら、あなたの体重が重いのは何か関係があるのかもしれません」
問題だ」とバルーは言った。

「私はかなりの長さです、かなりの長さです」とカーは少し誇らしげに言いました。 「しかし、それはすべて、この新しく成長した木材のせいです。最後の狩りで、危うく転びそうになった――まさにその寸前だった――そして尻尾が木にしっかりと巻き付いていなかったので滑る音でバンダル丸太が目を覚まし、彼らは私を最も邪悪な名前で呼んだ。」

「足のない黄色いミミズだ」バギーラが何かを思い出そうとしているかのように、ひげの下で言った。

「スッスッ！」彼らは私をそう呼んだことがありますか？とカアは言った。

「先月、彼らは私たちにそのようなことを叫びましたが、私たちは彼らに気づきませんでした。彼らは何でも言うでしょう――たとえあなたが歯をすべて失ったとしても、子供より大きなものには直面しないでしょう、なぜなら（彼らは確かにそうです）

Machine Translated by Google

恥知らずよ、このバンダルログ)――あなたは雄ヤギの角を恐れているからだ」とバギーラは優しく続けた。

さて、ヘビ、特にカーのような用心深い年老いたニシキヘビは、怒っている姿をほとんど見せませんが、バルーとバギーラには、カーの喉の両側にある大きな嚥下の筋肉が波打ち、膨らむのが見えました。

「バンダルログは拠点を移しました」と彼は静かに言った。 「今日、太陽の下に上がると、木のてっぺんの間で彼らの鳴き声が聞こえました。」

「それは――我々が今追っているのはバンダルログだ」とバルーは言ったが、その言葉は喉に詰まった。なぜなら、ジャングルの民の一人がその行為に興味を持ったのは彼の記憶の中でそれが初めてだったからである。猿の。

「疑いの余地なく、そのような二人のハンター――彼らのジャングルのリーダーであると私は確信している――をバンダルログの跡に連れて行くのは、決して小さなことではありません」とカーは好奇心を膨らませながら丁寧に答えた。

「確かに」バルーは話し始めた、「私はシーオニーの子オオカミたちにとって、年老いた、そして時には非常に愚かな法の教師にすぎません。そしてここのバギーラは――」

「バギーラです」とブラックパンサーは言いましたが、彼は謙虚であることを信じていなかったので、顎をパチンと閉じました。 「問題はそこだよ、かぁ。あの木の実泥棒やヤシの葉を摘む者たちが、おそらくあなたも聞いたことがある私たちの子猫を盗んできたのです。」

「一騎（羽ペンのせいで生意気だ）から、人間がオオカミの群れに入ったという知らせを聞いたが、私は信じなかった。イッキは聞き半分で非常に悪く言われた話でいっぱいです。」

Machine Translated by Google

「しかし、それは本当です。彼はこれまでにないような男です」とバ•ルーは言いました。 「最も優秀で、最も賢明で、最も大胆な人間の子、私自身の弟子であり、ジャングル全体にバルーの名を有名にするでしょう。それに、私は――私たちは――彼を愛しています、カー」

っ !っ !カアは頭を前後に動かしながら言った。 「私も愛が何なのかを知りました。私が言える話があります――』

「きちんと賞賛するには、私たち全員が十分に栄養を摂って晴れた夜が必要です」とバギーラがすぐに言いました。 「私たちの子猫は現在バンダルログの手に渡っていますが、ジャングルの民の中で彼らが恐れているのはカーだけだということはわかっています。」

「彼らは私一人を恐れています。彼らには正当な理由がある」とカーは言った。
「おしゃべり、愚か、虚栄心、虚栄心、愚かさ、そしておしゃべり、それが猿だ。しかし、人間の物が彼らの手に渡った場合、幸運は得られません。彼らは拾った木の実に飽きて、それを投げ捨てます。彼らは枝を使って素晴らしいことをするという意味で半日かけて枝を運び、その後枝を真っ二つに折ります。その人間性は羨ましいものではありません。彼らは私を「黄色い魚」とも呼んでいました。

「ミミズ、ミミズ、ミミズ」とバギーラは言った。
その他のことは、恥ずかしくて今は言えません。」
「私たちは彼らに主人のことをよく言うように思い出させなければなりません。
ああ、ssp私たちは彼らのさまよう記憶を助けなければなりません。さて、彼らは子熊を連れてどこへ行ったのですか？』
「ジャングルだけが知っている。日没に向かって、私は信じています」とバルーは言いました。 「私たちはあなたなら知っているだろうと思っていました、カア。」
'私？どうやって？邪魔なときは連れて行きますが、バンダル丸太やカエル、さらには水場の緑のカスなどは狩りません。」

「アップ、アップ！」アップ、アップ！こんにちは！イロ！イロー、見上げて、バルー

Machine Translated by Google

ねえ、ウルフパック！

声がどこから来たのかバルーが見上げると、上を向いた翼のフランジを太陽の光で照らしながら、鳶のランが降りてきました。ランの就寝時間近くだったが、ランはクマを探してジャングル中を歩き回っていて、深い葉の中でクマを見逃してしまった。

'それは何ですか？'バルーは言った。

「バンダルログの中にモーグリを見たことがあります。彼は私にそれを言うように言った。私は見ました。バンダルログは彼を川を越えて猿の街、つまり冷たい隠れ家に連れて行きました。彼らはそこに一晩、あるいは十泊、あるいは一時間滞在するかもしれません。私はコウモリたちに暗い間も見守るように言いました。それが私のメッセージです。下の皆さん、良い狩りをしてください！

「いっぱいの渓谷と深い眠りをあなたに、ラン」とバギーラが叫びました。 「私は次の殺害であなたのことを思い出し、あなたのためだけに首を脇に置きます、おお最高の凧よ！」

「何もないよ。それは何でもありません。少年はマスターワードを手にしていた。私もそれ以上のことはできなかった』と言って、ランは再びねぐらに戻った。

「彼は舌を使うことを忘れていませんでした」とバルーは誇らしげに笑いながら言った。 「こんなに若い人が、木々を渡って引っ張られている間、鳥たちへのマスターワードも覚えていたとは！」

「それは彼に最もしっかりと植え付けられました」とバギーラは言いました。 'しかし、私私は彼を誇りに思っています、そして今私たちは冷たい隠れ家に行かなければなりません。」

彼らは皆、その場所がどこにあるのか知っていましたが、ジャングルの人々でそこに行ったことがある人はほとんどいませんでした。なぜなら、彼らが冷たい隠れ家と呼んでいた場所は、ジャングルに失われ埋もれた古い人けのない都市であり、人間がかつて持っていた場所を獣が使用することはめったにありませんでした。使用済み。

Machine Translated by Google

イノシシはそうしますが、狩猟民族はそうしません。その上、サルたちはどこにでも生息していると言えるほどそこに生息しており、半ば廃墟となったタンクや貯水池に少し水が溜まる干ばつの時を除いて、自尊心を持った動物はその目に入ってくることはありませんでした。

「全速力で半晩の旅です」とバギーラが言うと、バルーはとても真剣な表情を浮かべた。 「できるだけ早く行きます」と彼は不安げに言いました。

「私たちはあなたを待つ勇気はありません。ついて来い、バルー。続けなければなりません足の速い人、カアと私。」

「足があろうがなかろうが、私はあなたの四人全員を追い続けることができます」とカーはすぐに言った。バルーは急いで行こうとしたが、息を切らしながら座らなければならなかったので、バギーラが素早いヒョウ駈歩で前に急いでいる間、彼らはバルーを後から来るように残した。
カーは何も言わなかったが、バギーラが頑張って、巨大なロックパイソンが彼と同じ高さを保った。彼らが丘の小川に差し掛かったとき、バギーラはカーが泳いでいる間、頭と首の2フィートが水を払って飛び跳ねて渡ったので、勝ちましたが、平地ではカーがその距離を埋め合わせました。

「私を解放してくれた壊れた錠のおかげで」と夕闇が落ちたとき、バギーラは言いました。「あなたは決してゆっくりではありません！」

「お腹がすいた」とカーは言いました。 「それに、彼らは私を斑点のあるカエルと呼んでいました。」

「ミミズ、ミミズ、おまけに黄色です。」

『全部ひとつ。続けましょう』と言うと、カーは地面に沿って身を投じて、安定した目で最短の道を見つけてそれを守り続けているようでした。

冷たい隠れ家では、猿人たちはモーグリの友達のことをまったく考えていませんでした。彼らはその少年を

Machine Translated by Google

ロストシティ、そして当時はとても満足していました。モーグリはこれまでインドの都市を見たことがなく、ほとんど遺跡の山でしたが、とても素晴らしく素晴らしいものに見えました。どこかの王が昔、小さな丘の上にそれを建てました。使い古して錆びた蝶番に最後の木の破片がぶら下がっていた荒廃した門まで続く石造りの土手の痕跡を今でも辿ることができます。木々は壁の中にも外にも伸びていました。胸壁は倒れて朽ち果てており、野生のつる植物が塔の窓から壁に茂って垂れ下がっていました。

屋根のない大きな宮殿が丘の頂に建っており、中庭と噴水の大理石は割れて赤と緑に染まり、王の象が住んでいた中庭の石畳そのものが、虫によって突き上げられ、引き裂かれていた。草と若い木。宮殿からは、真っ黒で満たされた空の蜂の巣のように見える都市を構成する屋根のない家が何列も続いているのが見えました。 4つの道路が交わる広場の偶像だった形のない石の塊。かつて公共の井戸があった街角の穴やくぼみ、側面に野生のイチジクが芽生えた粉々になった寺院のドーム。サルたちはその場所を自分たちの街と呼び、彼らが森に住んでいるという理由でジャングルの民を軽蔑しているふりをしました。しかし、彼らはその建物が何のために作られたのか、またどのように使用するのか全く知りませんでした。彼らは王の会議室の広間に輪になって座り、ノミを掻いたり、男のふりをしたりした。あるいは、屋根のない家に出入りして、隅にある漆喰や古いレンガの破片を集めて、どこに隠したか忘れてしまったり、

Machine Translated by Google

群衆の乱闘の中でケンカしたり泣いたり、そして王の庭園のテラスを上り下りして遊んだり、そこでバラの木やオレンジを激しく揺らして、果物や花が落ちるのを眺めたりしました。彼らは宮殿内のすべての通路や暗いトンネル、そして何百もの小さな暗い部屋を探索しましたが、何を見て何を見ていなかったかは決して覚えていませんでした。そして一人や二人、あるいは群衆が互いに「自分たちは人間と同じことをしているのだ」と言い合って歩き回った。
彼らは水槽で水を飲み、水をすべて濁らせ、それからそれをめぐって争い、そして暴徒となって一斉に集まり、叫びました、「ジャングルにはこれほど賢くて善良で賢くて強い人はいない」バンダルログのように優しい。」それからすべてが再び始まり、都市に飽きて、ジャングルの人々が気づいてくれることを期待して木のてっぺんに戻りました。

ジャングルの法則のもとで訓練を受けてきたモーグリは、このような生活を好まなかったし、理解していませんでした。サルたちは午後遅くにモーグリを冷たい隠れ家に引きずり込み、長い旅の後にモーグリがするように眠る代わりに、手をつないで踊り歩き、愚かな歌を歌いました。猿の1匹がスピーチをし、モーグリの捕獲はバンダルログの歴史に新たな出来事をもたらした、と仲間たちに語った。なぜならモーグリは雨や寒さから身を守るために棒と杖を編む方法を彼らに教えようとしていたからだ。 。モーグリは数匹のつる植物を拾い上げて出し入れし始めました、そしてサルたちはそれを真似しようとしました。しかし、ほんの数分で、彼らは興味を失い、友達の尻尾を引っ張ったり、咳き込みながら四つん這いで飛び跳ねたりし始めました。

Machine Translated by Google

「食べたいです」とモーグリは言いました。 「私はジャングルのこの地域ではよそ者です。食べ物を持ってきてください。さもなければ、ここで狩りをする休暇を与えてください。」

20匹か30匹の猿が彼に木の実や野生のポーポーを運んでくるように飛び去っていきました。しかし、彼らは道で喧嘩になり、残った果物を持って戻るのは大変でした。モーグリはお腹が痛くて腹が立っていたので、誰もいない街を歩き回って時々異邦人狩りの呼びかけをしましたが、誰も応答しませんでした。モーグリは本当にひどいところに来てしまったと感じました。 「バルーがバンダルログについて言ったことはすべて真実だ」と彼は心の中で思った。 「彼らには法律も狩猟の呼び声も指導者もいない。あるのは愚かな言葉と小さな泥棒の手だけだ。だからここで私が餓死したり死んだとしても、それはすべて私の責任です。しかし、私は自分のジャングルに戻るように努めなければなりません。バルーはきっと私を倒すでしょうが、バンダルログで愚かなバラの葉を追いかけるよりは良いでしょう。」

彼が城壁に向かって歩くとすぐに、猿たちが彼を引き戻し、自分がどれほど幸せであるか分からないと言い、感謝するために彼をつねりました。彼は歯を立てて何も言わなかったが、叫び声をあげる猿たちとともに、雨水が半分溜まった赤い砂岩の貯水池の上のテラスに向かった。テラスの中央には、100年前に亡くなった女王のために建てられた、白い大理石の廃墟となったサマーハウスがあった。ドーム型の屋根が半分落ちて、王妃たちが出入りする宮殿からの地下通路を塞いでしまった。しかし、壁は大理石の網目模様でできていました。瑪瑙やサンシュユ、碧玉やラピスラズリがはめ込まれた美しい乳白色の透かし彫りで、月が丘の後ろから昇ってくると、

Machine Translated by Google

それは開いた作品を通して輝き、黒いベルベットの刺繍のように地面に影を落としました。痛くて、眠くて、お腹が空いていたのに、モーグリは、バンダルログが一度に20本ずつ、彼らがいかに偉大で、賢く、強くて、優しいか、そして自分が望むことがいかに愚かであるかを語り始めたとき、笑わずにはいられませんでした。彼らを離れるために。 '我々は素晴らしいです。私たちは自由です。私たちは素晴らしいです。私たちはジャングルの中で最も素晴らしい人々です!私たちは皆そう言うので、それは本当でしょう』と彼らは叫びました。

「さあ、あなたは新しいリスナーであり、ジャングルの人々が将来私たちに気づいてくれるように、私たちの言葉を彼らに伝えることができるので、私たちはあなたたちに私たちの最も優れた自己についてすべて話します。」モーグリは何も反対しなかった。サルたちは何百人もテラスに集まって、自分たちのスピーカーがバンダル•ログを称賛する声を聞くのを聞いていた。そして、スピーカーが息切れして立ち止まるたびに、一斉にこう叫んだ。それは本当です。私たちは皆そう言います。』モーグリはうなずいて瞬きし、彼らが質問すると「はい」と答え、その音とともに頭が回転した。 「ジャッカルのタバキがこの人たち全員を噛んだに違いない」と彼は独り言を言った、「そして今、彼らは狂気に陥っている。確かにこれはデワニー、狂気です。彼らは決して眠らないのでしょうか ?今、その月を覆う雲が来ています。もしそれが十分な大きさの雲だったら、私は暗闇の中で逃げようとするかもしれません。でも疲れたんだ。』

その同じ雲を、城壁の下の荒廃した溝で二人の親友が監視していた。バギーラとカーは、大勢いるモンキーピープルがいかに危険であるかをよく知っていたので、いかなる危険も冒したくなかったからだ。猿は百対一でなければ決して争わないし、ジャングルではそんな勝算を気にする者はほとんどいない。

Machine Translated by Google

「私は西の壁に行きます」とカーはささやきました、「地面の傾斜を有利にして素早く降ります。彼らは数百人になっても私の背中に飛びかかることはないだろうが、しかし――」

「それはわかっています」とバギーラは言った。 「もしバルーがここにいたら、でも私たちはできる限りのことをしなければなりません。その雲が月を覆ったら、私はテラスに行きます。彼らはそこで少年をめぐってある種の評議会を開催している。」

「狩りはうまくいきました」とカーは厳しい表情で言い、西の壁に向かって滑走していきました。たまたまそこが最も被害が少なく、大蛇は石を登る道を見つけるまでにしばらく遅れた。雲が月を隠したので、モーグリが次に何が起こるのかと考えていると、テラスでバギーラの軽やかな足音が聞こえました。ブラックパンサーは、ほとんど音もなく坂道を駆け上がり、モーグリの周りに50、60の深さの円を描いて座っているサルの間を左右に飛び回っていた――噛んで時間を無駄にするよりは賢明だった――。恐怖と怒りの叫び声が聞こえ、バギーラがその下で転がる蹴りの死体につまずいたとき、一匹の猿が叫びました。「ここには一匹しかいない！」彼を殺せ！殺す。'噛み合ったり、ひっかいたり、引き裂いたり、引っ張ったりしながら、もみ合った猿の群れがバギーラに近づき、5、6匹がモーグリを掴み、サマーハウスの壁に引きずり込み、壊れたドームの穴に押し込んだ。 15フィートもの高さから落ちたので、人間に訓練された少年ならひどい打撲傷を負っただろうが、モーグリはバルーが教えたとおりに落ち、その足で着地した。

「そこにいてください」と猿たちは叫びました、「私たちがあなたの友達を殺すまで、そして後で私たちはあなたと遊ぶでしょう - ポイズン•ピーオなら -

Machine Translated by Google

あなたを生かしておいてください。』

「あなたたちと私は同じ血を引いています」モーグリはすぐに蛇の声を出しながら言いました。彼は周囲のゴミの中でガサガサとシューシューという音を聞いたので、確認するためにもう一度電話をかけました。

『すっそ !フードは全部ダウン ! 6人の低い声が言った（インドのすべての遺跡は遅かれ早かれヘビの住処となり、古いサマーハウスにはコブラが生息していた）。 「じっとしていなさい、弟よ、あなたの足が私たちに害を及ぼすかもしれないからです。」

モーグリはできる限り静かに立って、開いた作品を覗き込み、ブラックパンサーの周囲での戦いの猛烈な騒音、つまり叫び声、おしゃべり、乱闘、そして後ずさり、身をよじって下に落ちたバギーラの深くしわがれた咳を聞いていた。彼の敵の山。バギーラは生まれて初めて、命のために戦った。

「バルーはすぐ近くにいるはずだ。バギーラは一人では来なかっただろう』とモーグリは思った。そして彼は大声でこう言った、「戦車へ、バギーラ。」水槽まで転がっていきます。転がって突っ込んでみろ！
水に行きましょう！

バギーラはそれを聞き、モーグリが無事であることを告げる叫び声が彼に新たな勇気を与えた。彼は黙って立ち止まりながら、一寸一寸必死で貯水池に向かってまっすぐに進んだ。
その時、ジャングルに最も近い荒廃した城壁から、バルーの雄叫びが轟き起こった。年老いたクマは最善を尽くしましたが、前に来ることができませんでした。 「バギーラ、私はここにいるよ」と彼は叫んだ。私は登ります !急いでます !アフウォラ !石が足の下で滑り落ちます !私の到着を待ってください、おお最も悪名高きバンダルログよ！

Machine Translated by Google

彼は息を切らしてテラスに上がったが、猿の群れの中に頭の方まで消えてしまったが、おしりを真っすぐに突っ張って、前足を広げて抱きしめられるだけ抱きつき、それから普通のバットで殴り始めた。 -バットバット、外輪の反転ストロークのようなもの。衝突と水しぶきの音でモーグリは、バギーラが猿たちが追えない水槽まで必死に歩いてきたことを語った。パンサーは息を切らして横たわっており、頭を水面から出させている一方、猿たちは赤い階段の深さ3段のところに立って、怒り狂って上下に踊り、もしパンサーが出てきたら四方八方から彼に襲いかかるつもりだった。バルーを助けてください。その時、バギーラは滴る顎を上げ、絶望のあまり、蛇に保護を求めた――「あなたたちと私は血が一つだ」――土壇場でカーが尻尾を向けたと信じていたからだ。テラスの端でサルの下敷きになり、半ば窒息していたバルーですら、ブラックパンサーが助けを求める声を聞くと、クスッと笑わずにはいられませんでした。

カーはちょうど西側の壁を乗り越え、レンチを使って着陸し、笠石を溝に落としたところだった。彼は地面の優位性を失うつもりはなく、長い体の各足が正常に機能していることを確認するために、一度か二度、とぐろを巻いたり、ほどいたりした。その間ずっとバルーとの戦いは続き、バギーラの周りの水槽では猿たちが叫び声をあげ、コウモリのマングはあちこちを飛び回り、ジャングル上での大戦闘の知らせを伝え、ついには野生のゾウのハティまでがラッパを吹き鳴らした。そして、遠く離れたところで、散らばっていたモンキー•フォークの一団が目覚め、冷たい隠れ家の仲間たちを助けるために木道に沿って飛び跳ねてやって来た、そして戦いの騒音が鳴り響いた。

Machine Translated by Google

一日中鳥が何マイルも飛び回っています。それからカーはまっすぐに、素早く、そして殺そうとしたようにやって来ました。ニシキヘビの戦闘力は、全身の力と体重に支えられた頭への強烈な打撃にあります。槍や破城槌、あるいはそのハンドルに宿る冷静で静かな精神によって動かされる半トン近くの重さのハンマーを想像できれば、カーが戦ったときの様子を大まかに想像できるだろう。体長4～5フィートのニシキヘビは、胸をかなり殴れば人間を倒すことができますが、ご存知のとおり、カーは体長30フィートでした。彼の最初のストロークはバルーを囲む観衆の中心に放たれた。黙って口を閉ざして家に送り返されたが、一秒も必要なかった。猿たちは――「カァ！」という叫び声をあげて散り散りになった。かあです !走る !走る！'

何世代にもわたるサルたちは、年長者から聞いた夜泥棒カーの話を聞いて、恐怖を感じて正しい行動をとってきた。カアは苔が生えるように静かに枝を滑り、史上最強の猿を盗み出すことができた。自分自身を枯れ枝か腐った切り株のように見せることができたので、賢い人は枝に捕らえられるまでだまされました。カアはジャングルで猿たちが恐れるすべてのものだった。誰も彼の力の限界を知らず、誰も彼の顔を直視できず、誰も彼の抱擁から生き返ったことがなかったからだ。そこで彼らは恐怖にどもりながら家の壁や屋根に向かって走ったので、バルーは安堵の深呼吸をした。彼の毛皮はバギーラよりもはるかに厚かったが、戦いでひどく苦しんだ。それからカーが初めて口を開いて、シューシューという長い言葉を一つ言いました。すると、遠くの猿たちが冷たい隠れ家の防衛に急いでそこに留まりました。

Machine Translated by Google

彼らは、重みを積んだ枝が彼らの下で曲がり、パチパチ音を立てるまで、縮こまっていた。壁や空き家にいた猿たちは鳴き声を止め、モーグリは街に降り注ぐ静けさの中でバギーラが水槽から上がってくる濡れた脇腹を震わせるのを聞いた。すると再び騒ぎが起こった。猿たちは壁をより高く飛び越えた。彼らは大きな石の偶像の首にしがみつき、胸壁に沿って飛び跳ねながら金切り声を上げ、その一方でモーグリはサマーハウスで踊りながらスクリーンに目を向け、前歯の間でフクロウのファッションを鳴らして自分の脱力ぶりを見せた。怒りと軽蔑。

「あの子をその罠から救い出してください。これ以上は何もできません」とバギーラは息を呑んだ。 「あの子を連れて行きましょう。彼らは再び攻撃するかもしれない。』

「私が命令するまで彼らは動きません。」そのままでいてくれよっ！ 「カー」という音が響き、街は再び静まり返りました。 「私は前に来ることができませんでした、兄弟、しかし、あなたが呼ぶのを聞いたような気がします」—これはバギーラへの言葉でした。

「私は——戦闘中に叫んだかもしれない」とバギーラは答えた。 「バルー、怪我してる？」

「彼らが私を100匹の小さな熊の中に引きずり込んだかどうかはわかりません」バルーは片足を片足ずつ震えながら言いました。 'おお !痛いです。ああ、私たちはバギーラと私たちの命をあなたに負っていると思います。」

'関係ない。マンリングはどこですか？

「ここ、罠の中。よじ登ることはできない』とモーグリは叫びました。壊れたドームの曲線が彼の頭上にあった。

「彼を連れ去ってください。」彼は孔雀のマオのように踊ります。彼は私たちの子供たちを潰すでしょう」と中のコブラが言いました。

Machine Translated by Google

「ハッ！」カーは笑いながら言った、「どこにでも友達がいるよ、このマンリング。」下がってください、マンリング。そしてあなたを隠してください、おお毒の人々よ。私は壁を打ち破ります。」

カーは大理石の網目模様に変色したひび割れが弱点を示しているのを見つけるまで注意深く観察し、頭を軽く二、三回軽く叩いて距離をとり、それから体を六フィート地面から持ち上げて、半分ほど家に送り返した。ノーズファーストでフルパワーの強打を数十発。網戸は壊れて、埃とゴミの雲の中に落ち、モーグリは開口部を飛び越え、バルーとバギーラの間に飛び込み、それぞれの大きな首に腕を回しました。

「怪我をしましたか？」バルーは彼をそっと抱きしめながら言った。

「痛みがあり、お腹が空いています。そして少し打撲傷もあります。でも、ああ、彼らは兄弟たちよ、あなた方にはひどい仕打ちをしました！あなたたちは血を流しています。』

「他の人もね」とバギーラは唇をなめながら言った。
テラスと水槽の周りで猿が死んでいます。

「何でもない、何でもない、もしあなたが無事なら、ああ、すべての小さなカエルの私の誇りよ！」バルーは泣き叫んだ。

「それについては後で判断することにする」とバギーラはモーグリがまったく気に入らない乾いた声で言った。「しかし、ここにいるのはカーアです。私たちはこの戦いで恩義があり、あなたには命の恩義があります。私たちの習慣に従って彼に感謝してください、モーグリ。」

モーグリが振り返ると、大きなニシキヘビの頭が揺れているのが見えました
自分より1フィート上です。

「これがマンリングだ」とカーは言った。「彼の肌はとても柔らかく、パンダルログと何ら変わりません。気をつけてね、マンリング、私がコートを新しく着替えた夕暮れ時に、あなたを猿と間違えないようにね。』

「あなたと私は血がつながっているのです」とモーグリは答えた。「私は取る

Machine Translated by Google

今夜あなたから私の人生を。もしあなたがお腹が空いているなら、私の殺しはあなたの殺しになるでしょう、おおカーよ。」

「ありがとう、リトル・ブラザー」とカーは目を輝かせながら言った。 「それで、ハンターは何をそんなに大胆に殺すことができるでしょうか？」次に彼が海外に行くときは、私もついて行ってほしいとお願いします。』

「私は何も殺しません、私は小さすぎるのですが、私はヤギを使える人に向かってヤギを追います。」あなたが空っぽになったら、私のところに来て、私が真実を話すかどうか見てください。私にはこれに関してはある程度の技術がある[彼は手を差し出した]。もしあなたが罠に陥ったら、私はあなた、バギーラ、そしてバルーに負っている借金をここで返済するかもしれません。

マスターの皆さん、良い狩りをしてください。

「よく言ったね」とバルーがうなり声を上げた。モーグリがとてもきれいに感謝の言葉を返してくれたからである。パイソンはモーグリの肩に軽く頭を一分間落としました。 「勇敢な心と礼儀正しい舌だ」と彼は言った。 「彼らはあなたをジャングルの中を遠くまで連れて行ってくれるでしょう、マンリング。しかし、今は友達と一緒に急いで行きましょう。

行って寝なさい、月が沈むから、その後に起こることはあなたが見るべきものではありません。』

月は丘の後ろに沈み、壁には震える猿の列が群がり、軍壁はぼろぼろの揺れる物の縁のように見えました。バルーが水を飲みに水槽に行き、バギーラが毛皮を整え始めたとき、カーはテラスの中央に滑り出て、カチンと鳴る音を立てて顎を合わせ、サル全員の視線を彼に集めた。

「月が沈む」と彼は言った。 「まだ見えるほどの光はありますか？」

壁からは、木のてっぺんを叩く風のようにうめき声が聞こえた――「わかった、おおカア」。

Machine Translated by Google

'良い。今始まるダンス、飢餓のダンス
カアの。じっと座って見てください。』

彼は頭を右から左に動かしながら、大きな円を描くように二度、三度回転した。それから彼は体を使って輪や八の字を作り始め、柔らかくてにじみ出るような三角形を溶かして正方形や五角形にし、とぐろを巻いた山を作り始め、決して休むことなく、急ぐこともなく、低い鼻歌を止めることもなかった。周囲はどんどん暗くなり、ついには引きずって移動するコイルが消えたが、鱗のカサカサという音が聞こえた。

バルーとバギーラは石のように立ち尽くし、首の毛を逆立て、喉でうなり声を上げ、モーグリはそれを見て不思議に思いました。

「バンダルログ」とカーの声がついに言った、「私の命令なしに足や手を動かしてもいいですか？」話す！'

「あなたの命令がなければ、私たちは足も手も動かすことはできません、おお、カア！」

'良い！一歩ずつ私に近づいてください。』

猿の列はなすすべもなく前に進み、バルーとバギーラも彼らと一緒に堅い一歩を踏み出しました。

「もっと近くに！」 「カー」とシューッと言うと、全員が再び動きました。

モーグリはバルーとバギーラに手を置いて、彼らを遠ざけようとしました。すると、二匹の大きな獣は夢から覚めたかのように動き始めました。

「手を私の肩に置いてください」バギーラはささやきました。

「そこに置いておいてください、そうでないと私は戻らなければなりません—カーのところに戻らなければなりません。」
ああ！

「年老いたカーが砂ぼこりの上で円を描いているだけだ」とモーグリは言いました。 「行きましょう。」そして三人は壁の隙間からジャングルへと滑り落ちた。

Machine Translated by Google

「おお！」再び静かな木々の下に立ったとき、バルーは言いました。 「もう二度とカーの味方にはならない」と彼は体を震わせた。

「彼は私たちよりも多くのことを知っています」とバギーラは震えながら言った。 「もし私がここに留まっていたら、もう少ししたら彼の喉元を通り抜けることができたはずです。」

「月が再び昇る前に、多くの人がその道を通るでしょう」とバルーさんは語った。 「彼は自分なりのやり方で、良い狩りをするだろう。」

「しかし、それは一体どういう意味だったのでしょうか？」モーグリはニシキヘビの魅惑的な力について何も知りませんでした。
「私が見たのは、暗くなるまで愚かな旋回をしている大きな蛇だけでした。そして彼の鼻はずっと痛かった。ほー !ホー！

「モーグリ、」とバギーラは怒って言いました、「あなたのせいで彼の鼻が痛かったのです。私の耳、脇腹、足、そしてバルーの首と肩があなたのせいで噛まれているのと同じです。」バルーもバギーラも、何日も楽しく狩りをすることはできないでしょう。」

「何でもないよ」バルーは言った。 「また人間の子が来たよ。」

「その通りだが、彼は私たちに、狩りに費やしたかもしれない時間を、傷を負わせ、髪の毛を傷つける――私は背中を半分むしり取られている――そして最後に名誉のために、多大な犠牲を払った。というのは、覚えておいてください、モーグリ、私はブラックパンサーであり、カーに保護を求めることを余儀なくされ、バルーと私は両方ともハンガーダンスによって小鳥のように愚かにされたからです。このすべては、あなたがバンダルログで遊んだことから来ました。」

「本当だよ、本当だよ」とモーグリは悲しそうに言いました。 「私は邪悪な人間で、私のお腹は悲しんでいます。」

「お母さん！」ジャングルの法則には何と書いてあるの、バルー？』

バルーはモーグリをこれ以上苦しめたくなかった。

Machine Translated by Google

しかし、法を改ざんすることはできなかったので、彼はこうつぶやいた、「悲しみが罰として残ることは決してない」。でも覚えておいてください、バギーラ、彼はとても小さいのです。」

「覚えておきますよ。でも彼はいたずらをして、殴ってしまいました。
今すぐ対処しなければなりません。モーグリ、何か言いたいことはある？』
'何もない。私は間違いをした。バルーもあなたも負傷しています。それはただのことだ。』

バギーラはパンサーの観点から彼に6回の愛情タップを与えました（彼らは自分の子供を目覚めさせることはほとんどなかったでしょう）、しかし7歳の男の子にとって、それらはあなたが望むのと同じくらい激しい殴打に相当しました避けるために。すべてが終わったとき、モーグリはくしゃみをして、何も言わずに立ち上がった。

「さて、弟よ、私の背中に飛び乗って、家に帰ります。」とバギーラが言いました。

ジャングルの法則の美しさの 1 つは、罰によってすべてのスコアが解決されることです。その後のしつこさはありません。
モーグリはバギーラの背中に頭を預けて深く眠り、家の洞窟に寝かされたときは一度も目を覚まさなかった。

Machine Translated by Google

のロードソング
バンダルログ

さあ、私たちは飛び上がった花綱に乗って、
嫉妬深い月の途中まで行きます！
私たちの傲慢なバンドが羨ましくないですか？
手がもっとあればよかったと思いませんか？
あなたの尻尾がキューピッドの弓の形に曲がっていたら、そう思
いませんか?
今、あなたは怒っていますが、気にしないでください、兄
弟、あなたの尻尾は後ろに垂れています！

ここで私たちは枝の多い列に座って、私たち
が知っている美しいものについて考えています。私たちが
行おうとしている行為を夢見て、 1～2分ですべてが完
了します。 高貴で賢明で善良なことです。 できれ
ばと願うだけで完了します。

私たちは忘れていましたが、気にしないでください、
兄弟、あなたの尻尾は後ろに垂れています！

私たちがこれまでに聞いたすべての
話は、コウモリや獣や鳥によって発せら
れました—皮やひれ、鱗や羽—素早く
一斉にジャバー！

Machine Translated by Google

素晴らしい !素晴らしい !もう一度！

今、私たちは男性と同じように話しています！
ふりをしましょう...気にしないでください、兄
弟、あなたの尻尾は後ろに垂れています！
これが猿族のやり方だ。

それから、松の間をすり抜ける私たちの跳躍のラインに加わり、そのロケットは、
軽くて高く、山ぶどうが揺れる場所のそばで。
我々が目覚めるゴミと、我々が発する高貴な騒音の傍らで、必ず、必ず、我々は
素晴らしいことをするつもりだ！

Machine Translated by Google

'虎 !虎！'

狩猟はどうですか、ハンターボールド？

兄さん、時計は長くて冷たかったよ。

あなたがたは採石場の何を殺しに行ったのですか？

兄さん、彼はまだジャングルで農作物を作っています。

あなたの誇りを作った力はどこにありますか？

兄さん、それは私の脇腹と横から引いていきます。

あなたが急ぐ速さはどこにあるのですか？

兄弟、私は死ぬために自分の隠れ家に行きます。

さて、最初の物語に戻らなければなりません。カウンシル•ロックでのパックとの戦いの後、モーグリがオオカミの洞窟を出たとき、彼は村人たちが住んでいる耕地に降りましたが、そこはジャングルに近すぎたため、そこには立ち寄ろうとはしませんでした。彼は評議会で少なくとも一人の悪い敵を作った。それで彼は谷を下る荒れた道を走り続け、20マイル近くを小走りでたどって、知らない国に到着しました。渓谷は岩が点在し、蔓植物によって切り取られた広大な平原へと広がっていました。一方の端には小さな村があり、もう一方の端にはうっそうとしたジャングルが放牧地まで一気に下りてきて、まるで鍬で切り取られたかのようにそこで止まっていました。

平原のいたるところで、牛や水牛が草を食んでいました。そして、群れを管理している小さな男の子たちがモーグリを見たとき、彼らは

Machine Translated by Google

叫び声を上げて逃げ出すと、インディアンのどの村にもぶら下がっている黄色いパライア犬が吠えました。モーグリはお腹が空いていたので歩き続け、村の門に来ると、夕暮れ時に門の前にあった大きないばらの茂みが脇に押しやられているのが見えました。

「うーん！」というのは、食事をした後で夜の散歩をしているときに、そのようなバリケードに複数回遭遇したからであると彼は言った。 「だから、ここでも人々はジャングルの民を恐れているのです。」彼は門のそばに座り、男が出てくると立ち上がって口を開け、下を指さして食べ物が欲しいことを示しました。男はじっと見つめ、司祭を呼びながら村の一通りを駆け上がった。司祭は額に赤と黄色の跡のある、白い服を着た大柄で太った男だった。司祭が門のところにやって来ました。彼と一緒に少なくとも100人の人々がやって来ました。彼らはモーグリを見つめ、話し、叫び、指差しました。

「マナーなんてないんだよ、このメン•フォークたちは」とモーグリは独り言を言った。 「彼らと同じように行動するのは灰色の類人猿だけだ。」そこで彼は長い髪を後ろに投げ、群衆に向かって眉をひそめた。

「何を恐れることがあるでしょうか？」司祭は言いました。 「彼の腕と足の跡を見てください。それらはオオカミに噛まれた跡です。
彼はジャングルから逃げてきたオオカミの子にすぎません。」

もちろん、一緒に遊んでいる間、子グマは意図したよりも強くモーグリをつまむことがよくあり、腕と脚全体に白い傷跡が残っていました。しかし、彼は本当の噛みつきが何を意味するかを知っていたため、これらの噛みつきをこの世で最後の人間にするだろう。

『アレ！アレ！二人か三人の女性が一緒に言いました。 「狼に噛まれるなんて、かわいそうな子よ！」彼はハンサムな男の子です。彼は持っています

Machine Translated by Google

赤い炎のような目。名誉にかけて言っておきます、メスア、彼は虎に連れ去られたあなたの少年と何ら変わりません。」

「見させてください」手首と足首に重い銅の指輪をした女性がそう言い、手のひらの下でモーグリを見つめた。 「実際、彼はそうではありません。彼はもっと痩せていますが、見た目は私の息子にそっくりです。」

司祭は賢い人で、メスアがその場所で最も裕福な村人の妻であることを知っていました。そこで彼は一分間空を見上げて、厳かにこう言った、「ジャングルが奪ったものをジャングルは取り戻した。 『私の妹よ、その少年をあなたの家に連れて行きなさい、そして人々の人生を深く見ている司祭に敬意を払うことを忘れないでください。」

「私を買ってくれた雄牛のおかげで」とモーグリは独り言を言いました。
まあ、もし私が男なら、男にならなければなりません。』

女性がモーグリを自分の小屋に手招きすると、群衆は別れました。そこには、赤い漆塗りの寝台、面白い浮き上がった模様が描かれた大きな土穀物のチェスト、6個の銅製の調理用鍋、小さな床の間のヒンズー教の神の像がありました。そして壁には、カントリーフェアで売られているような本物のようなガラスがあります。

彼女は彼に牛乳とパンをたっぷり飲ませ、それから彼の頭に手を置いて彼の目を覗き込みました。というのは、もしかしたら彼がトラに連れて行かれたジャングルから戻ってきた本当の息子かもしれない、と彼女は思ったからである。それで彼女は言いました、「ナトゥー、ナトゥー！」モーグリはその名前を知っている様子を見せなかった。 「私があなたに新しい靴をあげた日のことを覚えていないのですか？」彼女が彼の足に触れると、それは角のように硬かった。 「いいえ、」と彼女は悲しそうに言いました。

Machine Translated by Google

足は靴を履いたことがありませんが、あなたは私のナットーによく似ています、そしてあなたは私の息子になるでしょう。」

モーグリはこれまで屋根の下に来たことがなかったので不安でした。しかし、茅葺き屋根をよく見ると、逃げようと思えばいつでも破ることができ、窓には留め具が何もないことがわかりました。 「人間の話を理解できなければ、人間に何の役に立つだろうか」と彼はついに独り言を言いました。今の私は、ジャングルで一緒にいる人間と同じくらい愚かで愚かです。私は彼らの話を話さなければなりません。』

彼がオオカミたちと一緒にいる間に、ジャングルでの雄鹿の挑戦や子豚のうなり声を真似ることを学んだのは、遊びのためではありませんでした。それで、メッスーアが単語を発音するとすぐに、モーグリはそれをほぼ完璧に真似し、暗くなる前に小屋にあるさまざまなものの名前を覚えました。

モーグリは小屋のようなヒョウの罠に似たものの下では寝ようとしなかったので、就寝時に困難がありました。そして、ドアが閉められると、モーグリは窓から入っていきました。 「彼の意志を伝えてください」とメスアの夫は言った。「覚えておいてください、彼は今まで一度もベッドで寝たことがありません。もし彼が本当に私たちの息子の代わりに遣わされたとしても、彼は逃げないだろう』

そこでモーグリは野原の端にある長くてきれいな草の中で体を伸ばしましたが、目を閉じる前に柔らかい灰色の鼻が彼の顎の下を突いてくれました。

「ふう！」グレイ兄弟（彼はマザーウルフの子供の長男でした）は言いました。 「20マイルも進んだことに対するこれは貧弱な報酬だ。あなたは木の煙と牛の匂いがとても漂っていて、まるですでに男性のようです。目を覚まして、弟よ。ニュースをお届けします。』

Machine Translated by Google

「ジャングルではみんな元気ですか？」モーグリは彼を抱きしめながら言いました。

「赤い花で焼かれたオオカミ以外は全員。今聞きます。シア•カーンはひどく焦げてしまったので、毛皮が再び生えるまで狩りに遠くへ行ってしまった。彼は戻ってきたら、あなたの骨をワイングンガに納めると誓います。」

「それには二つの言葉があります。私もちょっとした約束をしました。しかし、ニュースは常に良いものです。今夜は疲れています、—
新しいことにはとても疲れているよ、グレイ兄弟——でも、ニュースはいつも持ってきてね。』

「自分がオオカミであることを忘れませんか？」男性はそうしません
忘れさせますか？グレイ兄弟は心配そうに言いました。

'一度もない。私はあなたと私たちの洞窟にいるすべての人を愛していることをいつも覚えています。しかしまた、私は自分が群れから追い出されたことを常に覚えています。」

「そして、あなたが他の群れから追い出されるように。男は男でしかない、リトル•ブラザー、彼らの話は池の中の蛙の話のようだ。またここに来るときは、牧場の端の竹の中であなたを待っています。』

その夜から3か月間、モーグリはほとんど村の門から出ず、人間のやり方や習慣を学ぶのに忙しかった。まず彼は布を身に着けなければならなかったが、それは彼をひどく悩ませた。それから彼はお金について学ばなければならなかったが、それはまったく理解できなかったし、耕作についても学ばなければならなかったが、その用途がわからなかった。すると、村の小さな子供たちが彼をとても怒らせました。幸いなことに、ジャングルの法則は彼に怒りを保つことを教えていました。ジャングルでは、生活と食べ物は怒りを保つことに依存しているからです。しかし、彼がそうしなかったので、彼らが彼をからかったとき、

Machine Translated by Google

ゲームをしたり、凧揚げをしたり、あるいは単語の発音を間違えたりしたために、裸の子グマを殺すのはスポーツマンらしくないという知識だけがあったため、子グマを抱き上げて真っ二つにすることはできませんでした。

彼は自分自身の強さを全く知りませんでした。ジャングルでは自分が獣に比べて弱いことを知っていましたが、村では人々は彼が雄牛と同じくらい強いと言っていました。

そしてモーグリは、カーストが人間と人間の間にもたらす違いについて、まったく知りませんでした。陶器師のロバが粘土の穴に滑り落ちたとき、モーグリは尻尾をつかんで引き上げ、カーンヒワラの市場に行くために壺を積むのを手伝いました。陶工はカーストの低い男であり、彼のロバはもっとひどいので、それはまた非常に衝撃的でした。司祭がメッスーアを叱ると、モーグリはメッスーアもロバに乗せると脅し、司祭はメッスーアの夫に、モーグリはできるだけ早く仕事に就くほうがよいと告げた。そして村長はモーグリに、翌日水牛と一緒に出かけて、水牛が草を食んでいる間彼らを集めなければならないと言いました。モーグリほど喜んだ人はいませんでした。そしてその夜、彼はいわば村の使用人に任命されていたので、大きなイチジクの木の下にある石積みの台で毎晩集まるサークルに出かけました。それは村のクラブで、村の噂話をすべて知っている村長、番人、床屋と、タワーマスケット銃を持った村の狩人であるブルデオ老人が会ってタバコを吸った。猿たちは上部の枝に座って話をしていました。台の下にはコブラが住んでいる穴があり、コブラは神聖な存在だったため、毎晩小さな大皿の牛乳を飲んでいました。そして老人たちは木の周りに座って話をしました-

Machine Translated by Google

そして、夜遅くまで大きなフカ（水道管）を引っ張りました。彼らは神と人間と幽霊の素晴らしい物語を語った。そしてバルデオは、輪の外に座っている子供たちの目が頭から飛び出すまで、ジャングルでの獣たちのやり方についてさらに素晴らしいことを話しました。物語のほとんどは動物に関するもので、ジャングルはいつも彼らのすぐそばにあったからです。鹿や野生の豚は作物を食い荒らし、時折、夕暮れ時に村の門が見えるところでトラが人を連れ去りました。

彼らが話していることについて自然に何かを知っていたモーグリは、笑っていることが分からないように顔を覆わなければなりませんでしたが、膝の上にタワーマスケット銃を置いたブルデオは、素晴らしい物語から別の素晴らしい物語へと登り、モーグリの肩に乗りました震えた。

ブルデオは、メスアの息子を連れ去った虎が幽霊の虎で、彼の体には数年前に死んだ邪悪な金貸しの幽霊が宿っていた、と説明していた。 「そして、私はこれが真実であることを知っています」と彼は言った、「プルン•ダスは暴動で帳簿が焼かれたときの打撃でいつも足を引きずっていたし、私が話しているトラも足跡のために足を引きずっているからです」彼のパッドの数は不均等です。

「本当、本当、それは真実に違いない」白髪ひげたちは一緒にうなずきながら言いました。

「これらの物語はすべて、クモの巣や月の話のようなものですか？」言ったモーグリ。 『誰もが知っているように、あのトラは生まれつき足が不自由なので、足を引きずります。ジャッカルのような勇気を持たなかった獣に金貸しの魂を語るなど、子供の話だ。」

バルデオは一瞬驚きのあまり言葉を失ったが、

Machine Translated by Google

所長は見つめた。

「おお !ジャングルのガキですよね？』とブルデオは言いました。 「もしあなたがそんなに賢いのなら、政府が彼の命に100ルピーの罰金を課したのだから、彼の皮をカーンヒワラに持っていったほうがいい。」さらに良いのは、年長者が話しているときに話さないことです。

モーグリは立ち上がりました。 「私は一晩中ここに横になって聞いていました」と彼は肩越しに電話をかけ直した、「そして、一度か二度を除いて、ブルデオは目の前にあるジャングルについて真実を一言も話さなかった。」それでは、彼が見たという幽霊や神やゴブリンの話をどうやって信じればよいのでしょうか？」

「あの少年はもう放牧に行く時間だ」と村長が言う一方、ブルデオはモーグリの生意気さに息を呑んで鼻を鳴らした。

インドのほとんどの村では、早朝に数人の少年が牛や水牛を放牧に連れ出し、夜に持ち帰るのが習慣となっています。白人を踏みつけて殺す牛そのものが、ほとんど目もくれぬ子供たちに殴られ、いじめられ、怒鳴られるのを許しているのだ。少年たちが群れと一緒にいる限り、彼らは安全です。トラでさえ牛の群れに突撃することはないからです。しかし、花を摘んだりトカゲを狩ったりするためにもがいていると、連れ去られてしまうこともあります。モーグリは、偉大なる牛ラーマの背中に座り、夜明けに村の通りを通り抜けました。スラットブルーの水牛は、後ろに伸びた長い角と獰猛な目を持ち、一頭ずつ雄鹿を出して彼を追ってきました。モーグリは一緒にいる子供たちに、自分が主人であることをはっきりと伝えました。

彼は長く磨かれた竹で水牛を殴り、

Machine Translated by Google

少年の一人であるカミヤに、自分は水牛と一緒に行く間、自分たちだけで牛を放牧し、群れから離れないように細心の注意を払うように言いました。

インディアンの放牧地はすべて岩と低木と草むらと小さな渓谷であり、その間に群れは散り散りになって消えます。水牛は通常、プールや泥だらけの場所に留まり、そこで何時間も温かい泥の中でゴロゴロしたり日光浴をしたりします。モーグリはワイングンガがジャングルから出てきた平原の端まで彼らを追いやった。それから彼はラーマの首から落ち、竹の塊まで小走りで走り、灰色の兄弟を見つけました。 「ああ」とグレイ兄弟は言いました、「私はここで何日も待っていました。この牛追いの仕事にはどんな意味があるのでしょうか？』

「それは命令だ」とモーグリは言った。 「私はしばらくの間、村の群れです。シア•カーンのニュースは何ですか？』

「彼はこの国に戻ってきて、長い間ここであなたを待っていました。今、彼は試合が少ないため、再び去ってしまった。しかし彼はあなたを殺すつもりなのです。 』

「とてもよかった」とモーグリは言いました。 「彼がいない間は、あなたか四人兄弟のうちの一人がその岩の上に座っていて、私が村から出てくるときにあなたが見えるようにしてください。 」彼が戻ってきたら、平原の中心にあるダクの木のそばの渓谷で私を待っていてください。私たちはシア•カーンの口に入る必要はありません。 」

それからモーグリは日陰の場所を選び、水牛が彼の周りを草を食べている間、横になって眠りました。インドの放牧は世界で最も怠惰な行為の一つです。牛は動いたり、歯ごたえをしたり、横たわったり、また歩き回ったりしますが、姿勢を低くすることさえありません。彼らはうなり声をあげるだけで、水牛はめったに何も言わず、泥だらけの池に降ります。

Machine Translated by Google

次々と泥の中に進み、鼻と見つめる青磁の目だけが表面に出て、丸太のように横たわります。太陽が暑さの中で岩を踊り、群れの子供たちは、頭上でほとんど見えないところで一匹の凧（もう二度とない)が笛を吹くのを聞きます。そして彼らは、自分が死ぬか牛が死ぬと、その凧が押し寄せてくることを知っています。そして何マイルも離れた次の凧が彼を落として追いかけるのを見て、次も次も、そして彼らが死ぬ寸前に、何十匹ものお腹を空かせた凧がどこからともなくやって来るでしょう。それから彼らは寝ては起きてまた寝て、乾いた草で小さな籠を編んで、その中にバッタを入れます。または、2匹のカマキリを捕まえて戦わせます。または、赤と黒のジャングルナッツのネックレスを結びます。岩の上で日向ぼっこをするトカゲや、ヤブの近くでカエルを狩るヘビを観察することもできます。それから彼らは、最後に奇妙な土着の震えを伴う長い長い歌を歌います。そして、おそらく彼らは、人間、馬、水牛の泥の人形で泥の城を作り、その中に葦を入れます。人々の手を握り、彼らが王であり、その人物が彼らの軍隊であるか、または彼らが崇拝されるべき神であるかのように装います。そして夕方になり、子供たちが呼び掛けると、次から次へと銃声が発砲するような音を立てて、水牛たちがベタベタした泥の中からよろよろと立ち上がり、灰色の平原を横切って、きらきらと光る村の明かりへと戻っていきます。

モーグリは来る日も来る日も水牛たちをうろうろする場所に連れ出し、来る日も来る日も平野の向こう側1マイル半離れたところにグレイ•ブラザーの背中が見えた(だから彼はシア•カーンが戻ってこないことがわかった)。彼がその日

Machine Translated by Google

草の上に寝そべって周囲の騒音を聞きながら、昔のジャングルでの日々を夢見ていました。もしシェア•カーンがワイングンガのそばのジャングルで足の不自由な足を上げて踏み外したとしたら、あの長く静かな朝にモーグリは彼の声を聞いていただろう。

ついに、信号所でグレイ•ブラザーの姿を見ない日が来て、彼は笑いながら水牛たちを、黄金色の花で覆われていたDHKの木のそばの渓谷へと向かわせた。そこには灰色の兄弟が座っていて、背中の毛がすべて逆立っていました。

「彼はあなたを油断させるために一ヶ月も隠れていました。
昨夜、彼はタバキと一緒に山脈を越えました、あなたの道を熱い足で歩きました」とオオカミは息を切らしながら言いました。

モーグリは眉をひそめた。「私はシア•カーンを恐れてはいないが、
タバキはとても狡猾です。」

「恐れることはない」とグレイ兄弟は唇を少し舐めながら言った。
「私は夜明けにタバキに会いました。今、彼は自分のすべての知恵を鳶たちに語っていますが、私が腰を折る前に彼はすべてを私に話してくれました。シア•カーンの計画は、今夜村の門であなたを待つことです――他の誰のためでもなく、あなたのためです。彼は今、ワインンガの大きな乾いた渓谷に横たわっています。」

「彼は今日は食事をしましたか、それとも空っぽで狩りをしますか？」モウは言いました-
グリ、その答えは彼にとって生と死を意味したからです。

「彼は夜明けに豚を殺し、そして酒も飲んだ。覚えておいてください、シア•カーンは
たとえ復讐のためであっても決して断食することができませんでした。

'おお !バカ、バカ !なんと子連れの子だ !食べたり飲んだりもしたので、彼は私が寝るまで待っていようと考えています。さて、彼はどこに横たわっているでしょうか ?もし我々が10人しかいなかったら、そうするかもしれない

Machine Translated by Google

嘘をついた彼を引きずり下ろします。これらの水牛は、巻き上げない限り突進しません。そして私は彼らの言葉を話すことができません。

彼らに匂いを嗅いでもらうために、彼の足跡の後ろに行ってもいいですか？』

「彼はワインンガ川をはるか下まで泳いでそれを断ち切った」とグレイ兄弟は語った。

「タバキは彼にそう言いました、私は知っています。」彼は決して一人では思いつきませんでした。」モーグリは指を口にくわえて立って考えていました。「ワインンガの大きな渓谷。そこはここから半マイルも離れていない平野に広がっています。私は群れをジャングルの中を渓谷の頭まで連れて行き、それから一掃することができますが、彼は麓からこっそり出て行ってしまいます。

私たちはその結末を阻止しなければなりません。グレイ兄弟、私の代わりに群れを真っ二つにしてもらえませんか？』

「私ではないかもしれませんが、賢明な助っ人を連れてきました。」灰色の兄弟は小走りで走り去り、穴に落ちました。それから、モーグリがよく知っていた巨大な灰色の頭が持ち上げられ、熱い空気はすべてのジャングルの中で最も荒涼とした叫び声で満たされました—
真昼の狼の狩猟の遠吠え。

『アケーラ！アケーラ！モーグリは手をたたきながら言いました。「あなたが私を忘れないことは分かっていたかもしれません。私たちには大きな仕事が待っています。群れを真っ二つに切り裂け、アケーラ。牛と子牛は一緒に保ち、雄牛と水牛は一人で耕しなさい。」

二匹のオオカミはレディースチェーンのファッションで店の中と外を走り回った

群れは鼻を鳴らして頭を上げ、二つの塊に分かれた。ある写真では、牛水牛が子牛を中心にして立ち、睨みつけて前足で構え、もしオオカミがじっとしていれば突撃して命を踏みにじる準備ができていた。もう一方では、雄牛と若い雄牛

Machine Translated by Google

鼻を鳴らして踏み鳴らしたが、見た目はもっと堂々としていたが、守るべきふくらはぎがなかったため、それほど危険ではなかった。 6 人の男では群れをこれほどきれいに分けることはできませんでした。

「何という命令だ！」アケーラは息を呑んだ。 「彼らは再び参加しようとしている。」

モーグリはラーマの背中に滑り込みました。 「雄牛を左に追い払ってください、アケーラ。グレイ兄弟、私たちが去ったら、牛たちをまとめて渓谷のふもとに追い込んでください。」

'どこまで？'灰色の兄弟は息を切らしながら言いました。

「サイドがシア•カーンが跳べる高さよりも高くなるまで」とモーグリは叫んだ。 「私たちが降りるまでそこに置いておいてください。」アキーラが吠えると牛たちは一斉に走り去り、グレイ兄弟は牛たちの前で立ち止まりました。彼らは彼に突撃し、アケーラが雄牛をはるか左に追いやったとき、彼は渓谷の麓まで彼らの直前に走った。

'よくやった！もう一度充電すると、かなり開始されます。
気をつけて、さあ――気をつけて、アケーラ。スナップしすぎると雄牛が突撃してきます。ヒャッハー！これはブラックバックを運転するよりも過酷な仕事です。これらの生き物がそんなに素早く動くことができると思いましたか？モーグリが電話をかけてきた。

「私も――私の時代にもこれらを狩ったことがある」とアケーラは砂埃の中で息を呑んだ。 「彼らをジャングルにしましょうか？」

「ああ！振り向く。急いで回してください！ラーマは怒り狂っています。おお、
今日彼に必要なことだけを伝えることができたら。」

雄牛は今度は右に向きを変え、立っている藪に激突した。他の群れの子供たちは、半マイル離れた牛と一緒に見守り、水牛が気が狂って逃げ出したと泣きながら、足で運ぶ全速力で村へ急いだ。

Machine Translated by Google

しかし、モーグリの計画は非常に単純でした。彼がやりたかったのは、上り坂を大きく旋回して渓谷の頭に着き、それから雄牛を谷から降ろして、雄牛と雌牛の間でシア•カーンを捕まえることだけでした。というのは、食事と酒をたっぷり飲んだ後では、シア•カーンは戦ったり、渓谷の側面をよじ登ったりできるような状態ではないことを彼は知っていたからだ。
彼は今、声で水牛たちをなだめていたが、アキーラははるか後方に下がっており、後衛を急ぐために一度か二度泣き叫んだだけだった。彼らは渓谷に近づきすぎてシア•カーンに警告を与えることを望まなかったので、それは長い長い旋回であった。ついにモーグリは、渓谷の先端で渓谷自体に向かって急に傾斜している草が茂った場所で当惑した群れを集めました。その高さからは、木々の頂上を越えて下の平原まで見渡すことができました。しかし、モーグリが見たのは渓谷の側面であり、渓谷がほぼまっすぐに上下に走っているのに、その上に垂れ下がった蔓や蔓が指名手配のトラに足がかりを与えないのを見て、彼は非常に満足したようでした。外出。

「息をさせてよ、アケーラ」彼は手を上げながら言った。

「彼らはまだ彼を巻き込んでいません。彼らに呼吸をさせてください。シア•カーンが来ることを伝えなければなりません。私たちは彼を罠にはめています。』

彼は手を口に当て、ラ•ヴァインに向かって叫びました――それはまるでトンネルの中で叫んでいるようでした――そしてその反響は岩から岩へと飛び跳ねました。

長い時間が経ってから、満腹で起きたばかりのトラの、眠そうなうなり声が戻ってきました。

「誰が電話してるの？」シア•カーンがそう言うと、見事な孔雀が渓谷から金切り声を上げて飛び上がった。

Machine Translated by Google

「私、モーグリ。牛泥棒よ、カウンシル•ロックに来る時間だ!下へ――急いで下へ、アケーラ !下がって、ラーマ、下がって !

群れは坂の端で一瞬立ち止まったが、アケーラは狩猟の雄叫びをあげて舌を巻き、汽船が急流を飛ばし、砂や石が群れの周りに噴き上がるのと同じように、次々と群れを横倒しにした。一度始まると止まることはできず、彼らが渓谷の底に着く前に、ラーマはシア•カーンを巻き上げて怒鳴りました。

「はぁ ! 」はぁ !モーグリは仰向けで言いました。 「もうお分かりでしょう ! 」そして洪水時に岩が流れ落ちるのと同じように、黒い角、泡立つ銃口、そしてじっと見つめる目が渦を巻いて渓谷を流れ落ちた。弱い水牛は渓谷の側面に担ぎ出され、そこでつる植物を引き裂きました。

彼らは、目の前に何が待っているのか、つまり、どんなトラも耐えることができないバッファローの群れの恐ろしい攻撃であることを知っていました。シア•カーンは彼らの蹄の轟音を聞いて、立ち上がり、なんとか逃げ道を探しながらよろよろと渓谷を下ったが、渓谷の壁はまっすぐで、夕食と食事で重かったので、彼は耐えなければならなかった。彼の飲み物は、戦うよりも何でもするつもりです。群れは彼が立ち去ったばかりの池に飛び散り、狭い切り込みが鳴るまで咆哮を上げた。モーグリは渓谷のふもとから怒鳴り声を聞き、シア•カーンが向きを変えるのを見ました（虎は、最悪の事態になった場合、子牛を連れて牛に会うよりも雄牛に会うほうが良いことを知っていました）、そしてラーマはつまずいてよろめきました。そして再び柔らかいものの上を進み、雄牛を追いかけて完全に衝突しました。

Machine Translated by Google

他の群れに追い込まれる一方で、弱い水牛は出会いの衝撃で足からきれいに持ち上げられました。その突撃は両方の群れを平原に運び出し、突き刺し、踏み鳴らし、鼻を鳴らしました。モーグリは時を見てラーマの首から滑り落ち、杖を持って右に左に横たわりました。

「早く、アケーラ！」それらを解体してください。散らばってしまえば、お互いに戦うことになるだろう。奴らを追い払ってくれ、アケーラ。ハイ、ラーマ！ハイ、ハイ、ハイ！私の子供たち。今はそっと、そっと！それがすべて終わりました。'

アキーラとグレイ•ブラザーはバファローの足を挟みながらあちこち走り回り、群れは谷を再び駆け上がろうと一度車輪を走らせたが、モーグリは何とかラーマの向きを変え、他の者たちは彼を追って泥沼へと向かった。

シア•カーンにはこれ以上踏みつける必要はなかった。彼は死んでおり、すでに凧が彼を狙ってやって来ていました。

「兄弟たち、あれは犬の死だった」モーグリは、男たちと暮らしている今、いつも首に鞘に巻いて持ち歩いているナイフを思い出しながら言った。「しかし、彼は決して戦いを見せなかったでしょう。彼の皮はカウンシル•ロックによく似合うだろう。急いで作業を始めなければなりません。』

男たちの間で訓練された少年は、10フィートのトラの皮を自分で剥ぐなど夢にも思わなかったでしょうが、モーグリは動物の皮がどのようにして取り付けられ、どのように剥がされるのかを誰よりもよく知っていました。しかし、それは大変な仕事で、モーグリは一時間も切り裂き、うめき声をあげ続け、その間オオカミたちは舌を巻き、あるいは前に出てきてモーグリの命令に従って引っ張った。やがて肩に手が落ち、見上げるとタワーマスケット銃を持ったブルデオの姿が見えた。子供たちは水牛の群れのことを村に話していました。

Machine Translated by Google

ブルデオは怒って出て行きましたが、群れの世話をしなかったモーグリを正そうとするあまりにも心配でした。オオカミたちは男が近づいてくるのを見るとすぐに視界から消えました。

「この愚かさは何ですか？」ブルデオは怒って言った。 「虎の皮を剥げるとは !水牛はどこで彼を殺したのでしょうか？
それもラメタイガーで、頭には100ルピーが載っています。まあ、まあ、私たちはあなたが群れを逃がすのを見逃します、そしておそらく私が皮をカーンヒワラに持って行ったときに報酬のルピーの1つをあなたに渡します。彼は腰布の中で火打ち石と鋼を探し、シア•カーンのひげを焦がすために身をかがめた。ほとんどの現地の狩猟者は、虎の幽霊が自分たちに取り憑くのを防ぐために、常に虎のひげを焦がします。

'ハム！' モーグリは前足の皮を引き裂きながら、半ば独り言のように言いました。 「それでは、報酬としてその皮をカーンヒワラに持って行き、おそらく私に1ルピーをくれるでしょうか？」今、私が考えているのは、自分用のスキンが必要だということです。へー !おじいさん、その火を取り除いてください！

「村の主任猟師との話は何ですか？」あなたの幸運と水牛の愚かさが、あなたをこの殺害に助けました。トラはちょうど餌を食べたばかりで、そうでなければ今頃20マイルも進んでいたでしょう。君は彼の皮を剥くことさえまともにできない、この乞食ガキ、そして私、ブルディオは彼のひげを焦がさないように言われなければならないのは当然だ。モーグリ、私はあなたに報酬を一アンナも与えませんが、非常に大きな打撃だけを与えます。死骸は放っておいてください！

「私を買ってくれた雄牛のせいで」と肩につかまろうとしたモーグリが言った。ほら、アケーラ、この男は私を悩ませています。

ブルデオはまだシア•カーンの頭の上にかがんでいたが、

Machine Translated by Google

モーグリは草の上に大の字になっていて、その上にハイイロオオカミが立っているのに気づきました。その間、モーグリはまるでインド全土で一人でいるかのように皮を剥ぎ続けました。

「そうだね」と彼は歯の間で言った。 「あなたの言うことはまったく正しいです、ブルディオ。あなたは決して私に報酬を一アンナも与えないでしょう。この足の悪いトラと私自身の間には古い戦争があり、非常に古い戦争であり、そして私は勝利しました。」

ブルデオを公平に評価するために、もし彼が10歳若かったら、もし森の中でオオカミに出会っていたら、彼はアケーラとのチャンスを掴んだだろうが、オオカミは人食いトラと私的な戦争をしていたこの少年の命令に従った。一般的な動物ではありませんでした。それは魔術だ、最悪の種類の魔術だ、とブルディオは思い、首に巻いたお守りが自分を守ってくれるかどうか疑問に思った。彼は相変わらず静かに横たわり、モーグリも虎に変わるのを毎分期待していました。

「マハラジ !偉大なる王よ』と彼はついにかすれたささやき声で言った。

「そうですよ」モーグリは振り向かずに少し笑いながら言った。

「私は老人です。あなたが単なる牧畜民以上の人間だったとは知りませんでした。立ち上がって立ち去ってもいいですか、それともあなたのしもべが私を引き裂いてくれるでしょうか？』

「行って、あなたに平和が訪れますように。」ただ、今度は私のゲームに干渉しないでください。彼を行かせてください、アケーラ」

ブルデオは、モーグリが恐ろしいものに変貌してしまわないように肩越しに振り返りながら、足を引きずりながら全速力で村へと去った。村に着くと、魔法と魔法と魔術の話をしたので、司祭はとても深刻な表情になりました。

モーグリは仕事を続けましたが、もう夕闇が近づいていました

Machine Translated by Google

彼とオオカミたちが体から大きなゲイの皮膚を取り除く前に。

「さあ、これを隠して水牛を家に連れて帰らなければなりません！」

アケーラ、彼らを群れさせるのを手伝ってください。」

霧深い夕闇の中で群れは集まり、村に近づくとモーグリは光を見て、神殿の法螺貝や鐘が吹いたり叩いたりするのを聞きました。村の半分が門のところで彼を待っているようだった。「それは私がシア•カーンを殺したからだ」と彼は心の中で思った。しかし、石の雨が耳元で音を立て、村人たちは「魔術師！」と叫びました。狼のガキ！ジャングルの悪魔！どこかに行って！

早くそこから立ち去れ、さもなければ司祭があなたを再び狼に変えてしまうでしょう。撃て、バルディオ、撃て！

古いタワーマスケット銃は爆発音を立てて発砲し、若いマスケット銃は

バッファローは痛みでうなり声を上げました。

「もっと魔術を！」村人たちは叫びました。 「彼は弾丸を変えることができる。ブルデオ、それはあなたのバッファローでした。

「さて、これは何ですか？」モーグリは当惑しながら言った。
石はより厚く飛んだ。

「彼らはパックと何ら変わりません、あなたの兄弟たちです」とアケーラは落ち着いて座りながら言った。 「私の頭の中では、銃弾が何か意味があるなら、あなたを追い出すだろうということです。」

'狼！狼の子！どこかに行って！'司祭は神聖なトゥルシーの小枝を振りながら叫んだ。

'また？前回は私が男だったからです。今度は私が狼だからです。行きましょう、アケーラ」

ある女性が――それはメスアでした――群れのほうに走って行き、「ああ、わが子、わが子！」と叫びました。彼らは、あなたは自分自身を自由に獣に変えることができる魔術師であると言います。信じられないけど行きましょう

Machine Translated by Google

離れなければ彼らはあなたを殺すでしょう。ブルデオはあなたは魔法使いだと言っていますが、私はあなたがナトゥーの死に復讐したことを知っています。

「戻ってきて、メスア！」群衆は叫んだ。 「戻ってきて、あるいは私たちはあなたを石打ちにします。』

モーグリは口の中に石が当たったので、少し短く醜い笑い声を上げた。 「逃げろ、メスア。これは、夕暮れ時に大きな木の下で彼らが語る愚かな物語の一つです。少なくともあなたの息子さんの命の代償は私が支払ったのです。別れ;急いで逃げなさい。レンガコウモリよりも早く群れを送り込んでやるから。私は魔法使いではありません、メスア。別れ！'

「さあ、もう一度、アケーラ」彼は叫びました。 「群れを連れてきてください。」

水牛たちは村にたどり着くのに十分な心配をしていました。
彼らはアケーラの叫び声をほとんど必要とせず、門を通って旋風のように突進し、群衆を右に左に散らばらせた。

「数えてください！」モーグリは軽蔑的に叫びました。 「もしかしたら、そのうちの一つを私が盗んだのかもしれない。数えておいてください、私はもうあなたの放牧をしませんから。人の子らよ、頑張れ。そして、私がオオカミを連れて入ってきて、通りのあちこちであなたたちを狩らないことをメッスアに感謝する。」

彼は踵を返して一匹狼とともに歩き去り、星を見上げながら幸せを感じました。 「もう私は罠の中で眠ることはありません、アケーラ。シア•カーンの皮を手に入れて立ち去りましょう。いいえ、村を傷つけるつもりはありません、メスアは私に親切にしてくれたからです。」

平原に月が昇り、月がすべて乳白色に見えると、恐怖に駆られた村人たちは、モーグリがかかとに二匹の狼を従え、頭に束を乗せて、長いマイルを火のように食い尽くす着実な狼の速歩で横切って行くのを見た。それから彼らは寺院の鐘を叩き、ほら貝をより大きく吹き鳴らしました

Machine Translated by Google

これまでよりも。そしてメッスアは泣き、バルデオはジャングルでの冒険の物語を刺繍し、最後にアケーラが後ろ足で立ち上がって男のように話したと言って終わりました。

モーグリと二匹のオオカミがカウンシル•ロックの丘に来て、マザー•ウルフの洞窟に立ち寄ったとき、ちょうど月が沈むところでした。

「彼らは私を人間の群れから追い出しました、母さん」とモーグリは叫びました。「しかし私は約束を守るためにシア•カーンの皮を持ってやって来ました。」

母オオカミは子連れたちと洞窟から体を張って歩き出した
彼女の後ろにいて、肌を見て彼女の目は輝いた。

「あの日、彼がこの洞窟に頭と肩を詰め込み、あなたの命を狙って狩りをしていたとき、私は彼に言いました、小さなカエルよ-
私は彼に、狩る側が狩られる側になると言いました。よくできていますね。』

「弟よ、よくやったよ」と藪の中で低い声がした。 「私たちはあなたがいないジャングルで孤独だった。するとバギーラがモーグリの裸足のところに走って来た。彼らは一緒に評議会の岩によじ登り、モーグリはアケーラが座っていた平らな石の上に皮膚を広げ、それを四本の竹片で固定すると、アケーラはその上に横たわり、評議会に昔の呼びかけをした。 「ほら、よく見て、オオカミたちよ」モーグリが初めてそこに連れてこられたときに彼が呼んだとおりだ。

アキーラが追放されて以来、パックにはリーダーがいなくて、自分たちの好きなように狩りや戦いを続けていた。
しかし彼らは習慣からその呼びかけに応じた。そして、中には罠にはまったために足が不自由になった者もいれば、撃たれた傷で足を引きずった者もいるし、食べ物を食べて汚くなった者もいた。

Machine Translated by Google

食事も悪く、行方不明者も多かった。しかし、彼らは残されたすべてを持ってカウンシル•ロックにやって来て、岩の上にあるシア•カーンの縞模様の皮と、ぶら下がっている空っぽの足の先に巨大な爪がぶら下がっているのを見た。その時、モーグリは勝手に喉に響く歌を作り、それを大声で叫び、ガタガタする肌の上を飛び跳ね、息がなくなるまでかかとで時間を叩きました。兄とアケーラは詩の間で遠吠えした。

「よく見てください、オオカミたちよ。私は約束を守りましたか？』とモーグリは言いました。

するとオオカミたちが「はい」と叫び、一匹のボロボロのオオカミが遠吠えしました。

「再び私たちを導いてください、おおアケーラ。もう一度私たちを導いてください、おおマンカブ、私たちはこの不法行為にうんざりしているのですから、そうすれば私たちはもう一度自由の民になれるのです。」

「いや、」とバギーラが喉を鳴らした、「それは違うかもしれない。あなたが満腹になったとき、再び狂気があなたを襲うかもしれません。あなた方が自由民と呼ばれるのは当然のことです。あなたたちは自由のために戦った、そしてそれはあなたのものです。食べましょう、オオカミたちよ。』

「マンパックとウルフパックが私を追い出したんだ」とモーグリは言いました。 「今度はジャングルで一人で狩りをするよ。」

「そして、私たちはあなたと一緒に狩りをするでしょう」と4匹の子グマは言いました。

そこでモーグリはその日からジャングルの中で4頭の子グマと一緒に狩りをするようになりました。しかし、彼はいつも孤独だったわけではありません。数年後、彼は男性になり、結婚しました。

しかし、それは大人のための話です。

Machine Translated by Google

モーグリの歌

彼がカウンシルロックで歌ったこと
シェア•カーンの皮で踊った

モーグリの歌—私、モーグリが歌っています。私のしたことをジャングル
に聞いてもらいましょう。

シア•カーンは殺す、殺すだろうと言いました !のゲートで
たそがれになったら、彼はカエルのモーグリを殺すでしょう！

彼は食べたり飲んだりした。深く飲みなさい、シア•カーン、いつになるか分からない

また飲む ?眠って殺人の夢を見る。

私は放牧地に一人でいます。灰色の兄弟、私のところに来てください！
来いよ、一匹狼よ、これから大きな勝負が始まるから！

偉大な雄牛、青い肌の群れの雄牛を育てましょう
怒った目で。私の命令に従って彼らを行き帰りに運転してください。

まだ眠いの、シア•カーン ?起きて、ああ、起きて !さあ、私は、
そして雄牛は後ろにいます。

水牛の王ラーマが足で踏み鳴らしました。
水域

Machine Translated by Google

ワイングンガ、シア•カーンはどこへ行ったのか？

彼は穴を掘る一揆でもないし、穴を掘るべき孔雀のマオでもない。

飛ぶ。彼は枝にぶら下がっているコウモリのマングではありません。少し
軋む竹、彼がどこに逃げたか教えてください。

うわー !彼はそこにいます。ああ !彼はそこにいます。ラーマの足下で

足の不自由な人は嘘をついています !立ち上がって、シア•カーン！

立ち上がって殺してください !ここに肉があります。雄牛の首を折ってください！

しっ !彼は眠っています。私たちは彼を起こしません、彼の強さは
すごくいい。それを見ようと鳶が降りてきました。黒い
アリはそれを知ってやって来ました。彼の中には素晴らしい集会がある
名誉。

アララ !私を包む布がない。凧は私がいることに気づくだろう
裸。私はこれらの人々全員に会うことが恥ずかしいです。

コートを貸してください、シア•カーン。あなたのゲイのストライプのコートを貸してください

カウンシル•ロックに行くかもしれない。

私を買ってくれた雄牛にかけて、私は約束をしました――小さな約束です。

約束を守る前に足りないのはあなたのコートだけです。

ナイフで、男性が使うナイフで、人のナイフで

Machine Translated by Google

の

ハンターよ、私は贈り物を手に入れるために身をかがめていきます。

ワインンガの水域、シア•カーンが愛を込めてコートをくれた

彼が私を産んでくれるということ、引っ張ってください、灰色の兄弟 !引っ張って、アケーラ !重いです
シア•カーンの皮。

マンパックは怒っています。彼らは石を投げたり、子供向けの話をしたりします。

口から血が出ています。逃げさせてください。

夜通し、暑い夜通し、私と一緒に速く走ってください、私の

ブラザーズ。村の灯りを離れて私たちは行きます
低い月。

ワイングンガの水域、マンパックが私を追い出した。やった

彼らに害はありませんでしたが、彼らは私を怖がりました。なぜ？

狼の群れよ、あなた方も私を追い出したのです。ジャングルは私にとって閉ざされている、

村の門は閉まっている。なぜ？

マングが獣と鳥の間を飛ぶように、私も獣と鳥の間を飛んでください。

村とジャングル。なぜ？

Machine Translated by Google

私はシア•カーンの皮の上で踊りますが、心はとても重いです。
私の
村の石で口を切られ傷を負うが、

ジャングルに戻ってきたので、私の心はとても軽いです。
なぜ？

蛇が世界で争うように、私の中でこれら二つのものが一緒に戦っている。
春。目から水が出てきます。それでも私は笑いながら
落ちる。なぜ？

私は二人のモーグリですが、シア•カーンの皮が私の足元にあります。

私がシア•カーンを殺したことはジャングル全体が知っています。見て-
見て

そうだ、オオカミたちよ！

あはは !理解できないことで心が重くなっています。

Machine Translated by Google

ホワイトシール

おお !黙ってろ、ベイビー、夜はもう終わった、
そして、緑色に輝いた水は黒です。
月が櫛の向こうで私たちを探して下を向いている
ガサガサと音を立てる空洞の中で休んでいる。

大波と大波が出会う場所、そのときはあなたの枕を柔らかくしてください、
ああ、疲れた小人よ、気楽に丸まってください！
嵐があなたを目覚めさせることも、サメがあなたを追い越すこともありません。
ゆっくりと揺れる海の腕の中で眠ってください！

アザラシの子守唄

これらすべてのことは数年前、ベーリング海の遠く離れたセントポール島のノヴァストシュナ、またはノースイーストポイントと呼ばれる場所で起こりました。ミソササイのリンマーシンが、日本行きの汽船の艤装に吹き飛ばされたときの話をしてくれました。私は彼を船室に連れて帰り、帰国できるようになるまで数日間温めて餌を与えました。再びセントポール大聖堂へ。リンマーシンはとても風変わりな小鳥ですが、真実を伝える方法を知っています。

ノヴァストシュナには仕事以外で来る人は誰もおらず、そこで定期的に仕事をしているのはアザラシだけです。夏の間、彼らは冷たい灰色の海から何百、何十万もの群れでやって来ます。ノヴ•アストシュナ•ビーチにはアザラシにとって最高の宿泊施設がある

Machine Translated by Google

世界中のどこでも。

シーキャッチはそれを知っていて、春になるとどこにいても泳ぎ、魚雷船のようにノヴァストシュナに向かってまっすぐ泳ぎ、海に近い岩の上の良い場所を求めて仲間たちと一ヶ月を費やした。できるだけ。シーキャッチは15歳で、肩にほぼたてがみがあり、長くて邪悪な犬歯を持った巨大なハイイロオットセイでした。彼が前足ひれで体を持ち上げたとき、彼は地面から4フィート以上離れて立っており、もし誰かが彼の体重を量るのに十分な勇気を持っていたら、彼の体重はほぼ700ポンドでした。彼は激しい戦いの跡で全身に傷を負っていたが、彼は常にあと一戦だけ戦う準備ができていた。彼は、あたかも敵の顔を直視するのを恐れているかのように、頭を片側に倒しました。それから彼は稲妻のようにそれを撃ち出し、大きな歯がもう一方のアザラシの首にしっかりと固定されたとき、できればもう一方のアザラシは逃げられるかもしれませんが、シーキャッチは彼を助けませんでした。

しかし、シーキャッチは決して殴られたアザラシを追いかけませんでした。それはビーチの規則に違反していたからです。彼は海沿いに子供部屋を置くためのスペースだけを望んでいました。しかし、毎年春には他にも4万頭か5万頭のアザラシが同じものを探していたので、浜辺で口笛を吹き、うめき声を上げ、轟音を立て、吹き飛ばす音は恐ろしいものでした。

ハッチンソンの丘と呼ばれる小さな丘からは、闘うアザラシで覆われた 3.5 マイルの地面を見渡すことができました。そして波にはアザラシの頭があちこちに点在し、急いで上陸して戦いを始めた。彼らはブレーカーの中で戦い、砂の中で戦い、そして彼らは

Machine Translated by Google

彼らは人間と同じように愚かで順応性がなかったので、苗床の滑らかに磨耗した玄武岩の岩の上で戦った。
彼らの妻たちは、引き裂かれるのを気にしなかったため、5月下旬か6月上旬になるまで島に来ませんでした。そして、まだ家事を始めていない2歳、3歳、4歳の若いアザラシたちは、戦闘員の隊列を抜けて約800メートル内陸に入り、大群と軍団で砂丘で遊び回り、すべてのアザラシをこすり落としました生えてきた緑色のもの。彼らはホルシッキー、つまり独身者と呼ばれ、ノヴァストシュナだけでもおそらく 20 万人か 30 万人がいたと思われます。

ある春、シーキャッチが45回目の戦いを終えたばかりのとき、柔らかく、滑らかで、優しい目をした彼の妻、マトカが海から上がってきたとき、彼は彼女の首筋を掴んで自分の居留地に放り投げた。不機嫌そうに「いつものように遅刻です。」どこにいましたか？'

Sea Catch は、ビーチに滞在していた 4 か月間、何も食べるのが流行ではなかったので、全体的に機嫌が悪かったです。マトカは言い返すよりも賢明だった。彼女は辺りを見回し、「なんて思いやりがあるのでしょう」と言いました。あなたは再び古い場所を占領しました。

「そうだったと思うべきだ」とシーキャッチは言った。 '私を見て！'

彼は20か所引っ掻かれて出血していた。片目
ほとんどアウトで、脇腹はリボン状に引き裂かれていた。

「ああ、君たちよ、君たちよ！」マトカさんは、後ろ足ひれで自分をあおぎながら言いました。 「なぜ分別を持って、自分の場所を静かに解決できないのですか？」まるでシャチと戦っていたかのようですね。』

「途中から喧嘩しかしてない」

Machine Translated by Google

5月の。この季節、ビーチは恥ずかしいほど混雑しています。私は家探し中のルカノンビーチで少なくとも100頭のアザラシに会いました。なぜ人は居場所に留まることはできないのでしょうか？』

マトカさんは「この混雑した場所ではなく、オッター島で船を出したらもっと幸せになれるのにとよく思った」と語った。

「ああ !オッターアイランドに行くのはホルシッキーだけです。もし私たちがそこに行ったら、彼らは私たちが怖かったと言うでしょう。私たちは体裁を保たなければなりません、愛する人よ。」

シーキャッチは誇らしげに太い肩の間に頭を沈め、数分間眠ったふりをしていましたが、その間ずっと戦いに備えて鋭い警戒を続けていました。すべてのアザラシとその妻たちが陸地に上がった今、最も騒々しい強風の上で彼らの鳴き声が何マイルも海まで聞こえてきました。

最低の数え方でも、浜辺には100万頭以上のアザラシがいて、年老いたアザラシ、母親アザラシ、小さな赤ちゃん、そしてヒヨコが海に下りたり、海から上がったりして、ケンカしたり、喧嘩したり、鳴いたり、這ったり、一緒に遊んだりしていた。ギャングや連隊に分かれて、見渡す限り地面のあらゆるフィートに横たわり、霧の中を旅団で小競り合いをした。ノヴァストシュナでは、太陽が顔を出し、しばらくの間すべてが真珠のように虹色に見えるときを除いて、ほとんど常に霧がかかっています。

マトカの赤ん坊コティックはその混乱のさなかに生まれ、頭も肩も丸く、小さなアザラシらしく青白く水っぽい青い目をしていたが、その毛並みには母親の視線を惹きつける何かがあった。彼をとても身近に感じました。

「シーキャッチ」と彼女は言った、ついに「私たちの赤ちゃんはこうなるよ」

Machine Translated by Google

白！'

「貝殻と海苔は空にして！」シーキャッチは鼻を鳴らした。
「白いアザラシなどというものはこの世に存在したことはありません。」

「それは仕方ないよ」とマトカは言った。 「今がありますよ。」そして彼女は、すべての母親アザラシが赤ちゃんに歌う低く歌うアザラシの歌を歌いました。

生後6週間になるまでは泳いではいけません。そうで
ないと頭がかかとに沈んでしまいます。
そして夏の強風とシャチ
アザラシの赤ちゃんには悪影響です。

アザラシの赤ちゃんには悪いよ、ネズミさん、
どんなに悪いことでもいいのです。
でも、はねて強くなって、
それは間違いではありません。
大海の子！

もちろん、この小さな男は最初は言葉を理解できませんでした。彼は母親のそばで漕いでスクランブルし、父親が別のアザラシと戦っているときに邪魔にならないように乱闘することを学びました。そして、2匹は滑りやすい岩の上を転がり、轟音を立てて上り下りしました。マトカさんはよく海へ食べ物を取りに行っていましたが、赤ちゃんに餌を与えるのは2日に1回だけでしたが、その後はお腹いっぱい食べて元気に食べました。

彼が最初にしたことは、内陸に這って進むことでした、そしてそこで彼は自分と同じ年齢の何万もの赤ん坊に会いました、そして彼らは子犬のように一緒に遊び、きれいな地面で眠りました

Machine Translated by Google

砂をかけて、また遊びました。保育園のお年寄りたちは彼らに注意を払わず、ホルシッキーは自分の敷地内にとどまり、赤ちゃんたちは美しい遊び時間を過ごしました。

マトカは遠洋漁業から帰ってくると、すぐに遊び場に行き、羊が子羊を呼ぶように鳴き、コティックの鳴き声が聞こえるまで待ちました。それから彼女は彼の方向に最もまっすぐなラインを取り、前足ひれで三振し、若者たちの頭を左右に打ち倒しました。遊び場では常に数百人の母親が子供たちを探していて、赤ちゃんたちは元気に保たれていました。

しかし、マトカさんがコティックに語ったように、「泥水の中に横たわって疥癬にかかったり、硬い砂で切り傷や引っかき傷をこすったりしない限り、そして海が荒れているときに泳ぎに行かない限り」 、ここでは何もあなたを傷つけることはありません。

小さなアザラシは小さな子供たちと同じように泳ぐことができませんが、覚えるまでは不幸です。コティックが初めて海に降りたとき、彼の大きな頭は沈み、小さな後ろ足ひれは歌の中で母親が彼に言ったとおりに飛び上がりました。次の波が来ていなければ再び彼を戻せば、彼は溺れていただろう。

その後、彼はビーチのプールに寝そべり、パドリング中に波の波を体全体にかぶせて体を持ち上げることを学びましたが、怪我をする可能性のある大きな波に常に目を光らせていました。彼は足ひれの使い方を学ぶのに2週間かかりました。その間ずっと、彼は水の中に出たり入ったりして、咳き込み、うめき声を上げ、浜辺を這い上がり、砂浜で昼寝をし、また戻っていき、ついには

Machine Translated by Google

彼は本当に水に属していることがわかりました。

そうすれば、彼が仲間たちとローラーの下を潜りながら過ごした時間を想像できるでしょう。あるいは、大きな波が浜辺のはるか上まで渦を巻く中、コーマーの上に乗り込み、バシャバシャと音を立てて着地することもあった。あるいは、老人たちがしていたように、尻尾を立てて頭を掻くこともある。あるいは、洗い場から突き出た滑りやすい雑草だらけの岩の上で「I'm the King of the Castle」を演奏したり。時折、大きなフカヒレのような薄いヒレが岸近くを漂っているのが見えました。そして、それがシャチ、つまりグランパスであり、若いアザラシを手に入れることができたらそれを食べるのだと彼は知っていました。そしてコティックは矢のように浜辺へ向かい、まるで何も探していないかのようにヒレがゆっくりと揺れた。

10月下旬、アザラシたちは家族や部族ごとにセントポールズから深海へ出発し始め、苗床をめぐる争いはなくなり、ホルシッキーたちは好きな場所で遊んだ。 「来年、」マトカはコティックに言った。「あなたはホルスチックになるでしょう。でも今年は魚の捕まえ方を学ばなければなりません。』

二人は一緒に太平洋を横断し、マトカさんはコティックさんに、足ひれを脇に押し込み、小さな鼻を水面から出して仰向けに寝る方法を教えた。長く揺れる太平洋のうねりほど快適なゆりかごはありません。コティックさんが皮膚全体がチクチクするのを感じたとき、マトカさんは「水の感触」を学んでいる最中で、チクチクとしたチクチクとした感覚は悪天候が来ることを意味しており、一生懸命泳いで逃げなければならないと語った。

「もう少ししたら、どこへ泳げばいいかわかるでしょう、でも今は海豚、ネズミイルカを追っていきます。彼はいるから」と彼女は言った。

Machine Translated by Google

非常に賢明。'ネズミイルカの群れが身をかがめて水の中を引き裂いていたので、小さなコティックは全速力で彼らの後を追いました。 「どこに行くべきかどうやって知っていますか？」彼は喘ぎました。
学校のリーダーは白目をむいて下に身をかがめた。 「尻尾がチクチクするよ、若者」と彼は言った。 「つまり、私の後ろに強風が吹いているということです。来てください！スティッキーウォーター（赤道のことを指していた）の南にいるときに尻尾がチクチクするとき、それは目の前に強風が吹いているので北に向かう必要があることを意味します。来てください！ここの水は気持ち悪いです。」

これはコティックが学んだ非常に多くのことのうちの 1 つであり、彼は常に学び続けていました。マトカは彼に、海底岸に沿ってタラやオヒョウを追って、雑草に囲まれた穴から石をひり出すように教えた。水深百尋の深さに横たわる難破船を回避し、魚が走るたびにライフルの弾丸が舷窓から突っ込み、舷窓から外へ飛び出す方法。空に稲妻が走ったとき、波の上で踊り、風に乗りながらずんぐりした尾のアホウドリや軍人の鷹に丁寧に足ひれを振る様子。イルカのように水面から3～4フィートの高さで、足ひれを横に近づけ、尾を曲げてジャンプする方法。トビウオは骨が多いので放っておく。深さ十尋で全速力でタラの肩部分を取り出すこと、決して立ち止まってボートや船、特に手漕ぎボートを見ないこと。半年が経過した時点で、コティック氏が深海漁業について知らなかったことは、知る価値がありませんでした。そしてその間ずっと、彼はフリッパーを乾いた地面に置くことはありませんでした。

しかしある日、彼がフアン•フェルナンデス島沖のどこかの温水の中で半分眠って横たわっていたとき、

Machine Translated by Google

人間が足に春が来たときに感じるのと同じように、彼は全身が気絶して怠けているように感じ、七千マイル離れたノヴァストシュナの堅い浜辺、仲間たちが遊んだ遊び、海藻の匂い、アザラシの鳴き声を思い出した。 、そして戦闘。その瞬間、彼は北に向きを変え、着実に泳ぎ、進んでいくと、同じ場所に向かう何十人もの仲間たちに会い、彼らはこう言った、「こんにちは、コティック！」今年は私たち全員がホルスチックで、ルカノン沖のブレーカーでファイヤーダンスを踊ったり、新しい芝生でプレーしたりできます。でもそのコートどこで手に入れたの？』

コティックの毛皮は今ではほぼ真っ白になり、それをとても誇りに思いましたが、「早く泳ぎなさい」とだけ言いました。私の骨は土地を求めて痛んでいます。 」そこで彼らは皆、自分たちが生まれた海岸にやって来て、立ち込める霧の中で彼らの父親である年老いたアザラシが戦っているのを聞いた。

その夜、コティックは一年アザラシと一緒にファイヤーダンスを踊りました。夏の夜、海はノヴァストシュナからルカノンまでずっと火で満ちており、アザラシは後ろに燃える油のような航跡を残し、ジャンプすると燃えるような閃光を放ち、波は燐光のような大きな筋と渦を描きます。それから彼らは内陸のホルシッキーの敷地に行き、新しい野生の小麦の中を転がったり、転がったりして、海にいる間に何をしたかについて話しました。少年たちが夢中になっていた木の話をするのと同じように、彼らは太平洋について話しました。もしそれを理解できる人がいたら、彼は立ち去り、かつてないほどの海の地図を作成したかもしれません。 3歳と4歳のホルシッキーは、「若者たちよ、邪魔にならないで！」と叫びながらハッチンソンズ•ヒルから飛び降りた。の

Machine Translated by Google

海は深く、そこに何があるかはまだわかりません。ホーンを鳴らし終わるまで待ちます。こんにちは、年少さん、その白衣はどこで手に入れたのですか？

「理解できませんでした」とコティックは言った。 「伸びたね。」そして彼がスピーカーを転がそうとしたちょうどそのとき、真っ赤な顔をした黒髪の男数人が砂丘の後ろからやって来た。そして、これまで男を見たことのなかったコティックは咳き込んで頭を下げた。ホルシッキーはほんの数メートル離れて、愚かな様子で座って見つめていました。その男たちは、島のアザラシ猟師長ケリック•ブーテリンとその息子パタラモンに劣らなかった。彼らは海の養殖場から800mも離れた小さな村の出身で、どのアザラシを殺処分場まで追い込むか決めていた。アザラシは羊と同じように追い込まれたからで、後でアザラシの皮のジャケットに加工されるのだ。

「ほー！」パタラモンは言った。 '見て !白いシールがあるよ！」

ケリック•ブーテリンは油と煙で真っ白になった。彼はアレウト人であり、アレウト人は清潔な人々ではないからである。
それから彼は祈りをつぶやき始めました。 「彼に触れないでください、パタル•アモン。それ以来、私が生まれて以来、白いアザラシは存在しませんでした。おそらくそれはザハロフ老人の幽霊だろう。彼は去年、強風で行方不明になったんだ。」

「私は彼には近づきません」とパタラモンは言いました。 「彼は不運だ。
彼が昔のザハロフになって戻ってきたと本気で思っているのか ?私は彼にカモメの卵を買ってもらう借りがある。」
「彼を見ないでください」とケリックは言いました。 「あの4歳児の集団から離れてください。男たちは今日200頭の皮を剥ぐはずだが、まだシーズンの始まりで、この作業には慣れていない。百あれば十分だ。素早い！'

Machine Translated by Google

パタラモンがホルシッキーの群れの前で一対のアザラシの肩の骨をカタカタと鳴らすと、アザラシは息を吹きながら息絶えた。それから彼が近づくとアザラシたちは動き始め、ケリックはアザラシたちを内陸へ誘導したが、アザラシたちは決して仲間のもとへ戻ろうとはしなかった。何十万頭ものアザラシが彼らが追い込まれるのを見ていたが、彼らはまったく同じように遊び続けた。質問したのはコティックだけで、仲間たちは誰も彼に何も言えなかったが、男たちが毎年そのようにしてアザラシを追い続けていたのは毎年6週間か2か月だったという。

「私もついていきます」と彼は言い、頭から目が飛び出そうになりながら、群れの後を足を引きずりながら進んだ。

「白いアザラシが私たちを追いかけてくるよ」とパタラモンは叫びました。

「アザラシが単独で屠殺場に来たのは初めてだ。」

「しっ！」後ろを見ないでください」とケリックは言いました。 「ザハルです――」

ロフの幽霊！このことについて司祭に話さなければなりません。』

屠殺場までの距離はわずか800mしかなかったが、移動するのに1時間かかった。なぜなら、アザラシの速度が速すぎると熱くなり、皮を剥ぐときに毛皮が斑点状に剥がれてしまうことがケリックには分かっていたからである。それで彼らは非常にゆっくりと進み、アシカの首を通り過ぎ、ウェブスター•ハウスを通り過ぎ、海岸のアザラシの視界のすぐ向こうにある塩の家に着きました。コティックは息を切らせながら不思議そうに後を追った。彼は自分が世界の終わりにいると思ったが、後ろのアザラシの育苗場の轟音は、トンネル内の電車の轟音と同じくらい大きく聞こえた。それからケリックは苔の上に座り、重いピューターの時計を取り出し、30分間ドライブを冷やすと、コティックはその音を聞くことができました。

Machine Translated by Google

霧露が帽子のつばから滴り落ちていた。それから、それぞれ長さ3〜4フィートの鉄で縛られた棍棒を持った10人か12人の男がやって来て、ケリックは仲間に噛まれたか熱すぎた群れのうちの1人か2人を指さし、男たちはそれらを手で脇に蹴り飛ばしました。セイウチの喉の皮でできた重いブーツを履かせて、ケリックは「放して！」と言った。それから男たちはできるだけ早くアザラシの頭をこん棒で打ちました。

10分後、小さなコティックはもう友達だと認識できませんでした。なぜなら、彼らの皮膚は鼻から後ろ足ひれまで剥ぎ取られ、鞭で剥がされ、山積みになって地面に投げ捨てられたからです。コティックにとってはそれで十分だった。彼は向きを変えて海に戻っていきました（アザラシは短時間であれば非常に速く疾走することがあります）。彼の小さな新しい口ひげは恐怖で逆立っていました。オオアシカが波打ち際に座るアシカの首で、彼は足ひれを頭上から冷たい水の中に投げ込み、そこで体を揺らし、惨めにあえぎました。 「ここには何があるの？」アシカは不機嫌そうに言いました。アシカは原則として自分自身を守るからです。

『スクーニー !オーチェンスクーニー！ （「私は寂しい、とても寂しい！」)とコティックは言いました。 「彼らはすべてのビーチのホルスチック•アイを皆殺しにしているんだ！」

アシカは頭を岸に向けました。 「ナンセンス！」彼は言った。 「君の友達は相変わらず騒いでいるよ。ケリック老人がドライブで磨きをかけているのを見たことがあるはずだ。彼はそれを30年間も続けてきました。」

「ひどいことだ」とコティックは波が押し寄せてきたときに水を引き、足ひれのスクリューストロークで体を安定させ、全員が3インチ以内に立つことができたように言った

Machine Translated by Google

岩のギザギザの縁のこと。

「一歳馬としてはよくやった！」泳ぎが上手なアシカは言いました。 「あなたの見方からすると、かなりひどいことだと思いますが、アザラシが毎年ここに来るのなら、当然、男たちにそのことが知られるでしょう、そして、一度も人間が来ない島を見つけられない限り、あなたはそうするでしょう」常に駆り立てられなさい。』

「そんな島はないの？」コティックは始めた。

「私はポルトゥース（オヒョウ）を20年間追いかけてきましたが、まだ見つけたとは言えません。しかし、ここを見てください - あなたは目上の人と話すのが好きのようです - セイウチ島に行ってシーヴィッチと話すとしましょう。彼は何かを知っているかもしれない。そんなふうに飛びつかないでください。 6マイル泳ぐのだから、もし私だったら、まず船から引き上げて昼寝をするべきだよ、お嬢ちゃん。」

コティックさんは、それは良いアドバイスだと思い、自分の浜辺まで泳いで引き上げ、アザラシのように体中をぴくぴくさせながら30分ほど眠った。それから彼は、ノヴァストシュナのほぼ真北東にある岩だらけの小さな低い島であるセイウチ島にまっすぐ向かいました。すべての棚と岩とカモメの巣があり、セイウチが単独で群がっていました。

彼は、年老いたシーヴィッチ（北太平洋に生息する、大きくて醜くて、太って、にきびができ、首が太く、長い牙を持ったセイウチで、寝ている時以外は礼儀を持たない）の近くに、当時と同じように後ろ足で着陸した。足ひれは半分波に乗り、半分は波から出ます。

'起きろ！'カモメが大きな音を立てていたので、コティックは吠えました。

「ハッ !ほー !ふん !あれは何でしょう？'シービッチはそう言いました、そして次のセイウチを牙で一撃して目を覚まし、次のセイウチが次のセイウチを打ち、そして全員が死ぬまで繰り返しました。

Machine Translated by Google

目が覚めて、正しい方向以外のあらゆる方向を見つめています。

'こんにちは !私だよ」とコティックは波に揺れながら小さな白いナメクジのように言った。

'良い !皮を剥かれてもいいですか！』とシーヴィッチが言うと、眠そうな老紳士でいっぱいのクラブが小さな男の子を見るのと同じように、全員がコティックを見た。コティックはそのとき、皮剥ぎについてそれ以上聞く気はなかった。彼はそれを十分に見ていた。そこで彼はこう呼びかけた。「人間が決して来ないところに、アザラシが行く場所はないものだろうか？」

「行って調べてみろよ」シーヴィッチは目を閉じながら言った。 '逃げる。私たちはここで忙しいのです。』

コティックはイルカのように空中でジャンプし、できる限り大声で「アサリを食べる人！」と叫びました。ハマグリを食べる人 !彼は、シーヴィッチが人生で一度も魚を釣ったことがなく、いつもハマグリや海藻を求めていたことを知っていました。彼はとてもひどい人のふりをしていましたが。当然のことながら、チッキー、グーバールースキー、エパトカ、ブルゴマスターカモメ、ミツユビカモメ、ツノメドリは、常に無礼な態度を取る機会を狙っており、叫び声を上げました、そして――リンマーシンが私にこう言いました――

5分間近く、セイウチ島で銃声が聞こえなかったはずだ。住民全員が「アサリを食べる人！」と叫び、叫んでいました。スタリーク[老人] !その間、シーヴィッチはうめき声と咳き込みながら左右に転がりました。

「さあ、教えてくれる？」コティックは息を切らしながら言った。

「シーカウに行って聞いてください」とシーヴィッチは言いました。 「彼がまだ生きていれば、あなたに伝えることができるでしょう。」

「シーカウに会ったとき、どうやって彼を知ることができますか？」言ったコティック、切り捨てる。

「海の中でシービッチより醜いのは彼だけだよ」

Machine Translated by Google

バーゴマスターカモメがシーヴィッチの鼻の下を走りながら叫びました。 「もっと醜くて、マナーも悪い！」スタリーク！

コティックさんはカモメの悲鳴を上げたまま、泳いでノヴァストシュナに戻った。そこで彼は、アザラシのための静かな場所を見つけようとする彼の小さな試みに誰も同情してくれなかったことに気づきました。
彼らは彼に、ホルスチック•イエを運転するのはいつも男性だった――それはその日の仕事の一部だった――そして、もし醜いものを見るのが嫌なら、殺害現場に行くべきではなかった、と語った。しかし、他のアザラシは誰もその殺害を目撃していなかったので、それが彼と彼の友人たちとの違いを生み出しました。

しかもコティックは白いアザラシだった。

「あなたがしなければならないことは、 」と息子の冒険を聞いた後、シーキャッチ老人は言いました。あと5年も経てば、自分のために戦えるようになるはずだ。 』彼の母親である心優しいマトカさんでさえ、「殺人を止めることは決してできないだろう」と言いました。海に行って遊んで、コティック。 」そしてコティックは立ち去り、とても重い気持ちでファイヤーダンスを踊りました。

その秋、彼はできる限り早くビーチを離れ、頭に浮かんだ観念のため、一人で出発した。もし海にそんな人間がいるなら、彼は海牛を見つけるつもりだった。そして、アザラシが住むのに適した堅い砂浜があって、人が近づくことができない静かな島を探すつもりだった。そこで彼は、北太平洋から南太平洋まで、一昼夜で300マイルも泳ぎながら、一人で探検に出かけました。彼は語り尽くせないほどの冒険に遭遇し、ウバザメ、マダラザメ、シュモクザメの捕獲からかろうじて逃れました。

Machine Translated by Google

彼は、海を行き来する信頼できない悪党たちや、ずっしりとした礼儀正しい魚たち、そして何百年も同じ場所に係留され、それをとても誇りに思っているアカホタテ貝たちに出会った。しかし、シーカウには一度も会わなかったし、気に入った島も見つけられなかった。

アザラシが遊べる砂浜の後ろに斜面があり、固い砂浜であれば、地平線にはいつも捕鯨船の煙が立ち込め、脂肪を煮詰めていた。コティックさんはそれが何を意味するのかを知っていた。あるいは、アザラシがかつてこの島を訪れて殺されたことがわかり、コティックはかつて人間が来た場所に彼らが再びやってくることを知っていた。

彼は年老いたずんぐりしたアホウドリに会いに行き、ケルゲレン島こそが平和で静かな場所だと教えてくれた。そしてコティックがそこに行ったとき、激しいみぞれの嵐で黒い崖に打ち砕かれる寸前だった。稲妻と雷鳴。しかし、強風に逆らって車を走らせると、かつてはアザラシの養殖場があったことが分かりました。そしてそれは彼が訪れた他のすべての島々でも同様であった。

リンマーシンはそれらの長いリストを挙げた。なぜなら、コティックはノヴァストシュナで毎年4か月の休息をとりながら、5シーズンを探検に費やしたが、当時はホルスシック家が彼と彼の想像上の島々をからかっていたからだという。彼は赤道直下の恐ろしく乾燥した場所、ガラパゴスに行き、そこで焼かれそうになった。彼はジョージア諸島、オークニー諸島、エメラルド島、リトル•ナイチンゲール島、ゴフ島、ブーベ島、クロセッツ、そして喜望峰の南にある小さな島にさえ行きました。しかしどこでも海の民は彼にこう言った。

Machine Translated by Google

同じこと。これらの島にはかつてアザラシがやって来ましたが、人間がアザラシをすべて殺してしまったのです。太平洋から何千マイルも泳いでコリエンテス岬と呼ばれる場所に着いた時でさえ（それは彼がゴフ島から戻ってきたときだった）、彼は岩の上に数百匹の汚いアザラシを見つけ、そこに人間が来たと言った。あまりにも。

そのことで彼の心は折れそうになり、彼はホーンを回って自分のビーチに戻りました。そして北へ向かう途中、彼は緑の木々が茂る島に引き上げ、そこで瀕死の年老いたアザラシを見つけたので、コティックは彼のために魚を捕まえて、すべての悲しみを彼に話しました。 「さあ、私はノヴァストシュナに戻るつもりです。ホルシッキーと一緒に殺人檻に追い込まれても、私は気にしません。」とコティックは言った。

古いアザラシは「もう一度やってみろ」と言った。私はマサフエラの失われた繁殖地の最後の人です。人間が私たちを十万人も殺していた時代には、いつか白いアザラシが北から出てきて、アザラシの人々を静かな場所に導くだろうと浜辺で話がありました。場所。私は年をとったので、生きてその日を迎えることはできないが、他の人たちはそうするだろう。もう一度試してみてください。

そして、コティックは口ひげを丸めて（とても美しかったです）、こう言いました、「私はこれまでに海岸で生まれた唯一の白いアザラシであり、黒人であろうが白人であろうが、新しい島を探そうと考えたことがある唯一のアザラシです」 。」

これは彼を非常に元気づけた。そしてその夏、彼がノヴァストシュナに戻ってきたとき、母親のマトカは彼に結婚して定住するように懇願した。なぜなら彼はもうホルスチックではなく、肩に巻き毛の白いたてがみを生やした、成長した海の獲物だったからである。父親と同じくらい重く、大きく、そして獰猛だった。

「もう1シーズンください」と彼は言った。 「覚えておいて、お母さん、それは

Machine Translated by Google

常に、ビーチを最も遠くまで遡る 7 番目の波です。」

奇妙なことに、彼女が結婚を翌年まで延期すると考えていた別のアザラシがいて、コティックは最後の探検に出発する前夜、ルカノンビーチで彼女と一緒にファイヤーダンスを踊りました。今度は彼が西へ向かったのは、オヒョウの大群の足跡に落ちたためであり、健康を保つためには一日に少なくとも百ポンドの魚が必要だったからだ。彼は疲れるまで彼らを追いかけ、その後、カッパー島に押し寄せる地面のうねりのくぼみで丸まって眠りました。彼は海岸のことをよく知っていたので、真夜中ごろ、雑草の生えた床にそっとぶつかったのを感じたとき、「うーん、今夜は潮が強いな」と言い、水中で寝返りを打つと、ゆっくりと目を開けて背伸びをした。それから彼は猫のように飛び跳ねた。なぜなら、浅瀬で巨大な物体がうろつき、雑草の茂った縁をうろうろしているのが見えたからである。

「マゼランの偉大なる戦闘員たちよ！」彼は自分の下で言った口ひげ。「深海のこの人たちは誰ですか？」

それらは、コティックがこれまで見たことのない、セイウチ、アシカ、アザラシ、クマ、クジラ、サメ、魚、イカ、ホタテ貝とは似ていませんでした。体長は20フィートから30フィートで、後ろ足ひれはありませんでしたが、濡れた革を削り取ったかのようなシャベルのような尾を持っていました。彼らの頭は、あなたがこれまで見た中で最も愚かに見えるものであり、草を食べていないときは深い水の中で尻尾の端でバランスを取り、お互いに厳かにお辞儀をし、太った男が首を振るように前足ひれを振っていました。腕。

「へーん！」コティックは言った。「紳士諸君、スポーツはいいですか？」おおきい

Machine Translated by Google

カエルの従者のように、お辞儀をしたり足ひれを振ったりすることで答えました。再び餌を食べ始めたとき、コティックさんは、彼らの上唇が2つに裂けており、1フィートほどぴくぴくと引き離し、その裂け目に1ブッシェル丸ごとの海藻を挟んで再びくっつけることができるのに気づいた。彼らはそれを口に押し込み、厳かにむしゃむしゃと鳴らした。

「めちゃくちゃな食事スタイルだよ、あれは」とコティックは言った。彼らは再び頭を下げたが、コティックは癇癪を起こし始めた。 「とてもよかった」と彼は言った。「フロントフリッパーに余分なジョイントがあったとしても、それを誇示する必要はありません。あなたが優雅にお辞儀をしているのはわかりますが、私はあなたの名前を知りたいのです。』裂けた唇がぴくりと動いた。そしてガラスのような緑色の目は見つめていましたが、何も話していませんでした。

'良い！'コティックは言った。 「私がこれまでに会ったのはあなただけです シーヴィッチよりも醜くて、マナーも悪い。』

それから彼は、彼がまだ1歳のときにセイウチ島でバーゴマスターカモメが彼に叫んだことを瞬時に思い出し、ついにシーカウを見つけたと知ったので、水の中で後ろ向きに転がりました。

海牛たちはしゃがんで草を食べ、雑草を食べ続けました。コティックは旅行中に覚えたあらゆる言語で彼らに質問しました。そして海の民は人間とほぼ同じ数の言語を話します。

しかし、カイギュウは話すことができないので、カイギュウたちは答えませんでした。彼の首には本来7本あるべき骨が6本しかなく、そのせいで仲間とさえ話すことができないと海中では言われている。しかし、ご存知のとおり、彼の前足には余分な関節があり、それを上下に振ることで、ある種の答えを作ります。

Machine Translated by Google

ぎこちない電信コード。

日が暮れるまでに、コティックのたてがみは逆立ち、死んだカニが行くところに彼の気性は消えていました。それからカイギュウは非常にゆっくりと北に向かって進み始め、時々立ち止まってばかばかしいお辞儀をする会議を開きました、そしてコティックは彼らの後を追ってこう言いました、「こんな馬鹿な奴らはもし彼らがいたらとっくに殺されていただろう」安全な島を見つけられなかった。そして、カイカウにとって十分なものは、シーキャッチにとっても十分です。それにしても、急いでほしいですね。」

コティックにとってそれは疲れる作業だった。群れは一日に40、50マイル以上進むことはなく、夜には餌を食べるために立ち止まり、常に海岸の近くにいた。一方、コティックは彼らの周りを泳いだり、上を行ったり、下を泳いだりしましたが、彼らを0.5マイルも急ぐことはできませんでした。彼らがさらに北に進むにつれて、彼らは数時間ごとに頭を下げた評議会を開催しました、そしてコティックは彼らが暖かい水の流れをたどっているのを見るまで焦って口ひげを噛みちぎりそうになりました、そしてそれから彼は彼らをもっと尊敬しました。

ある夜、彼らは輝く水の中を石のように沈み、彼が知って以来初めて、彼らが素早く泳ぎ始めました。コティックもその後に続き、そのスピードに彼は驚いた。シーカウが水泳選手とは夢にも思わなかったからだ。彼らは海岸沿いの崖に向かいました。その崖は深い水に流れ落ちており、海底二十尋のそのふもとにある暗い穴に飛び込みました。長い長い泳ぎだったので、コティックさんは彼らに導かれて暗いトンネルから出る前に、新鮮な空気を欲しがっていました。

「私のかつら！」彼は立ち上がり、息を切らして息を吐きながら言った。

Machine Translated by Google

遠くの端には開いた水域。 「長いダイビングでしたが、その価値はありました。」

カイギュウたちは別れて、コティックがこれまで見た中で最も素晴らしいビーチの端に沿ってのんびりとぶらぶらしていました。滑らかに磨耗した岩が何マイルも続いていて、まさにアザラシの育苗場を作るのにぴったりだった。その後ろには内陸に傾斜した硬い砂の遊び場があり、アザラシが踊るためのローラーと長い草があった。転がり込み、砂丘を上り下りし、そして何よりも、本当の海の獲物を決して欺くことのない水の感触によって、コティックはそこに人間が誰も来たことがないことを知っていました。

彼が最初にしたことは、釣りがうまくいったことを自分に確信させることであり、それから海岸に沿って泳ぎ、美しい霧の中に半分隠れている楽しい低い砂浜の島々を数えました。北の海に向かうと、浜から6マイル以内に船が近づくことのできないようなバー、浅瀬、岩が連なり、島と本土の間には深い水域が続き、海まで流れていました。垂直の崖があり、崖の下のどこかにトンネルの入り口がありました。

「またしてもノヴァストシュナだけど、10倍良くなった」とコティックは語った。 「海牛は私が思っていたよりも賢いに違いない。たとえ男性がいたとしても、男性は崖を降りることはできません。そして、浅瀬が海側に押し寄せると、船は砕け散ってしまうだろう。海の中で安全な場所があるとしたら、ここです。」

彼は自分が残した封印のことを思い出し始めたが、急いでノヴァストシュナに戻りながらも、すべての疑問に答えられるように新しい国を徹底的に探索した。

Machine Translated by Google

それから彼は潜ってトンネルの口を確認し、南に向かって走りました。海牛やアザラシ以外の誰も、そんな場所があるとは夢にも思わなかったでしょう。そして、崖を振り返ったとき、コティックですら自分が崖の下にいたとは信じられませんでした。

彼は家に帰るのに6日かかりましたが、ゆっくり泳いでいたわけではありませんでした。そして彼がアシカの首のすぐ上に引き上げたとき、彼が最初に出会ったのは彼を待っていたアザラシでした、そして彼女は彼の目の表情で彼がついに自分の島を見つけたことがわかりました。

しかし、ホルシッキーとシーキャッチ、彼の父親、そして他のすべてのアザラシは、彼が発見したことを話すと彼を笑いました。そして、彼と同じくらいの年齢の若いアザラシが、「これは大丈夫だよ、コティック、でもあなたにはできるよ」と言いました。誰もどこから来たのか分からず、私たちにこのように退去を命じるのは不可能です。私たちは保育園のために戦ってきたことを忘れないでください、そしてそれはあなたが決してしなかったことです。あなたは海の中を徘徊することを好みましたね。

他のアザラシたちはこれを見て笑い、若いアザラシは頭を左右にひねり始めました。彼はその年に結婚したばかりで、そのことで大騒ぎしていた。

「私には争う保育園はない」とコティックさんは言った。 「私はただ、皆さんに安全な場所を見せたいだけです。戦って何の役に立つの？』

「ああ、もしあなたが撤退しようとしているなら、もちろん私はこれ以上言うことはありません」と若いアザラシは醜い笑い声で言いました。

「私が勝ったら一緒に来てくれる？」コティックは言った。そして、彼の目には青信号が差しました。なぜなら、彼は戦わなければならないことに非常に腹を立てていたからです。

「とてもよかった」と若いアザラシが何気なく言いました。 「勝てば、

Machine Translated by Google

行きますよ。』

コティックの頭は外れ、歯は若いアザラシの首の脂肪にめり込んでいたので、彼には考えを変える時間がなかった。それから彼は尻もちをついて敵を浜辺に引きずり込み、揺さぶり、ひっくり返した。それからコティックはアザラシたちに向かって「私はこの5シーズン、あなたのために最善を尽くしてきた」と叫びました。私はあなたに安全な島を見つけました。しかし、愚かな首から首を引きずり落とさない限り、あなたは信じられないでしょう。今から教えます。気をつけてください！

リンマーシンは私に、彼の人生で一度もなかった、そしてリンマーシンは毎年一万匹の大きなアザラシが争うのを見ているが、彼の小さな人生の中で、コティックが苗床に突撃するような光景を一度も見たことがなかった、と私に語った。彼は見つけた最大の獲物に身を投げ、喉をつかみ、首を絞め、ぶつかり、容赦を求めてうめき声をあげるまで殴り、それから彼を脇に投げ捨てて次の獲物を攻撃した。ご存知のとおり、コティックはオオアザラシが毎年そうしていたように 4 か月間絶食したことはなく、深海への水泳旅行で完璧な状態を保っていました。そして何よりも、彼はこれまで一度も戦ったことがありませんでした。彼の巻き毛の白いたてがみは怒りで立ち上がり、目は燃え上がり、大きな犬の歯が光り、その姿は素晴らしかったです。彼の父親であるオールド•シー•キャッチは、彼がハイイログマの老アザラシをまるでオヒョウであるかのように引きずり、若い独身者たちを四方八方で動揺させながら通り過ぎていくのを見た。するとシーキャッチは咆哮をあげて叫びました、「彼は愚か者かもしれないが、浜辺で一番の戦士だ！」息子よ、お父さんにタックルしないでください！彼はあなたと一緒です！

コティックが答えて咆哮を上げ、シーキャッチ老人がよちよちと入ってきた。

Machine Translated by Google

マトカとコティックと結婚するアザラシは身を縮めて彼らの男たちを賞賛している間、口ひげを逆立てて機関車のように吹いていた。それは見事な戦いだった。頭をもたげようとするアザラシがいる限り、二匹は戦い、アザラシがいないときは、雄叫びをあげながら並んで海岸を盛大に行進した。

夜、オーロラが霧の中で瞬きしながら瞬いている頃、コティックさんは裸の岩に登り、点在する苗床と引き裂かれて血を流しているアザラシを見下ろした。「さて、私はあなたに教訓を教えました。」と彼は言いました。

「私のかつら！」シーキャッチ爺さんは、恐ろしく襲われたので、体を硬直させながら言いました。 「シャチ自身でも、これ以上に彼らを切り刻むことはできなかったでしょう。息子よ、私はあなたを誇りに思います、そしてさらに、あなたの島にあなたと一緒に行きます—そのような場所があるなら。

「聞け、海の太った豚たちよ。誰が私と一緒に海牛のトンネルに来ますか? 答えなさい、そうでないとまた教えてあげるよ」とコティックは怒鳴った。

浜辺の上下には、潮のさざ波のようなせせらぎが響いていました。 「必ず行きます」と何千もの疲れた声が聞こえた。 「私たちは白いアザラシのコティックに従います。」

それからコティックは肩の間に頭を落とし、誇らしげに目を閉じた。彼はもう白いアザラシではなく、頭から尻尾まで真っ赤でした。それでも、彼は自分の傷の一つを見たり触れたりすることを軽蔑したでしょう。

1週間後、彼と彼の軍隊（約1万頭のホル•ルシッキーと古いアザラシ）は、コティックが先頭に立って北のシーカウのトンネルへ出発したが、ノヴァストシュナに残ったアザラシたちは彼らを愚か者と呼んだ。しかし、次の春、彼らは

Machine Translated by Google

すべてが太平洋の漁岸の沖合で出会い、コティックアザラシはシーカウのトンネルの向こうにある新しい浜辺の物語を語り、ますます多くのアザラシがノヴァストシュナを去りました。もちろん、アザラシはそれほど賢くはなく、頭の中で物事を切り替えるのに長い時間がかかるため、すべてが一度に完了したわけではありませんが、年々、より多くのアザラシがノヴァストシュナとルカノンから去っていきました。そして他の苗床へ、コティックは夏の間ずっと座って、年々大きく太って強くなり、ホルシッキーがコティックの周りで遊んでいるあの海で、静かで守られたビーチへ。

男は来ない。

Machine Translated by Google

ルカノン

これは、夏にすべてのセントポールアザラシがビーチに帰るときに歌う深海の偉大な歌です。それは一種の非常に悲しいアザラシ国歌です。

朝、友達に会った（そして、ああ、でも私は年をとった！）
棚の上で轟音を立てているところに、夏の地面のうねりがうねりました。
彼らがブレイカーズの歌「ルカノンの浜辺」をかき消したコーラスを200万人の声で力強く持ち上げるのを聞いた。

塩のラグーンのそばの楽しい駅の歌、砂丘を足を引きずって
下る爆破飛行隊の歌、海を炎に巻き上げた真夜中のダンスの歌、アザラシ漁が来る前のルカノンの浜辺！

朝、友達に会った（もう会えない！）。彼らは軍団を組んで行き来し、
海岸全体が暗くなった。
そして声が届くかぎり泡が飛び散る沖合で私たちは上陸部隊を呼び、
浜辺で歌いました。

ルカノンの浜辺 — とても背の高い冬小麦 — 滴り落ち、しわが
寄った地衣類、そしてすべてを濡らす海霧！
私たちの遊び場のプラットフォームは、すべて滑らかに輝いていて、使い古されています。

ルカノンのビーチ、私たちが生まれた家です。

Machine Translated by Google

朝、私は仲間たちと会ったが、そのバンドはバラバラになってバラバラになっていた。
男たちは私たちを水の中で撃ち、陸上ではこん棒で押し倒します。男たちは愚かな羊
のように私たちを塩の家に連れて行き、飼い慣らされていますが、それでも私たちはアザラシ
猟師が来る前にルカノンを歌います。

ホイールを下に、ホイールを南に下げます。おお、グーベルースカ、行け！
そして深海副王たちに私たちの悲惨な話を伝えてください。嵐が海岸に打ち上げられ
るサメの卵のように空っぽになる前に、ルカノンの浜辺はもう彼らの息子たちを知ることは
ないだろう！

Machine Translated by Google

「リッキ•ティッキ•タビ」

彼が入った穴で、レッドアイはリンクルス
キンを呼びました。
小さなレッドアイの言うことを聞いてくださ
い。「おやすみ、立ち上がって死と踊ろう！」

目と目、そして頭と頭、（尺度を守ってね、
ナグ。）
これは人が死んだら終わります。 （よろしけ
れば、ナグ。）

ハッ !フードをかぶった死神が逃した！
（悲惨だ、ナグ！）

これは、リッキ•ティキ•タヴィがセゴウリーカントンメントの大きなバンガローのバスルームを通して独力で戦った大戦争の物語である。テイラーバードのダージーが彼を助け、ジャコウネズミのチュチュンドラは床の真ん中には出てこず、いつも壁のそばを這い回ってアドバイスをくれたが、実際に戦ったのはリッキーティッキだった。

彼はマングースで、毛皮や尻尾はむしろ小さな猫に似ていましたが、頭と習慣はまったくイタチに似ていました。
彼の目と落ち着きのない鼻の端はピンク色でした。彼ができた

Machine Translated by Google

前でも後ろでも、自分が選んだ足の好きな場所で自分自身を掻きます。彼はボトルブラシのように見えるまで尻尾をふわふわにすることができ、長い草の間を走り回るときの雄叫びは「リック、ティク、ティッキ、ティッキ、チク！」でした。

ある日、夏の大洪水で、父と母と一緒に住んでいた巣穴から彼は流され、車に乗せられ、足を蹴ったりカチャカチャ鳴らしたりしながら、道端の溝に転がり落ちた。彼はそこに浮かんでいる小さな草の束を見つけ、意識を失うまでそれにしがみつきました。彼が生き返ったとき、彼は庭の小道の真ん中で炎天下で本当に引きずりながら横たわっていて、小さな男の子が「ここに死んだマングースがいる」と言っていた。お葬式をしましょう。』

「いいえ」と母親は言いました、「この子を連れて行って乾かしましょう。」あたりたぶん彼は本当に死んでいないよ。」

彼らは彼を家に連れて行き、大男が彼を指と親指の間に抱き上げ、彼は死んではいないが半分窒息していると言いました。それで彼らは彼を脱脂綿で包み、小さな火で暖めると、彼は目を開けてくしゃみをしました。

「さて」大男（彼はバンガローに引っ越してきたばかりのイギリス人だった)は言った、「怖がらせるなよ、どうするか見てみましょう。」

マングースを怖がらせるのはこの世で最も難しいことです。なぜなら、マングースは好奇心で鼻から尻尾まで食べられてしまうからです。
マングースの家族全員のモットーは「走って見つけよう」であり、リッキティッキは本物のマングースでした。彼は綿毛を見て、これは食べてはいけないと判断し、テーブルの周りを走り回り、起き上がって毛皮を整え、体を掻き、小さな男の子の肩に飛び乗りました。

Machine Translated by Google

「怖がらないで、テディ」と父親は言いました。 「それが彼の友達を作る方法だよ。」

「ああ !私のあごの下をくすぐったいのよ」とテディが言いました。

リッキ•ティッキは少年の襟と首の間を見下ろし、耳を嗅ぎ、床に降りると、そこで座って鼻をこすっていた。

「ありがたいですね」とテディの母親は言いました。「それは野生の生き物なのよ！」私たちが彼に親切にしていたから、彼はとてもおとなしいのだと思います。」

「マングースはみんなそうだよ」と夫は言った。 「テディがしっぽを掴んだり、ケージに入れたりしないと、一日中家の中を走り回ってしまうでしょう。彼に何か食べるものをあげましょう。』

彼らは彼に生の肉を少し与えました。リッキティッキはそれがとても気に入ったので、完成するとベランダに出て日向に座って毛皮をふわふわにして根元まで乾かしました。それから彼の気分は良くなりました。

「この家には、家族全員が一生かけて見つけられるよりも、もっとたくさんのことを知るべきだ」と彼は心の中で思った。私は必ず滞在して調べます。』

彼はその日ずっと家の中を歩き回って過ごした。彼は浴槽で溺れそうになり、筆記用具のインクに鼻を突っ込み、大男の葉巻の先で燃やした。なぜなら、彼はどのように筆記が行われるのかを見るために大男の膝に登ったからである。 。夕方になると、テディの子供部屋に駆け込んで灯油ランプに火が灯る様子を観察し、テディが寝るとリッキーティッキも登ってきました。しかし、彼は一晩中起きてすべての物音に耳を傾け、その原因を探らなければならなかったので、落ち着きのない仲間でした。

Machine Translated by Google

最後にテディの母親と父親が息子の様子を見にやって来たが、リッキー•ティッキは枕の上で起きていた。 「それは好きじゃない」とテディの母親は言いました。 「彼は子供を噛むかもしれない。」 「彼はそんなことはしません」と父親は言いました。 「テディは、ブラッドハウンドに見張ってもらうよりも、あの小さな野獣と一緒にいるほうが安全だ。もし今、保育園にヘビが入ってきたとしたら——』

しかし、テディの母親は、それほどひどいことは考えなかったでしょう。

朝早く、リッキーティッキがテディの肩に乗ってベランダに早めの朝食を取りに来て、バナナとゆで卵を与えました。彼は次々と彼ら全員の膝の上に座りました。なぜなら、育ちの良いマングースは皆、いつかイエマングースになって走り回れる部屋を持ちたいと常に願っているからです。そしてリッキ•ティッキの母親（彼女はセゴウリーの将軍の家に住んでいた）は、もし白人男性に出会ったらどうするべきかをリッキーに注意深く教えていた。

それから、リッキ•ティッキは何が見られるのかを見ようと庭に出ました。そこは広い庭園で、半分しか耕作されておらず、サマーハウスほどの大きさのニール•ローズ元帥の茂み、ライムやオレンジの木、竹の群生、そして高い草の茂みがあった。リッキティッキは唇をなめた。 「ここはすばらしい狩場だ」と彼は言い、そのことを考えると尻尾がビンのようにふさふさになり、庭を行ったり来たり、あちこちで鼻を鳴らしながら、茨の茂みの中でとても悲しい声が聞こえるまで走り回った。 。

それはテーラーバードのダージーとその妻でした。彼らは2枚の大きな葉を引っ張り、端を繊維で縫い合わせて美しい巣を作り、その空洞を綿と綿毛で満たしていました。巣が揺れて

Machine Translated by Google

彼らは縁に座って泣いていた。

'何か問題でもありますか？'リッキティッキは尋ねた。

「私たちはとても惨めです」とダージーさんは言いました。 「昨日、私たちの赤ちゃんの1匹が巣から落ちて、ナグがそれを食べました。」

「うーん！」リッキー•ティッキは言いました、「それはとても悲しいことですが、私はここの見知らぬ人。ナグって誰？』

ダージーと妻は何も答えずに巣の中でうずくまるだけだった。なぜなら、藪のふもとの濃い草の中から、シューという低い音が聞こえてきたからである。その恐ろしい冷たい音は、リッキ•ティッキを二メートルも飛び退かせるほどだった。それから、草の中から少しずつ頭が立ち上がり、大きな黒いコブラ、ナグのフードが広がり、舌から尻尾までの長さは5フィートでした。身体の三分の一を地面から持ち上げたとき、彼はちょうどタンポポのライオンの房が風に吹かれてバランスをとっているように、前後にバランスを取り続け、表現を決して変えることのない邪悪な蛇の目でリッキ•ティッキを見つめた。蛇が何を考えていても構いません。

「ナグって誰？」と彼は言いました。 「私はナグです。偉大な神ブラームは、最初のコブラがブラームが眠っているときに太陽を遮るためにフードを広げたとき、私たちのすべての人々にその印を付けました。見て、怖がってください！』

フードを今まで以上に広げると、リッキティッキはその裏にかぎホックの目の部分にそっくりなメガネマークを見つけた。彼は一瞬怖かったが、マングースが長時間怯え続けることは不可能であり、リッキー•ティッキはこれまで生きたコブラに会ったことがなかったが、母親が彼に死んだコブラを食べさせていたので、すべてを知っていた。成長したマングースの生涯の仕事は、ヘビと戦って食べることでした。ナグはそれを知っていた

Machine Translated by Google

そして冷酷な心の底では恐怖を感じていた。

「そうですね」とリッキー•ティッキが言うと、尻尾は再びふわふわし始めました。「跡があるかないか、巣から出てきた雛を食べるのは正しいと思いますか？」

ナグはひとり考えながら、リッキ•ティッキの後ろの草むらのほんの小さな動きを眺めていた。彼は、庭のマングースが自分と家族にとって遅かれ早かれ死を意味することを知っていましたが、リッキ•ティッキを油断させたかったのです。それで彼は頭を少し下げて横に置きました。

「話しましょう」と彼は言いました。 「あなたは卵を食べます。なぜ鳥を食べてはいけないのですか？』

'あなたの後ろに !後ろを見てください !ダージーは歌いました。

Rikki-tikki は、見つめることで時間を無駄にするよりも賢明だと知っていました。
彼はできる限り高く空中に飛び上がり、その真下でナグの邪悪な妻であるナガイナの頭が勢いよく振り下ろされた。
彼女は彼が話しているときに彼の後ろに忍び寄って、彼を終わらせようとした。脳卒中が外れたとき、彼は彼女のひどいシューシューという音を聞いた。
彼は彼女の背中をほぼ横切って降りてきた。もし彼が年老いたマングースだったら、今が彼女の背中を一口で折る時だとわかっただろう。しかし彼はコブラの恐ろしい鞭打ちを恐れていた。確かに彼は噛みましたが、十分長く噛むことができず、揺れる尻尾から飛び退き、ナガイナは引き裂かれて怒ったままにしました。

「邪悪な、邪悪なダージー！」ナグはとげの茂みの中にある巣に向かって、手の届く限り高く鞭を打ちながら言いました。しかし、ダージーはヘビが届かない場所にそれを建てたので、それはただ前後に揺れるだけでした。

リッキ•ティッキは目が赤くなって熱くなったのを感じた（その時、

Machine Translated by Google

マングースは目が赤くなり、怒っています)そして小さなカンガルーのように尻尾と後ろ足で座り、周りを見回し、怒りでおしゃべりしました。しかし、ナグとナガイナは草むらに消えていました。ヘビはストロークを失敗しても、何も言わず、次に何をするのかについての兆候も示しません。リッキ•ティッキは、一度に2匹のヘビを管理できるかどうか自信がなかったため、彼らに従う気はありませんでした。そこで彼は家の近くの砂利道まで小走りで行き、座って考えました。それは彼にとって深刻な問題だった。

自然史の古い本を読むと、マングースがヘビと戦って偶然噛まれたとき、逃げて薬草を食べると病気が治ると書かれていることがわかります。それは真実ではありません。勝利を決めるのは、目の速さと足の速さ、つまりマングースのジャンプに対するヘビの打撃だけです。そして、ヘビが攻撃するときの頭の動きを目で追うことはできないため、これは物事をどんな魔法のハーブよりもはるかに素晴らしいものにします。リッキ•ティッキは自分が若いマングースであることを知っていたので、後ろからの打撃をなんとか逃れたと考えると、さらにうれしくなりました。それは彼に自分自身への自信を与え、テディが道を走って来るとき、リッキーティッキは撫でられる準備ができていました。

しかし、テディがかがみ込んだちょうどそのとき、塵の中で何かが少しうごめき、小さな声が言いました。「気をつけてください。 』私は死神だ！』それは、ほこりっぽい大地に選ばれし者として横たわっている、ほこりっぽい茶色のヘビのカライトだった。そして彼の咬傷はコブラと同じくらい危険です。しかし、彼は小さすぎて誰も彼のことを気に留めないため、人々に害を与えることが増えます。

リッキ•ティッキの目は再び赤くなり、独特の揺れ、揺れる動きでカライトに向かって踊りました。

Machine Translated by Google

彼の家族から受け継いだものだった。とても面白い見た目ですが、非常に完璧なバランスのとれた歩き方をしているので、好きな角度で飛び立つことができ、ヘビを扱う際にはこれが有利です。リッキー•ティッキが知っていたら、彼はナグと戦うよりもはるかに危険なことをしていた、というのは、カライトはとても小さくて、とても素早く回転するので、リッキーが後頭部に噛みつかない限り、返り討ちに遭うだろうからである。目や唇をなでる。しかしリキは知らなかった。彼の目は真っ赤で、抱きしめるのに適した場所を探して前後に揺れました。カライトは三振。リッキーは横にジャンプして駆け込もうとしたが、邪悪な小さな埃っぽい灰色の頭が肩のほんの少しの距離でぶつかり、彼は体を飛び越えなければならず、頭は彼のかかとにぴったりと追従した。

テディは家に向かって叫びました。「ああ、見てください！」うちのマングースがヘビを殺してるよ。 」そしてリッキティッキはテディの母親から叫び声を聞きました。父親は棒を持って走っていきましたが、父親が駆け上がった時には、カライトは一度遠くまで飛び出し、リッキーティッキは飛び上がってヘビの背中に飛び乗り、前足の間に頭を大きく落とし、大蛇の高いところまで噛みつきました。掴めるところまで後ろに戻り、転がり去った。その一口でカライトは麻痺し、リッキー•ティッキは家族の夕食時の習慣に従い、彼を尻尾から食べ尽くそうとしたとき、満腹の食事はマングースの速度を遅くすることを思い出した、そして全力を尽くしたければ素早さの準備ができているので、彼は体を薄くしておく必要があります。

テディの父親が死んだカライトを殴っている間、テディはヒマシ油の茂みの下で砂浴びに行った。 「それは何の役に立つのですか？」リッキティッキは思った。 「私はすべてを解決しました。 」それからテディの母親が彼を埃の中から拾い上げて抱きしめました

Machine Translated by Google

彼はテディを死から救ったと泣きながら言いました、そしてテディの父親は彼が摂理だと言ったので、テディは大きな怖い目でそれを見ていました。リッキ•ティッキはその大騒ぎをむしろ面白がっていたが、もちろん彼にはそれが理解できなかった。テディの母親は、ほこりの中で遊んでいたテディを撫でてあげてもよかったかもしれません。リッキーはとても楽しんでいました。

その夜の夕食時、テーブルの上のワイングラスの間を行ったり来たりしながら、彼はおいしいものを三度もお腹に詰め込んだかもしれない。しかし、彼はナグとナガイナのことを覚えていて、テディの母親に撫でられたり、撫でられたり、テディの肩に座ったりするのはとても気持ちがよかったが、時々目が赤くなり、長い雄叫びを上げた。 「リック•ティク•ティッキ•ティッキ•チク！」

テディは彼をベッドまで運んで、リッキー•ティッキが彼のあごの下で寝ていることを主張しました。リッキ•ティッキは、噛んだりひっかいたりすることができないほどよく育てられていましたが、テディが眠るとすぐに夜の散歩に出かけ、暗闇の中で壁際を這っているジャコウネズミのチュチュンドラに出くわしました。 。チュチュンドラは傷心の小さな野獣です。彼は一晩中泣き叫んで、部屋の真ん中に逃げようと決心しようとしました。しかし、彼は決してそこに到達しません。

「私を殺さないで」チュチュンドラは泣きそうに言いました。 「リク•キ•ティッキ、私を殺さないで！」

「ヘビ殺しがマスクラットを殺すと思いますか？」リッキティッキは軽蔑して言いました。

「ヘビを殺す者はヘビに殺されるのです」とチュク•フンドラはこれまで以上に悲しげに言った。 「そして、暗い夜にナグが私をあなたと間違えないようにするにはどうすればいいでしょうか？」

Machine Translated by Google

「少なくとも危険はありません」とリッキー•ティッキは言いました。でも、ナグは庭にいますが、あなたがそこに行かないことは知っています。』

「私のいとこであるネズミのチュアが教えてくれました――」とチュチュンドラは言い、そして立ち止まった。

「何を言いましたか？」

「へっ！」ナグはどこにでもいます、リッキティッキ。庭でチュアと話すべきだったね。』

「私はしませんでした。だからあなたは私に言わなければなりません。」早くしろ、チュチュンドラ、さもないと噛みつくぞ！』

チュチュンドラは座って、ひげから涙が落ちるまで泣きました。 「私はとても貧しい男です」と彼はすすり泣きました。 「部屋の真ん中に飛び出すほどの元気はありませんでした。うーん !私はあなたに何も言ってはいけません。聞こえないの、リッキー•ティッキ？』

リッキティッキは聞いた。家は相変わらず静かだったが、彼はこの世で最もかすかなひっかき傷――窓ガラスの上を歩くスズメバチの音と同じくらいかすかな音――レンガについたヘビの鱗の乾いたひっかき音――を聞き取ることができると思った。仕事。

「あれはナグかナガイナだ」と彼は独り言を言った、「そして彼はバスルームの水門に潜り込んでいる。そうだよ、チュチュンドラ。チュアと話すべきだった。」

彼はこっそりテディのバスルームに行きましたが、そこには何もなく、それからテディの母親のバスルームに行きました。滑らかな漆喰壁の底には、風呂の水の水門を作るために引き抜かれたレンガがあり、リッキー•ティッキが風呂が設置されている石積みの縁石のそばに忍び込んだとき、外でナグとナガイナがささやき合っているのが聞こえた。月光。

「家に人がいなくなったら」とナガイナは言った。

Machine Translated by Google

彼女の夫は、「彼は去らなければならないでしょう。そうすれば、庭は再び私たちのものになります。 」静かに入ってください、そしてカライトを殺した大男が最初に噛む人であることを忘れないでください。それなら出てきて教えてくれ、一緒にリッキ•ティッキを狩ろう。 」

「しかし、それによって何か得られるものがあると確信していますか？」人々を殺すのか？』ナグは言いました。

'すべて。バンガローに人がいなかったとき、庭にマングースがいたでしょうか？バンガローが空である限り、私たちは庭の王様であり女王です。そして、メロン苗床の卵が孵化したらすぐに（明日になるかもしれないが）、私たちの子供たちは部屋と静かさが必要になることを忘れないでください。 」

「そんなことは考えもしなかった」とナグは言った。 「私は行きますが、その後リッキ•ティッキを探す必要はありません。できれば大男とその妻、そして子供を殺して、静かに立ち去るつもりだ。そうすればバンガローは空になり、リッキ•ティッキは去っていくだろう。 」

これにはリッキ•ティッキが怒りと憎しみで全身がうずき、その後ナグの頭が水門を通って現れ、彼の5フィートの冷たい体がそれに続いた。怒りながらも、リッキー•ティッキは大きなコブラの大きさを見て非常に怖がりました。ナグは身を丸めて頭を上げ、暗闇の中でバスルームを覗いてみると、リッキーの目が輝いているのが見えた。

「さて、ここで彼を殺せば、ナガイナは知るだろう。そしてもし私がオープンフロアで彼と戦えば、勝算は彼に有利だろう。どうしようかな？ 'リッキー•ティッキ•タヴィは言いました。

ナグがあちこちに手を振ると、リッキー•ティッキは彼がお風呂に水を入れるために使われていた一番大きな水がめから水を飲む音を聞いた。 「それはいいですね」と蛇は言いました。 「さて、カライトがいた頃、

Machine Translated by Google

殺された、大男は棒を持っていた。彼はまだその棒を持っているかもしれませんが、朝風呂に入るときには棒を持っていないでしょう。彼が来るまで私はここで待ちます。 「ナガイナ――聞こえますか？――私はここで昼まで涼しいところで待ちます。」

外からは何の返事もなかったので、リッキーティッキはナガイナがいなくなったことを知りました。ナグはとぐろを巻き、水がめの底の膨らみの周りにとぐろを巻き、リッキ•ティッキは死のようにじっとしていました。1時間後、彼は筋肉ごとに瓶に向かって動き始めた。ナグは眠っていて、リッキー•ティッキは彼の大きな背中を眺めながら、どの場所がうまくつかまるのに最適だろうと考えていました。 「最初のジャンプで腰を折らなければ、彼はまだ戦える」とリッキーは言った。そして彼が戦えば――おおリッキー !彼はフードの下の首の太さを見たが、それは彼にとっては多すぎた。しっぽの近くを噛まれたとしても、ナグは凶暴になるだけです。

「それは頭でしょう」と彼はついに言いました。 「頭の上のフード。そして、一度そこに着いたら、決して手放してはなりません。』

それから彼は飛び降りた。頭は水瓶から少し離れたところ、水瓶の湾曲の下に横たわっていた。そして歯が噛み合うと、リッキーは赤い土器の膨らみに背中を押しつけて頭を押さえた。これにより、彼はわずか 1 秒間購入できるようになり、それを最大限に活用しました。それから彼は、ネズミが犬に揺さぶられるように、床の上を行ったり来たり、上下に、そして大きく円を描くように、あちこちに殴られたが、遺体の運搬車が死体の上を横たわる中、彼の目は真っ赤になり、踏ん張った。床をひっくり返し、ブリキのひしゃく、石鹸皿、ブラシをひっくり返し、浴槽のブリキの側面に叩きつけました。抱きしめながら、彼はますますきつく顎を閉じた、なぜなら彼は確実に殴られて死ぬだろうから、そして彼の名誉のために。

Machine Translated by Google

家族にとって、彼は歯を固定した状態で発見されることを好みました。彼のすぐ後ろで雷鳴のように何かが鳴り響いたとき、彼はめまいと痛みを感じ、粉々に揺さぶられたように感じた。熱風が彼を意識を失い、赤い炎が彼の毛皮を焦がした。大男は物音で目が覚め、ボンネットのすぐ後ろのナグにショットガンの銃身を両方とも発砲したのだ。

リッキ•ティッキは目を閉じて耐えていたが、今のところ彼は自分が死んだことを確信していた。しかし、頭は動かなかったので、大男は彼を抱き上げて、「またマングースだ、アリス」と言った。その小さな男が今私たちの命を救ってくれました。」

それからテディの母親が真っ青な顔でやって来て、ナグの残骸を見て、リッキーティッキは自分をテディの寝室に引きずり込み、本当に侵入されたかどうかを確かめるために、残りの半分を優しく体を震わせて過ごしました。彼の想像通り、40個。

朝が来ると、彼はとても硬直していましたが、自分の行いにとても満足していました。 「今、私はナギナと和解する必要がありますが、彼女は5人のナギよりも悪いでしょう、そして彼女が話した卵がいつ孵化するかわかりません。良かったです !ダージーに会いに行かなければなりません」と彼は言った。

朝食を待たずに、リッキー•ティッキはダージーが声を張り上げて勝利の歌を歌っているいばらの茂みに走った。掃除人が遺体をゴミ山に投げ捨てたので、ナグの死のニュースが庭中に広まった。

「ああ、愚かな羽根の束よ！」リッキティッキは怒って言いました。「歌う時間ですか？」

「ナグは死んだ、死んだ、死んだ！」ダージーは歌いました。 「勇敢なリッキ•ティッキは彼の頭を掴んでしっかりと掴んだ。の

Machine Translated by Google

大男が強打棒を持ってきたので、ナグは真っ二つに倒れてしまいました！
彼は二度と私の子供を食べることはありません。」

「それはすべて十分に真実です。でもナガイナはどこにいるの？』リッキ•ティッキは周囲を注意深く見渡しながら言った。

「ナガイナが トイレの水門に来て、ナグを呼んだ」とダージーは続けた、「するとナグは棒の先に乗って出てきた――掃除人が棒の先にナグを拾い上げ、ゴミの山の上に放り投げた。」偉大なる、赤い目のリッキ•ティッキについて歌いましょう！」そしてダージーは喉をいっぱいにして歌いました。

「もしあなたの巣に登ることができたら、あなたの赤ちゃんを転がしてあげますよ！」リッキティッキは言いました。 「いつ、適切なタイミングで、適切なことをすればよいのかわかりません。そこの巣の中なら十分安全だが、ここでは私にとっては戦争だ。ちょっと歌うのはやめて、ダージー。』

「偉大なる、美しいリッキ•ティッキのために、私はやめます。」
とダージーは言いました。 「何ですか、恐ろしいナグを殺した者よ？」

「3回目、ナガイナはどこですか？」

「馬小屋のそばのゴミ山で、ナグを悼んでいる。
白い歯のリッキーティッキは素晴らしいよ。」

「白い歯が気になる！」彼女が卵をどこに保管しているか聞いたことがありますか？

「メロンベッドの、壁に一番近い端で、
太陽はほぼ一日中降り注ぐ。彼女は数週間前にそれらをそこに隠しました。」

「それで、私に言う価値があると思ったこともなかったのですか？」壁に一番近い端、って？』

「リッキーティッキ、彼女の卵は食べないの？」

「正確に食べないでください。いいえ。ダージー、少しでも分別があるなら、翼が折れたふりをして厩舎に飛んでいき、ナガイナにこの藪まで追い払われるでしょう。私はしなければならない

Machine Translated by Google

メロンベッドに行って、今そこに行けば彼女は私に会えるでしょう。」

ダージーは、頭の中に一度に複数のアイデアを保持することができない、非常に頭脳の小さな男でした。そして、ナガイナの子供たちが自分の子供たちと同じように卵で生まれたことを知っていたからといって、最初は彼らを殺すことが公平であるとは考えませんでした。しかし、彼の妻は賢い鳥だったので、コブラの卵が後に若いコブラを意味することを知っていました。そこで彼女は巣から飛び立ち、赤ちゃんたちを温め、ナグの死についての歌を続けさせるためにダージーを残しました。ダージーはある意味で非常に人間に似ていた。

彼女はゴミの山のそばでナガイナの前に飛び立ち、「ああ、羽が折れた！」と叫びました。家の男の子が私に石を投げて割ってしまいました。」それから彼女は今まで以上に必死に羽ばたきました。

ナガイナは頭を上げてシューッと声を上げた、「私が彼を殺すところだったとき、あなたはリッキティッキに警告しましたね。」本当に、本当に、あなたは足が不自由になるには悪い場所を選んだのです。」そして彼女は埃の上を滑りながらダージーの妻の方へ移動した。

「少年が石で壊してしまいました！」ダージーの妻は金切り声を上げた。

'良い！あなたが死んだとき、私がその少年と清算することを知っておくことは、あなたにとって少しの慰めになるかもしれません。今朝、私の夫はゴミの山に横たわっていますが、夜になる前には家の男の子はじっと横になります。逃げて何の役に立つの？必ず捕まえます。愚か者よ、私を見てください！

ダージーの妻はそんなことはしないほうがいいと思っていた。蛇の目を見つめた鳥は怖がって動けなくなってしまうからだ。ダージーの妻は悲しそうに笛を鳴らしながら飛び立ち、決して地面から離れなかったが、ナガイナは彼女の体を速めた。

Machine Translated by Google

ペース。

リッキ•ティッキは馬小屋から彼らが小道を登っていく音を聞き、壁の近くのメロン畑の端を目指して急いだ。そこで、非常に巧妙に隠されたメロンの上の暖かいゴミの中に、チャボの卵ほどの大きさですが、殻の代わりに白っぽい皮を持つ25個の卵を見つけました。

「1日も早すぎるわけではなかった」と彼は語った。なぜなら、コブラの赤ちゃんが皮膚の中で丸くなっているのが見えたからだ。そして、コブラが孵化した瞬間に、それぞれが人間やマングースを殺す可能性があることを知っていたからだ。彼は、若いコブラを砕くように注意しながら、できるだけ早く卵の上部を噛み切り、時々産卵をひっくり返して、何か見逃していないかどうかを確認しました。ついに卵が 3個だけ残ったので、ダージーの妻が叫ぶのを聞いたとき、リッキー•ティッキはひとりで笑い始めた。

「リッキ•ティッキ、私がナガイナを家の方へ案内したのですが、彼女はベランダに出てしまいました、そして――ああ、早く来てください――彼女は殺す気なのです！」

リッキ•ティッキは卵を 2個割って、3個目の卵を口に含んだままメロンのベッドの上を後ろ向きに転がり落ち、地面に足を着ける限り全力でベランダまで走り去った。テディと彼の母親と父親は早めの朝食にそこにいましたが、リッキーティッキは彼らが何も食べていないことに気づきました。彼らはじっと座っていて、顔は真っ白でした。

ナガイナはテディの椅子の横のマットの上でとぐろを巻いており、テディの素足がすぐ届く距離にあり、勝利の歌を歌いながら前後に体を揺らしていた。

「ナグを殺した大男の息子よ」と彼女は声を上げた、「じっとしていなさい。」まだ準備ができていません。ちょっと待って。皆さん、じっとしていてください

Machine Translated by Google

三つ !あなたが動けば私は打ちます、あなたが動かなければ私は打ちます。
ああ、愚かな人たちよ、誰が私のナグを殺したんだ！」

テディの目は父親に釘付けになっており、父親にできたのは「じっとしていなさい、テディ」とささやくことだけだった。動いてはいけません。
テディ、じっとしてて。』

それからリッキ•ティッキがやって来て、「振り向いて、ナ•ガイナ」と叫びました。向きを変えて戦え！』

「大丈夫です」と彼女は目を動かさずに言った。
「私は今すぐにあなたとの清算をします。友達を見てください、リッキーティッキ。彼らは静止していて白いです。彼らは恐れています。彼らはあえて動かない、そして一歩でも近づいたら、私は攻撃する。』

「あなたの卵を見てください」とリッキー•ティッキは言いました、「メロンのベッドで」
壁の近く。行って見てください、ナガイナ！

大蛇は半回転して、卵が上にあるのを見ました。
ベランダ。 「ああ、ああ !それを私にください」と彼女は言いました。

リッキ•ティッキは卵の両側に足を1本ずつ置き、その目は血のように赤かった。 「ヘビの卵の値段はいくらですか？」若いコブラに ?若いキングコブラの場合は ?最後に――この仲間の最後の最後に ?アリはメロンのベッドのそばで他のアリをすべて食べ尽くしています。」

ナガイナは、一個の卵のために、すべてを忘れて、ぐるぐると回転した。リッキ•ティッキは、テディの父親が大きな手を放ち、テディの肩を掴み、ナガイナの手の届かない安全な場所で、ティーカップを持った小さなテーブルの上を引きずって横切るのを見た。

『騙された !騙された !騙された !リク、チク、チク !リク•キ•ティッキは笑った。 「少年は無事で、昨夜トイレでナグをボンネットで捕まえたのは私、私、私でした。」それから彼はこう始めました

Machine Translated by Google

四本の足をそろえて、頭を床に近づけて飛び跳ねます。 「彼は私を前後に投げましたが、振り払うことはできませんでした。彼は大男に真っ二つに吹き飛ばされる前に死んでいた。やったよ !リッキー•ティッキ•ティッキ•ティッキ ！さあ、ナガイナ。来て私と一緒に戦ってください。あなたは長く未亡人になってはいけません。 』

ナガイナはテディを殺すチャンスを失ったと悟り、卵はリッキ•ティッキの足の間に産まれた。 「卵をちょうだい、リッキ•ティッキ。最後の卵を私にください。そうすれば私は去っていき、二度と戻ってきません」と彼女はフードを下げて言いました。

「そうです、あなたは去ってしまい、二度と戻ってくることはありません。ナグと一緒にゴミ山に行くことになるからです。戦え、未亡人 !大男が銃を取りに行った !戦い！ '

リッキ•ティッキはナガイナの周りを飛び回り、彼女のストロークが届かないところを保ち、彼の小さな目は熱い石炭のようだった。
ナガイナは気を取り直して彼に向かって飛び出した。
リッキティッキは飛び上がって後ろに飛び上がった。何度も何度も、彼女は頭を叩き、そのたびにベランダの敷物に頭をぶつけ、時計のバネのように身をまとめた。それからリッキ•ティッキは彼女の後ろにつくために輪を描いて踊り、ナガイナは彼女の頭を彼の頭に近づけるために回転しました。そのため、マットの上で尻尾がカサカサする音は、風に吹かれる枯葉のように聞こえました。

彼は卵を忘れていました。それはまだベランダに横たわり、ナガイナはどんどんそれに近づき、ついにリク•キ•ティッキが息をひそめている間にそれを口にくわえ、ベランダの階段の方を向き、矢のように下へ飛んでいきました。彼女の後ろにリッキー•ティッキがいる道。コブラが命からがら逃げるとき、彼女は馬の首に鞭打たれるかのようになります。

Machine Translated by Google

リッキ•ティッキは、彼女を捕まえなければ、すべての困難が再び始まることを知っていました。彼女はとげの茂みのそばの長い草にまっすぐ向かい、リッキ•ティッキが走っているとき、ダージーがまだ愚かな小さな勝利の歌を歌っているのを聞いた。
しかし、ダージーの妻はもっと賢明でした。ナガイナがやってくると彼女は巣から飛び立ち、ナガイナの頭の周りで羽ばたきました。もしダージーが助けてくれたら、彼らは彼女を追い返したかもしれないが、ナガイナはフードを下げて先に進んだだけだった。それでも、一瞬の遅れでリッキー•ティッキが彼女に近づき、彼女とナグが住んでいたネズミ穴に飛び込むと、彼の小さな白い歯が彼女の尻尾に食いしばられ、彼は彼女と一緒に降りて行きました—そしてほとんどの人はいませんでしたマングースは、どんなに賢くて年老いていても、コブラを追って穴に入るのを気にします。穴の中は暗かった。そしてリッキ•ティッキはいつそれが開いて、ナガイナが向きを変えて彼を攻撃する余地を与えるか分からなかった。彼は猛然としがみつき、熱く湿った大地の暗い斜面でブレーキの役割を果たすために足を突き出した。

すると、穴の口のそばの草の波打ちが止まり、ダージーは「リッキー•ティッキはもう終わったよ！」と言った。私たちは彼の死の歌を歌わなければなりません。勇敢なリッキーティッキが死んだ!ナガイナはきっと地下で彼を殺すだろうから』

そこで彼は、とっさの思いつきで作ったとても悲しい歌を歌いました。そして、最も感動的な部分に差し掛かったそのとき、草が再び震え、リッキティッキは土にまみれながら、自分自身を引きずり出していきました。穴を足ごとに舐めながら、彼のひげを舐める。ダージーは小さな叫び声を上げて立ち止まった。リッキティッキは毛皮から埃を払い落とし、くしゃみをしました。 「もう終わりだ」と彼は言った。 「未亡人は二度と出てこないでしょう。」そして、草の茎の間に住んでいる赤いアリが彼の声を聞きました、

Machine Translated by Google

そして、彼が真実を言ったかどうかを確認するために、次々と部隊を作り始めました。

リッキ•ティッキは草の上で丸まって、その場で眠りました。一日の大変な仕事を終えたので、昼過ぎまで寝続けました。

「さあ、 」彼は目を覚ますと言いました、「家に戻ります。 」銅細工師のダージーに伝えれば、彼は庭にナガイナが死んだことを告げるでしょう。 」

銅細工師は、銅の鍋を小さなハンマーで叩くような音を出す鳥です。そして、彼がいつもそうしている理由は、彼がすべてのインドの庭園への町の叫び声であり、耳を傾けようとするすべての人にすべてのニュースを伝えるからです。リッキー•ティッキが道を上がっていくと、小さな夕食のゴングのような「注意」の音と、安定した「ディン•ドン•トック！」という音が聞こえました。ナグは死んだ――ドン！ナガイナは死んだ！ディンドントック！すると、庭のすべての鳥が歌い、カエルが鳴きました。ナグとナガイナは小鳥だけでなくカエルも食べていたからです。

リッキーが家に着くと、テディとテディの母親（彼女は気を失っていたのでまだ真っ白に見えた）とテディの父親が出てきて、リッキーのことで泣きそうになった。そしてその夜、彼は与えられたものをもう食べられなくなるまで食べ、テディの肩の上で寝ました。そこで、テディの母親が夜遅くに様子を見に来たときに彼を見つけました。

「彼は私たちの命とテディの命を救ってくれました」と彼女は夫のバンドに語った。 「考えてみてください、彼は私たちの命をすべて救ってくれたのです。」

マングースは眠りが浅いので、リッキティッキは飛び起きて目が覚めました。

「ああ、あなただよ」と彼は言った。 「何で迷惑してるの？全て

Machine Translated by Google

コブラは死んでいる。もしそうでなかったら、私はここにいるよ。』

リッキ•ティッキには自分自身を誇りに思う権利がありました。しかし、彼はあまり誇りにならず、コブラが壁の中に頭を見せようとしなくなるまで、マングースが歯を持ち、飛び跳ね、跳ね返り、噛むようにその庭を維持しました。

Machine Translated by Google

ダージーの聖歌

（リッキ•ティッキ•タヴィを讃えて歌われました）

私は歌手で仕立て屋――
私が知っている喜びが倍増しました―
空に向かって躍動することを誇りに思います、
自分が縫う家に誇りを持って――
何度も何度も、そうして私は私の音楽を織ってください、そして私は私が縫う家を織ってください。

もう一度、雛たちに歌ってください。
お母さん、顔を上げてください！
私たちを悩ませた悪は滅ぼされ、
庭には死が横たわっている。
バラの中に隠れていた恐怖は無力であり、糞丘に投げ込まれて死んでしまいます！

誰が私たちを救ってくれたのか、誰が？
彼の巣と名前を教えてください。
リッキ、勇敢で、真実の、
炎の目玉を持つティッキ、
リク•ティッキ•ティッキ、象牙の牙、炎の目玉を持つ狩人！

彼に鳥たちの感謝を伝えましょう。
尾羽を広げてお辞儀！

Machine Translated by Google

ナイチンゲールの言葉で彼を讃えよ――
いや、むしろ褒めてあげますよ。
聞く !赤い目玉をしたボトルテールのリッキーを讃えます！

（ここでリッキーティッキが中断し、曲の残りの部分が失われます。）

Machine Translated by Google

象のトーマイ

私は自分が何であったかを思い出します、私はロープと鎖にうんざりしています—
私は自分の昔の力と森でのすべてのことを思い出します。
私はサトウキビ一束のために人間に背を売りません。
私は同族と彼らの隠れ家にいる森の民のところへ行きます。

私はその日まで、朝の休みまで出かけます—
風の汚れのないキス、水の清らかな愛撫に向かって。
私は足環を忘れて杭を折ってしまいます。
私は失われた愛とマスターレスの遊び仲間を再び訪ねます!

黒い蛇を意味するカラ•ナグは、象が47年間奉仕できるようなあらゆる方法でインド政府に奉仕し、捕らえられたとき彼は満20歳だったので、70歳近くになったことになる。ゾウとしては成熟した年齢。彼は、額に大きな革パッドを当てて、深い泥の中に突き刺さった銃を押しつけたことを覚えていたが、それは 1842 年のアフガニスタン戦争前のことであり、その時は彼はまだ最大限の力を発揮していなかった。

カラ•ナグと同じ車で捕まった母親のラダ•ピャリさん（最愛の子ラダ)は、カラ•ナグさんの小さな乳牙が抜ける前に、怖がるゾウは必ず怪我をする、と彼に語った。カラ•ナグは、砲弾が破裂するのを初めて見て、そのアドバイスが良いことであることを知っていた、彼は積み上げられたライフル銃のスタンドに向かって叫びながら後ずさった。

Machine Translated by Google

銃剣が彼の最も柔らかい場所すべてを刺した。それで、彼は 25 歳になる前に怖がることをやめたので、インド政府に仕える象の中で最も愛され、最も世話が行き届いた象になりました。彼は上インド行軍の際、テントの重さが1200ポンドもあるテントを担いでいた。彼は蒸気クレーンの先端で船に吊り上げられ、何日も海を渡り、インドから遠く離れた見知らぬ岩だらけの国で迫撃砲を背負って運ばされ、そして皇帝セオドアを見たのです。マグダラで死んで横たわり、蒸気船で再び戻ってきたのだが、兵士たちはこう言った、アビシニア戦争の勲章を授与されたのだ。

彼は10年後、アリ•ムジッドと呼ばれる場所で仲間のゾウが寒さとてんかんと飢餓と日射病で死ぬのを見ていた。その後、彼は何千マイルも南に送られて、モールメインの製材所に大きなチーク材のバルクを運んで積み上げていました。そこで彼は、自分の正当な仕事をサボっていた、従順でない若い象を半殺しにしました。

その後、彼は木材運搬の仕事から外され、仕事の訓練を受けた他の数十頭のゾウとともに、ガロの丘で野生のゾウを捕まえる手伝いに雇われた。ゾウはインド政府によって厳重に保護されています。彼らを狩り、捕らえ、侵入し、仕事に必要なだけ国中へ送り出すこと以外何もしていない部署がひとつある。

カラ•ナグは肩の高さ10フィートで立っていて、牙は5フィートで短く切り落とされ、割れないように両端を銅の帯で縛っていた。

Machine Translated by Google

しかし、訓練を受けていないゾウが本物の鋭利なゾウを使ってできる以上のことが、その切り株を使ってできるのです。散り散りになったゾウを何週間も慎重に丘の上に追い込み続けた後、40頭か50頭の野生の怪物が最後の柵に追い込まれ、木の幹でできた大きな落とし門が後ろでガタガタと音を立てたとき、カラナグは、命令の言葉に従って、その燃え上がるラッパのような大混乱に突入し（たいてい夜、たいまつのちらつきで距離を判断するのが難しくなったとき）、最も大きくて最も野生の牙を選び出しました。他の象の背中に乗った男たちが小さな象をロープで縛り付けている間、暴徒が彼をハンマーでたたき、静かにさせた。

戦い方において、老賢き黒蛇カラ•ナグが知らないことは何一つなかった。なぜなら、彼はこれまでに何度も負傷した虎の突撃に立ち向かい、柔らかな幹を丸めて体を張ったからだ。危害を加えられないように、飛び跳ねる野獣を空中で横向きに叩き落とし、頭を素早く鎌で切り落としたのだ。彼をひっくり返し、大きな膝で彼の上にひざまずき、息を呑み、うなり声を上げて息絶えた。カラ•ナグが尻尾を掴めるのは、地面にあるふわふわした縞模様の物だけだった。

「そうです」と運転手のビッグ•トゥーマイ、彼をアビシニアに連れて行ったブラック•トゥーマイの息子、そして彼を捕まえたのを見たゾウのトゥーマイの孫が言った、「私以外にブラック•スネークが恐れるものは何もない。」彼は私たちが三世代にわたって彼に食事を与え、毛づくろいをするのを見てきました、そして彼は四世代まで生きます。」

Machine Translated by Google

「彼も私のことを怖がっているのよ」と小さなトゥーマイは、雑巾を一枚着ただけで、身長約4フィートまで立ち上がって言いました。
彼は10歳でビッグ•トゥーマイの長男で、慣習に従って、大きくなったら父親の代わりにカラ•ナグの首を担ぎ、重い鉄のアンクス、つまり象の突き棒を扱うことになっていた。彼の父親、祖父、曾祖父母が滑らかに着ていたものです。

彼は自分が何について話しているのかを知っていました。なぜなら、彼はカラ•ナグの影の下で生まれ、歩けるようになる前に鼻の端で遊び、歩けるようになるとすぐに彼を水の中に連れて行ったからだ。そしてカラ•ナグは、彼の甲高い小さな命令に従わないことなど夢にも思わなかっただろう。ビッグ•トゥーマイが小さな茶色の赤ん坊をカラ•ナグの牙の下に運び、彼に将来の主人に敬礼するように言ったあの日、彼を殺すとは夢にも思わなかった。

「そうですよ」と小さなトゥーマイは言いました。「彼は私を怖がっているのです。」そしてカラ•ナグに大股で近づき、彼を太った年老いた豚と呼び、足を次々と上げさせました。

「わぁ！」トゥーマイちゃんは、「あなたは大きなゾウだね」と言い、ふわふわした頭を振りながら、父親の言葉を言いました。 「政府は象にお金を払うかもしれないが、象は私たち象使いのものだ。
カラ•ナグ、あなたが年老いたら、金持ちのラジャが来て、あなたの体格と態度を理由に政府からあなたを買うでしょう、そうすればあなたは金のイヤリングを身に着けること以外に何もすることがなくなるでしょう耳と背中に金のハウダを付け、脇腹に金で覆われた赤い布を着て、王の行列の先頭を歩きなさい。それから私はあなたの首に座ります、おおカラナグ、銀の

Machine Translated by Google

アンクス、そして男たちが金の棒を持って私たちの前を走り、「王様の象のための部屋だ！」と叫びます。それはいいだろう、カラ•ナグ、でもジャングルでの狩猟ほど良くはないよ。」

「うーん！」ビッグ•トゥーマイは言った。 「あなたは少年で、水牛の子牛のように野生です。丘の中を上り下りするこのような行為は、最高の政府サービスとは言えません。私は年をとっているので、野生のゾウは好きではありません。この行ったり来たりのキャンプの代わりに、レンガ造りの象の列、各象に 1 つの馬小屋、象を安全に縛り付けるための大きな切り株、運動するための平らで広い道路を与えてください。ああ、カウンポアの兵舎はよかった。
近くにバザールがあり、1日の労働時間はわずか3時間でした。」

小さなトゥーマイはカウンポアの象のセリフを思い出しましたが、何も言いませんでした。彼はキャンプでの生活をとても好み、毎日飼料保護区で草をあさり、カラ•ナグがピケットの中でそわそわしているのを眺める以外に何もすることがない長い時間、広くて平らな道を嫌っていた。

トゥーマイちゃんの好きなものは、ゾウしか通れない手綱のある道をよじ登ることでした。下の渓谷に浸る。何マイルも離れたところで野生のゾウが眺めている様子が垣間見えます。カラ•ナグの足もとにおびえた豚と孔雀が突進する音。目のくらむような暖かい雨が降り、丘も谷も煙が立ち込めた。その夜どこでキャンプするのか誰も知らなかった美しい霧の朝。野生のゾウの着実で慎重な運転、そして昨夜の移動の狂気の突進と炎上と大騒ぎで、ゾウたちは地滑りの岩のように柵になだれ込み、抜け出すことができないことに気づき、身を投げた。で

Machine Translated by Google

重い支柱は、叫び声と燃え上がる松明と空薬莢の一斉射撃によってのみ押し戻されるだけでした。

そこでは小さな男の子でも役に立つ可能性があり、トーマイは男の子3人と同じくらい役に立ちました。彼はたいまつを手に取り、それを振り、全力で叫びました。しかし、本当に良い時が来たのは、追い出しが始まった時だった。ケッダ、つまり柵はまるで世界の終わりの絵のようで、自分たちの話す声が聞こえなかったため、男たちは互いに合図しなければならなかった。 。それから小さなトゥーマイは、震える柵の支柱の一つの頂上に登り、太陽にさらされた茶色の髪を肩全体になびかせ、たいまつの光の中のゴブリンのように見えました。そして、小康状態になるとすぐに、ラッパの音と衝突音、ロープを切る音、そしてつながれた象のうめき声の上で、カラ•ナグを激励する彼の甲高い叫び声が聞こえてきました。

「マエル、マエル、カラ•ナグ！」 （頑張れ、頑張れ、ブラック•スネーク！） ダント•ドゥ！ （牙を渡せ！） ソマロ !ソマロ！ （気をつけて、気をつけて！） マロ !マル！ （彼を殴って、彼を殴って！）ポストに注意してください !アレ！
アレ !ハイ !やったー !きゃあああ !彼は叫び声を上げ、カラ•ナグと野生の象との大喧嘩がクッダ川をあちこちに揺れ、年老いた象捕りたちは目から汗をぬぐい、手をうずくまっているリトル•トゥーマイにうなずく時間を見つけたものだった。投稿の上部に喜びが表示されます。

彼は身をよじるだけではありませんでした。ある夜、彼は柱から滑り落ち、象の間に滑り込み、落ちていたロープの緩んだ端を、買い物をしようとしていた運転手に、蹴りを入れている若い子牛の足に投げつけました（子牛はいつも与えます）成長した動物よりも厄介です）。カラ•ナグは彼を見て、トランクに捕まえて、

Machine Translated by Google

彼をビッグ•トゥーマイに引き渡し、ビッグ•トゥーマイは彼をその場で平手打ちし、ポストに戻した。

翌朝、彼は彼を叱責し、こう言いました、「自分の責任で象を捕まえに行かなければならないのに、レンガ造りの象の列と小さなテントで十分ではありませんか、ほとんど価値がありませんか？」今、私の給料よりも給料が低い愚かな狩人たちが、この件についてピーターセン•サーヒブに話しました。」小さなトゥーマイは怖がっていました。彼は白人男性のことをあまり知りませんでしたが、ピーターセン•サーヒブは彼にとって世界で最も偉大な白人でした。彼はケッダのすべての活動の責任者であり、インド政府のためにすべてのゾウを捕獲し、生きている人間よりもゾウの生態についてよく知っていた男でした。

「何、何が起こるの？」リトル•トゥーマイは言いました。

'起こる !起こり得る最悪の事態。ピーターセン•サーヒブは狂人だ。そうでなければ、なぜ彼はこれらの野生の悪魔を狩りに行く必要があるのでしょうか？彼はあなたに、ゾウ捕りになること、熱に満ちたジャングルのどこでも寝ること、そして最後にはケッダで踏みつけられて死ぬことさえ要求するかもしれません。このバカバカしさが無事に終わると良いですね。来週には捕獲が終わり、平原に住む私たちは基地に戻されます。それから私たちは平坦な道を行進し、この狩猟のすべてを忘れます。しかし、息子よ、私はあなたがこの汚いアッサムのジャングルの人々の仕事に口出しすることに腹を立てています。カラ•ナグは私以外の誰も従わないので、私は彼と一緒にケッダへ行かなければなりませんが、彼はただ戦う象であり、彼らを縄で縛るのを手伝うことはありません。だから私は、象使いにふさわしいように、――単なる狩人ではなく――象使い、そして役職終了後に年金を受け取る男にふさわしいように、気楽に座っている。のトーマイの家族です

Machine Translated by Google

象がケッダの土の上で踏みつけられるだろうか？悪いです！邪悪な奴だ！駄目な息子よ！行ってカラ•ナグを洗い、彼の耳を手入れし、彼の足にとげがないことを確認してください。さもなければ、ピーターセン•サーヒブはきっとあなたを捕まえて、あなたを野生の狩人、つまり象の足跡を追う者、ジャングルのクマにするでしょう。ああ！恥！行く！'

小さなトゥーマイは何も言わずに立ち去りましたが、足を調べている間にカラ•ナグに不満をすべて話しました。「関係ないよ」とトゥーマイちゃんは、カラ•ナグの大きな右耳の縁を上げながら言いました。「彼らは私の名前をピーターセン•サーヒブに言いました、そしておそらく—そしておそらく—そしておそらく—
知るか？ハイ！それは私が抜いた大きな棘です！」

次の数日は、ゾウたちを集合させ、平地へ下る行進であまりにも迷惑をかけないよう、新たに捕まえた野生のゾウを数頭のおとなしいゾウの間を行ったり来たりさせたり、連れて行ったりすることに費やされた。毛布やロープ、森の中で使い古されたり紛失したりした物の在庫。

ピーターセン•サーヒブは賢い雌ゾウのプドミニに乗ってやって来た。シーズンも終わりに近づいていたので、彼は丘の中にある他のキャンプの返済をしていたところ、現地の事務員が木の下にあるテーブルに座って、運転手に賃金を支払っていた。各人は給料を受け取ると象に戻り、出発の準備ができている列に加わりました。捕まえる者、狩る者、殴る者など、年中ジャングルに留まり、ペテルセン•サーヒブ常設部隊に所属していた象の背中に座るか、銃を持って木にもたれかかっていた正規ケッダの人々は、腕を組んで、運転手たちをからかいました。

Machine Translated by Google

と立ち去り、新しく捕まえた象が列を破って走り回ったときは笑いました。

ビッグ•トゥーマイがリトル•トゥーマイを連れて店員のところに行くと、追跡責任者のマチュア•アパが友人に小声でこう言った。 「あの若いジャングルの雄鶏を平原で脱皮させるのは残念だ。」

さて、ピーターセン•サーヒブは、すべての生き物の中で最も静かな野生の象に耳を傾ける人間が持っていなければならないように、全身に耳を持っていました。彼はプドミニの仰向けにずっと横たわっていた場所を振り返り、「あれは何ですか？」と言いました。平原の運転手の中で、死んだ象さえもロープでつなぐほどの機知を持った男を私は知りませんでした。」

「これは男性ではなく、男の子です。私たちが肩に傷のある若い子牛を母牛から引き離そうとしたとき、彼は最後のドライブでケッダに入り、バルマオにロープを投げました。」

マチュア•アパはリトル•トゥーマイを指差し、ピーターセン•サはヒブが見ると、リトル•トゥーマイは地面に頭を下げました。

「彼はロープを投げますか？彼はピケットピンよりも小さいです。小さな子よ、あなたの名前は何ですか？ピーターセン•サーヒブ氏は語った。

小さなトゥーマイは怖くて話すことができませんでしたが、カラ•ナグが後ろにいて、トゥーマイが手で合図をすると、象が彼を鼻の中に捕まえて、偉大なペテルセン•サーヒブの前でプドミニーの額と同じ高さに抱きかかえました。それから小さなトゥーマイは手で顔を覆いました。彼はまだ子供だったからです。象に関することを除けば、子供と同じように恥ずかしがりました。

「おおお！」ピーターセン•サーヒブは、彼の胸の下で微笑みながら言った。

Machine Translated by Google

タチェ、「それで、なぜ象にその芸を教えたのですか？」
それは、あなたが家の屋根から青いトウモロコシの穂を出して乾燥させているときに盗むのを助けるためでしたか？』

「青いトウモロコシじゃないよ、貧乏人の守護者よ、メロンだよ」とトゥーマイちゃんは言うと、そこに座っていた男たちはみんな大笑いした。彼らのほとんどは、少年時代にゾウにトリックを教えていました。小さなトゥーマイは、8フィートの高さで空中にぶら下がっていましたが、彼は地下8フィートにいることを強く望んでいました。

「彼はトゥーマイ、私の息子、サーヒブです」とビッグ・トゥーマイは顔をしかめながら言った。 「彼はとても悪い子で、最後は刑務所で終わるでしょう、サーヒブ。」

「それについては私には疑問があります」とピーターセン・サーヒブ氏は語った。 「この年齢で完全なケッダに直面できる少年は、刑務所で終わることはない。
ほら、小さな子よ、あなたはその大きな茅葺きの髪の毛の下に小さな頭を持っているので、甘いものに費やすのに4アンナがあります。やがてあなたもハンターになるかもしれません。』ビッグ・トーマイはこれまで以上に顔をしかめた。 「しかし、ケッダは子供たちが遊ぶのに良くないということを覚えておいてください」とピーターセン・サーヒブは言った

の上。

「決してそこには行ってはいけないのですか、サーヒブ？」トゥーマイちゃんは大きな息を呑みながら尋ねました。

'はい。' ピーターセン・サーヒブは再び微笑んだ。 「あなたが象が踊るのを見たとき。それが適切な時期です。象が踊るのを見たら、私のところに来なさい。そうすれば、あなたをすべてのクッダに行かせます。』

また爆笑が起こった。それは象捕りの間での古いジョークであり、絶対にいけないという意味だからだ。象の舞踏室と呼ばれる、森の中に隠された、きれいに整備された平らな場所がいくつかありますが、それさえも見つかるのは限られています

Machine Translated by Google

それは偶然であり、象が踊るのを見た人は誰もいません。
運転手が自分の技術と勇気を自慢すると、他の運転手は「象が踊るのをいつ見たの？」と言う。

カラ•ナグはリトル•トゥーマイを寝かせると、彼は再び地に頭を下げて父親と一緒に去り、銀色の4アンナの作品を赤ん坊の弟の授乳中の母親に渡し、それらはすべてカラに飾られました。ナグが背中を押すと、うめき声を上げ、金切り声を上げている象の列が丘の小道を平原へと転がり落ちていった。新しいゾウのおかげで、それは非常に活発な行進でした。彼らは渡りのたびに問題を起こし、1分おきになだめたり、殴ったりする必要がありました。

大きなトゥーマイはとても怒っていたので意地悪にカラ•ナグをつつきましたが、小さなトゥーマイは嬉しすぎて話すことができませんでした。ピーターセン•サーヒブは彼に気づき、お金を与えていたので、一等兵として、自分が隊伍から呼び出され、最高司令官に称賛されたら感じるだろうと感じた。

「ペテルセン•サーヒブは象の踊りで何を意味したのですか？」彼はついに母親にそっと言いました。

ビッグ•トゥーマイは彼の声を聞いてうめきました。「あなたは決して追跡者たちの山水牛の一人になってはなりません。それが彼が言いたかったことでした。ああ、前のあなた、何が道を妨げているのですか？

2頭か3頭の象の前にいたアッサム人の運転手は、怒って振り向いて叫びました、「カラ•ナグを持ち出して、私のこの若者を行儀良く叩きのめしてください。」ピーターセン•サーヒブはなぜ私を、田んぼのロバと一緒に行く人に選んだのでしょうか？あなたの獣を横に並べて、トゥーマイ、牙でつついてみましょう。丘のすべての神々によって、これらの新しい象は取り憑かれているか、そうでなければジャングルの仲間の匂いを嗅ぐことができます。」カラ•ナグは新しいゾウにぶつかった

Machine Translated by Google

ビッグ・トゥーマイが言ったように、あばら骨を折って風を吹き飛ばした。「私たちは最後の捕獲で野生のゾウの丘を一掃しました。」あなたの運転不注意だけです。列全体で秩序を保たなければなりませんか？』

「聞いてください！」他の運転手は言いました。「私たちは丘を一掃しました！ほー！ほー！あなた方は非常に賢明です、あなた方平凡な人々。ジャングルを見たことのない泥んこ頭以外の人なら、今シーズンのドライブが終了していることを知っているはずです。したがって、今夜のすべての野生のゾウはそうするだろうが、なぜ私が川ガメに知恵を無駄にする必要があるのだろうか？」

「彼らは何をするのでしょう？」小さなトゥーマイが声をかけた。

「ああ、小さな子よ。そこにいるの？さて、あなたは冷静な頭の持ち主なので、教えておきます。彼らは踊るでしょう、そしてすべての象の丘をすべて掃除したあなたの父親は、今夜ピケットを二重鎖で結ぶ義務があります。」

「これは何の話ですか？」ビッグ・トゥーマイは言った。「父子よ、私たちは40年間ゾウの世話をしてきましたが、ダンスについてこれほど密造酒の話を聞いたことはありません。」

'はい;しかし、小屋に住んでいる平地民は、自分の小屋の四方の壁しか知りません。さて、今夜は象の足かせを外しておいて、何が起こるか見てみましょう。彼らのダンスに関しては、私は見たことがありますが、バプリーバプ！ディハン川は何回曲がりますか?ここにはまた浅瀬があり、ふくらはぎを泳がなければなりません。立ち止まってください、後ろにいるあなた。

こうして、彼らは話したり、口論したり、川の水しぶきを上げながら、新しいゾウの受け入れキャンプのようなところへ最初の行進を行った。しかし、彼らはそこに着くずっと前に怒りを失いました。

それから象は後ろ足で鎖につながれ、

Machine Translated by Google

ピケットの大きな切り株と追加のロープが新しい象に取り付けられ、飼料が彼らの前に山積みになり、丘の運転手は午後の光の中をピーターセン•サーヒブに戻り、平地の運転手にその夜は特に注意するように言いました。平野部の運転手が尋ねると笑いながら

理由。

小さなトゥーマイはカラ•ナグの夕食に出席し、夕方になると言葉では言い表せないほど幸せになり、トムトムを探してキャンプ中を歩き回りました。インドの子どもは、心が満たされているときは、不規則に走り回ったり、騒いだりしません。彼は一人で座って一種の宴会を楽しんでいます。

そしてリトル•トゥーマイはピーターセン•サーヒブに話しかけられていました！もし欲しいものが見つからなかったら、彼は病気になっていたと思います。しかし、収容所の菓子売りが彼に小さなタムタム（手の平で叩く太鼓)を貸してくれたので、彼は星が出始めたカラ•ナグの前にあぐらをかいて座った。膝の上でタムタム、そして彼はドスンとドスンとドスンと音を立て、自分に与えられた大きな栄誉を考えれば思うほど、ゾウの飼料の中で一人でドスンと音を立てた。音程も言葉もありませんでしたが、その鼓動が彼を幸せにしてくれました。

新しい象たちはロープに力を入れ、時折金切り声を上げたりトランペットを鳴らしたりしていました。そして、キャンプ小屋で母親が、かつてすべてのことを語った偉大な神シヴについての古い歌を聴きながら小さな弟を寝かしつけているのが聞こえました。動物たちは何を食べるべきなのか。とても心安らぐ子守唄で、最初の詩にはこう書かれています。

収穫を注ぎ、風を吹かせたシブ、

Machine Translated by Google

遠い昔の日、戸口に座って、
それぞれに自分の分、食べ物、労苦、そして運命を与え、
王様のガディから、門の乞食まで。
あらゆるものが彼を、保存者シヴァにしました。
マハデオ !マハデオ !彼はすべてを作りました—
ラクダにはとげ、キネには飼料、
そして眠い頭に対する母の心、おお私の小さな息子よ！

小さなトゥーマイは、各詩の終わりに楽しそうにトントンと鳴きながらやって来て、眠くなってカラ•ナグの側にある飼料の上で体を伸ばしました。ついに、象たちはいつものように次々と横になり始め、ついに列の右側のカラ•ナグだけが立っているままになりました。そして彼はゆっくりと左右に体を揺らし、丘をとてもゆっくりと吹き抜ける夜風を聞くために耳を前に出していました。空気はすべての夜の騒音で満たされており、それらがすべて合わさって、ひとつの大きな沈黙を形成する——一方の竹の幹がもう一方の竹の幹にぶつかるカチッという音、下草の中で生きている何かのカサカサ音、半分起きた鳥のひっかき声、鳴き声などである。私たちが想像しているよりもはるかに頻繁に夜中に起きています）、そして滝の水はずっと遠くにあります。小さなトゥーマイはしばらく眠っていましたが、目が覚めると輝く月明かりがあり、カラ•ナグはまだ耳を立てて立っていました。小さなトゥーマイは向きを変え、飼料の中でカサカサ音を立て、天国の星半分を背景に大きな背中の曲線を眺めました、そして彼が見ている間、彼は音が聞こえました、それは静けさの中に突き刺さる騒音の針穴にしか聞こえませんでした。 、野生のゾウの「ブーブー」という音。

列に並んでいたすべての象は、まるでそうしたかのように飛び上がった。

Machine Translated by Google

銃で撃たれ、そのうめき声がついに眠っている侍女たちを目覚めさせ、出てきて大きな木槌でピケットペグを打ち込み、すべてが静かになるまでこのロープを締めて結びました。 1頭の新しいゾウがピケットをつかみそうになったので、ビッグ・トゥーマイはカラ・ナグの足の鎖を外し、そのゾウの前足から後足まで足かせをはめたが、草の紐の輪をカラ・ナグの足に巻き付け、自分がやったことを忘れないよう彼に言った。早く結ばれた。彼は、自分と父親、祖父がこれまで何百回も同じことをしてきたことを知っていました。カラ・ナグはいつものように、ゴロゴロと喉を鳴らして命令に答えなかった。彼は立ち止まり、月明かりの向こうを眺め、頭を少し上げ、耳を扇のように広げ、ガロの丘の大きな襞まで眺めた。

「夜に落ち着きが悪くなったら、かまってあげてね」と大きなトゥーマイは小さなトゥーマイに言い、小屋に入って寝ました。
小さなトゥーマイもちょうど眠ろうとしているところだった。そのとき、コイアの紐が小さな「チーン」という音とともに切れる音が聞こえた。カラ・ナグは谷の口から雲が流れ出るのと同じくらいゆっくりと静かにピケットから転がり出た。小さなトゥーマイは月明かりの下、裸足で道を歩きながら小声で「カラ・ナグ！」と叫びながら彼の後を追いかけました。カラナグ !私を連れて行ってください、おおカラ・ナグ !象は音もなく向きを変え、月明かりの中で三歩歩いて少年のほうへ戻り、鼻を下ろし、少年を首まで振り上げ、リトル・トゥーマイが膝を正す直前に、そっと森の中に滑り込みました。

ラインから猛烈なトランペットの音が一度鳴り響き、その後沈黙がすべてを遮断し、カラ・ナグが動き始めた。時々、波が人の側面に沿って打ち寄せるにつれて、背の高い草の房が彼の側面に沿って洗われました。

Machine Translated by Google

船、時には山椒の蔓の群が彼の背中をこすったり、肩が当たるところで竹が軋むこともあった。しかし、その間、彼は音もなく、まるで煙のように深いガロの森の中を漂いながら、まったく静かに動きました。彼は上り坂を進んでいたのですが、小さなトゥーマイは木の隙間で星を眺めていましたが、どの方向にいるのかわかりませんでした。

それからカラ•ナグは上り坂の頂上に達して少し立ち止まりました、そしてリトル•トゥーマイは、月明かりの下で何マイルも何マイルも斑点と毛むくじゃらで横たわっている木々のてっぺんと、くぼみの川の上にある青白い霧が見えました。 。トーマイは身を乗り出して見ていると、眼下の森が目覚めているように感じた――目覚めていて、生き生きとしていて、賑わっている。大きな茶色の果物を食べるコウモリが彼の耳を通り過ぎました。ヤマアラシの羽ペンが藪の中でガタガタ音を立てた。そして、木の幹の間の暗闇の中で、ブタクマが湿った暖かい土を一生懸命掘って、掘るときに鼻を鳴らしているのが聞こえました。

それから枝が再び彼の頭上で閉まり、カラ•ナグは谷へと下り始めた――今度は静かにではなく、暴走した銃が険しい土手を下っていくのと同じように――一気に急いだ。巨大な手足はピストンのように着実に動き、各歩幅は8フィートで、肘の先のしわのある皮膚がカサカサと音を立てました。彼の両側の下草がキャンバスを引き裂いたような音を立てて引き裂かれ、彼が肩で左右に掻き分けた苗木が再び跳ね返って彼の脇腹に叩きつけられ、ツタの大きな跡が互いに絡み合って垂れ下がっていた。彼は頭を左右に投げて道を耕し、その牙を鳴らした。それから小さなトゥーマイは、そうならないように大きな首の近くに体を横たわらせました。

Machine Translated by Google

揺れる枝が彼を地面に押し倒すだろう、そして彼は再び戦列に戻りたいと願った。

草はふにゃふにゃになり始め、カラ•ナグの足は足を置くときに吸い込まれ、押しつぶされ、谷底の夜霧がリトル•トゥーマイを冷やしました。水しぶきと踏みつけ、そして水の勢いがあり、カラ•ナグは一歩ごとに手探りしながら川床を大股で歩きました。ゾウの足の周りで水が渦を巻く音の上で、トゥーマイちゃんには、上流と下流でさらに水しぶきとラッパの音が聞こえました。大きなうなり声と怒った鼻息、そして彼の周りのすべての霧が、うねる波状の影でいっぱいであるように見えました。 。

「アイ！」彼は歯をカタカタと鳴らしながら、半分声に出して言った。 「エレファントムフォークは今夜外出中です。それはダンスですよ！

カラ•ナグは水から泳ぎ上がり、胴体を吹き飛ばし、再び登り始めた。しかし、今回は彼は一人ではなかったので、自分の道を決める必要はありませんでした。それはすでに幅6フィートの幅で彼の前に作られており、曲がったジャングルの草が立ち直って立ち上がろうとしているところだった。ほんの数分前に多くのゾウがそこへ行ったに違いありません。小さなトゥーマイが振り返ると、彼の後ろで、熱い石炭のように光る子豚の目をした大きな野生の牙が、霧のかかった川から体を持ち上げようとしていた。それから木々は再び閉じ、トランペットのような音と砕ける音、そして木の四方の枝を折る音を響かせながら、どんどん上へ進んでいきました。

ついにカラ•ナグは丘の頂上にある二本の木の幹の間に静止した。それらは、約3エーカーか4エーカーの不規則な空間の周りに生えた木々の輪の一部であり、その空間全体で、リトル•トゥーマイが見ることができたように、

Machine Translated by Google

地面はレンガの床のように激しく踏みつけられていた。
空き地の中央には何本かの木が生えていましたが、その樹皮はこすり落とされ、その下の白い木は月明かりの斑点でピカピカに磨かれていました。上部の枝からはつる植物がぶら下がっており、ヒルガオのような大きな蝋のような白いものであるつるの花の鐘が垂れ下がって熟睡していました。しかし、開拓地の境界内には緑の葉は一枚も存在せず、踏みにじられた大地のほかに何もありませんでした。

月明かりに照らされて、象がその上に立っているところを除いてはすべて鉄灰色で、象の影は真っ黒でした。
小さなトゥーマイは、息を止めて目を頭から動かしながら見ていました。彼が見ていると、ますます多くの象が木の幹の間から外に飛び出てきました。小さなトゥーマイは十までしか数えることができませんでしたが、十の数がわからなくなるまで指で何度も数え、頭が泳ぎ始めました。空き地の外では、彼らが丘の中腹を登っていくときに下草にぶつかる音が聞こえたが、木の幹の輪の中に入るとすぐに、彼らは幽霊のように動いた。

白い牙を持った野生の雄がいて、落ち葉や木の実や小枝が首のしわや耳のしわに落ちていました。太って足が遅い雌ゾウで、体高わずか3～4フィートの落ち着きのない小さな小指の黒い子牛がお腹の下を走っています。牙が生え始めたばかりの若い象がとても誇りに思っています。ひょろひょろでごつごつとした老メイド象で、うつろな心配そうな顔と、ざらざらした樹皮のような鼻。肩から脇腹まで大きな傷と切り傷で傷だらけの、野蛮な年老いた雄牛ゾウ。

Machine Translated by Google

過ぎ去った戦い、孤独な泥風呂のこびりついた汚れが肩から落ちる。そして、牙が折れ、横腹に虎の爪でひどい絵を描いたような擦り傷の跡が残っている者もいました。

頭と頭を突き合わせて立っていたり、カップルで地面を行ったり来たりしたり、あるいは単独で体を揺らしたり、何十頭ものゾウが動いていました。

トゥーマイは、カラ•ナグの首の上にじっと横たわっている限り、自分には何も起こらないことを知っていた。なぜなら、たとえケッダのドライブで慌ただしくスクランブル運転をしていても、野生のゾウは鼻に手を伸ばして飼いならされたゾウの首から人間を引きずり落とすことはないからだ。象。そして、その夜、これらの象は人間のことなど考えていませんでした。森の中でレッグアイロンのカチャカチャという音が聞こえ、彼らが耳を前に出すと、それはペーターセン•サーヒブさんのペットのゾウ、プドミニだった。彼女の鎖が切れてしまい、うめき声を上げながら丘の中腹を鼻を鳴らしながら登っていった。彼女はピケットを壊して、ペテルセン•サーヒブのキャンプから直接来たに違いない。そしてトゥーマイちゃんは、背中と胸に深いロープの胆汁がある別のゾウを見た。それは彼の知らないゾウだった。

彼もまた、どこかの丘にあるキャンプから逃げてきたに違いない。

ついに、森の中でゾウが動く音はなくなり、カラ•ナグは木々の間の陣地から転がり出て、カチャカチャとゴロゴロと鳴きながら群衆の真ん中に入り、すべてのゾウが口々に話し始めました。自分の舌を動かし、動き回る。

まだ横たわったまま、小さなトゥーマイは、何十もの広い背中、揺れる耳、揺れるトランクス、そして回転する小さな目を見下ろしました。彼は牙のカチカチという音を聞いた

Machine Translated by Google

彼らは他の牙と偶然交差し、幹の乾いたカサカサ音が絡み合い、群衆の中で巨大な脇腹や肩が擦れる音がし、大きな尻尾が絶え間なくパタパタと音を立てる音がした。それから雲が月の上にやって来て、彼は黒い闇の中に座っていました。しかし、静かで安定した喧騒と押し声とゴロゴロ音は同じように続きました。彼は、カラナグの周りには象がいること、そして自分を議会から退かせる可能性がないことを知っていました。そこで彼は歯を立てて震えた。少なくともケッダではたいまつの光と叫び声があったが、ここでは彼は暗闇の中で一人でいた、そしてある時、トランクが近づいてきて彼の膝に触れた。

それから象がラッパを鳴らし、全員がそれを5秒か10秒ほど続けました。上の木々からの露が目に見えない背中に雨のように飛び散り、最初はそれほど大きくなかったが、ドーンという鈍い音が始まり、小さなトゥーマイにはそれが何であるかわかりませんでした。しかし、それはどんどん大きくなり、カラ•ナグは片方の前足を持ち上げ、次にもう一方の前足を持ち上げ、足をトリップハンマーのように着実にワンツー、ワンツーと地面に下ろしました。象たちは一斉に足音を立てており、その音はまるで洞窟の入り口で叩かれる軍太鼓のようだった。露が木々から落ち、それがなくなるまでドーンと音が鳴り続け、地面が揺れて震えたので、小さなトゥーマイは手を耳に当てて音を遮断しました。しかし、それはすべて、彼の中を駆け抜けた一つの巨大な壺だった――何百もの重いフィートが未加工の大地に踏みつけられたこの音だ。一度か二度、彼はカラ•ナグと他の全員が数歩前に押し寄せるのを感じた、そしてドスンという音はジューシーな緑色のものが傷つく破砕音に変わったが、一分か二分で足がドーンと音を立てて立ち上がった。

Machine Translated by Google

硬い地球が再び始まりました。彼の近くのどこかで木がきしみ、うめき声を上げていました。彼は腕を出して樹皮を感じましたが、カラ•ナグはまだ踏みつけながら前に進み、自分が空き地のどこにいるのかわかりませんでした。ゾウからは何も音はしませんでしたが、一度だけ、二、三匹の子牛が一斉に鳴きました。それからドスンとシャッフルする音が聞こえ、ドーンという音が続いた。それは丸二時間続いたに違いありません、そして小さなトゥーマイはあらゆる神経が痛みました、しかし彼は夜の空気の匂いで夜明けが近づいていることを知っていました。

緑の丘の背後に薄黄色の一枚の薄板で朝が明け、まるで光が命令したかのように、最初の光線でざわめきが止んだ。トゥーマイちゃんは頭から鳴り響く前に、位置を変える前に、カラ•ナグ、プドミニ、そしてロープガルを持った象以外には象の姿はなく、気配も標識もありませんでした。丘の斜面をガサガサ音を立てたり、ささやき声を上げたりして、他の人たちがどこへ行ったのかを示しました。

小さなトゥーマイは何度も見つめました。彼が思い出したように、空き地は夜のうちに大きくなった。その中央にはさらに多くの木が立っていたが、脇の下草とジャングルの草は巻き戻されていた。小さなトゥーマイはもう一度見つめました。今、彼は踏みつけを理解した。ゾウはさらに多くのスペースを押し出し、厚い草とジューシーなサトウキビをゴミ箱に、ゴミ箱を細片に、細片を小さな繊維に、そしてその繊維を硬い土に踏みしめました。

「わぁ！」トゥーマイちゃんは言いました、そして彼の目はとても重かったです。「カラ•ナグ、我が主よ、プドミニのそばを離れず、ペテルス•エン•サーヒブの野営地へ行きましょう。さもなければ、私はあなたの首から落ちます。」

Machine Translated by Google

3頭目のゾウは2匹が去っていくのを眺め、鼻を鳴らして車輪を回し、自分の道を進みました。彼は、50マイル、60マイル、あるいは100マイル離れたところにある、どこか小さな現地の王の施設に憧れていたのかもしれない。

2時間後、ペテルセン•サーヒブさんが早めの朝食を食べていると、その夜二重鎖に繋がれていた象がラッパを鳴らし始め、肩までずぶ濡れになり、足が痛くなったカラ•ナグを抱えたプドミニさんはよろよろとキャンプに入った。

小さなトゥーマイの顔は灰色でひねくれていて、髪は木の葉でいっぱいで露に濡れていましたが、ピーターセン•サーヒブに敬礼しようとして、かすかに叫びました。「ダンスだ、ゾウのダンスだ！」私はそれを見ました、そして――私は死にます！』カラ•ナグが座ったとき、彼は首から滑り落ちて失神した。

しかし、ネイティブの子供たちは話すほどの神経質ではないので、2時間後には、ピーターセン•サーヒブのシューティングコートを頭の下にかぶって、温かい牛乳と少量のブランデーをダッシュで一杯飲みながら、ピーターセン•サーヒブのハンモックにとても満足して横たわっていました。毛むくじゃらで傷だらけの年老いたジャングルの狩人たちが彼の3つ前に座って、あたかも彼を精霊であるかのように見つめている間、彼は子供のように短い言葉で自分の物語を語り、そして終わったと：

「さて、私が一言嘘をつくとしたら、人たちを見に行かせれば、彼らはゾウの民がダンスルームのさらに多くの空間を踏みにじっていることに気づくだろう。そして彼らは、そこにつながる足跡が10本も10本も、そして何度も10本あるのを見つけるだろう」あのダンスルーム。彼らは足でさらにスペースを作りました。見たことあります。カラ•ナグが私を連れて行ってくれた、そして私は見た。それに、カラ•ナグはとても足が疲れているんです！」

小さなトゥーマイは横になって、長い午後から夕暮れまでずっと眠りました、そして彼が眠っている間、ピーターセン

Machine Translated by Google

サーヒブさんとマチュア•アパさんは、丘を越えて15マイルにわたって2頭の象の足跡をたどりました。ピーターセン•サーヒブさんはゾウの捕獲に18年間を費やしてきたが、そのようなダンスの場を見つけたのはこれまでに一度だけだった。マチュア•アパは、そこで何が行われているかを確認するために空き地を二度見する必要も、詰め込まれた版築された土をつま先で引っ掻く必要もなかった。

「あの子は真実を話します」と彼は言った。 「これはすべて昨夜行われたことですが、川を渡る線路が70本数えられました。
見てください、サーヒブ、プドミニの足鉄があの木の樹皮を切った場所です !はい; 彼女もそこにいました。』

彼らはお互いを上下に見つめ、不思議に思いました。というのは、象のやり方は、黒人であろうが白人であろうが、人間の知恵を超えて理解できないからである。

「40年と5年、私は主である象を追ってきましたが、この子が見たものを人の子が見たという話は一度も聞いたことがありません。 」とマチュア•アパは言いました。丘の神々全員に言わせれば、それは――何と言えようか？』そして彼は首を振った。

彼らがキャンプに戻ると、夕食の時間が来ました。ペーターセン•サーヒブはテントの中で一人で食事をしていたが、宴が開かれることを知っていたので、野営地に羊二頭と家禽数羽、小麦粉と米と塩を二倍の配給で用意するよう命令した。

ビッグ•トゥーマイは、息子と象を探すために平原のキャンプから足早にやって来ました。そして、彼らを見つけた今、彼は二人を恐れているかのように彼らを見つめました。そして、ピケで守られたゾウの列の前で、燃え盛るキャンプファイヤーのそばで祝宴が開かれ、リトル•トゥーマイはそのすべての英雄でした。そして、大きな茶色の要素は、

Machine Translated by Google

ファントキャッチャー、追跡者、運転手、ローパー、そして最も野生のゾウを倒す秘訣をすべて知っている男たちが、次から次へと彼を引き渡し、新しく殺されたジャングルの胸からの血で彼の額に跡を付けました。コックは、自分が森林管理者であり、すべてのジャングルから自由であることを示すために。

そしてついに、炎が消え、丸太の赤い光が象たちも血に浸ったように見えたとき、すべてのケッダのすべての運転手の頭であるマチュア•アパ、ピーターセン•サーヒブのマチュア•アパが言った。 40年間一度も作られた道を見たことのないもう一人の自分：マチュア•アパは、あまりにも偉大だったので、マチュア•アパ以外に名前がなかったが、リトル•トゥーマイを頭上に高く掲げて立ち上がった。 「聞いてください、兄弟たちよ」と叫びました。そこに並んでいる諸君も聞いてください、私、マチュア•アッパが話しているのですから！この小さな子は、もはやリトル•トゥーマイではなく、彼の曾祖父が彼の前に呼ばれていたように、ゾウのトゥーマイと呼ばれることになります。人類が見たことのないものを、彼は長い夜を通して見てきた、そして象の民とジャングルの神々の好意は彼とともにある。

彼は偉大な追跡者になるだろう。彼は私、私、マチュア•アパよりも偉大になるでしょう！彼は新しい道も、古くなった道も、そして入り混じった道も、澄んだ目で追うだろう！彼はケッダで野生の牙を縄で縛るために彼らの腹の下を走るとき、何の危害も加えないであろう。そしてもし彼が突進してくる雄牛の象の足の前で滑ったとしても、雄牛の象は彼が誰であるかを知り、彼を押しつぶすことはないでしょう。アイハイ！鎖につながれた主君たち』――彼はピケの列を旋回しながら登って行った――『ここに、あなたの隠れた場所であなたの踊りを見ていた小さな者がいる――

Machine Translated by Google

人類が見たことのない光景 !殿下、彼に名誉を与えてください !サラーム•カロ、私の子供たちよ。象のトゥーマイに敬意を表しましょう !グンガ•パーシャド、ああ !ヒラ•グジ、ビルチ•グジ、クタル•グジ、ああ !プドミニ、あなたは彼をダンスで見たことがあります、そしてあなたもまた、象の中の私の真珠であるカラ•ナグ !
一緒に !象のトゥーマイへ。バラオ !

そして、最後の荒々しい叫び声で、隊列全体が鼻先が額に触れるまで胴体を跳ね上げ、完全な敬礼を始めた――インド副王、ケッダのサラアマットだけが聞く、鳴り響くトランペットの音。

しかし、それはすべてリトル•トゥーマイのためでした。彼はこれまで人類が見たことのないもの、つまり夜にガロの丘の中心で一人で踊るゾウの踊りを見たのです。

Machine Translated by Google

シブとバッタ

（トーマイの母親が赤ちゃんに歌った歌）

収穫物を注ぎ、風を吹かせたシブは、遠い昔の戸口に座り、それぞれに自分の
分、食べ物、労苦、そして運命を与えた、王からガッディに至
るまで、門にいる乞食に至るまで。

あらゆるものが彼を、保存者シヴァにしました。
マハデオ !マハデオ !彼はすべてを作りました、ラ
クダのとげ、キネの飼料、そして眠い頭のための母親の
心臓、おお、私の小さな息子よ！

彼は小麦を金持ちに与え、アワを貧しい人々に与え、家々を
訪ねて物乞いをする聖人たちに砕いた切れ端を与えた。虎と戦い、死肉と
凧、そして夜には壁のないボロと骨と邪悪なオオカ
ミとの戦い。

彼には高すぎるものは何もなく、低すぎるものは何もなかった。パ
ルバティは彼の隣で彼らが行き交うのを眺めていた。夫を騙そう
と考え、シブを冗談に変えた。小さなバッタを盗んで胸の中に隠した。

そこで彼女は彼を騙した、シヴァ•ザ•プリザーバー。
マハデオ !マハデオ !回って見てください。
ラクダは背が高く、キヌは重い、しかしこれは最も小
さなことでした、おお私の小さな息子よ！

Machine Translated by Google

寄付金が終わると、彼女は笑いながらこう言いました、「ご
主人様、百万口のうち、食べられない人は一人もいないのです
か？」シブは笑いながら答えた、「みんなそれぞれの役割を果たしてき
た、あの小さな彼でさえ、『あなたの心の奥』に隠していたん
だ。」彼女は胸からそれをむしり取り、泥棒パルバティが新しく
生えた葉をかじったのを見た！
見て、恐れて、不思議に思って、生きているすべてのものに肉を確かに与
えてくださったシブに祈りを捧げました。
あらゆるものが彼を、保存者シヴァにしました。
マハデオ！マハデオ！彼はすべてを作りました、
ラクダのとげ、キネの飼料、そして眠い頭のための母
親の心臓、おお、私の小さな息子よ！

Machine Translated by Google

女王陛下の召使たち

分数または単純な 3 つの法則で計算できます。

しかし、トゥイードルダムのやり方はトゥイードルディーのやり方ではありません。

ねじってもいいし、回してもいいし、落ちるまで編んでもいいし、

しかし、ピリー•ウィンキーのやり方はウィンキー•ポップのやり方とは違います！

まる一か月間、激しい雨が降り続いた。三万人の兵力と数千頭のラクダ、ゾウ、馬、雄牛、ラバの野営地に雨が降り、ラワル•ピンディと呼ばれる場所に集まり、総督の審査を受けることになった。インド。彼はアフガニスタンのアミール、非常に荒々しい国の荒々しい王からの訪問を受けていました。アミールはボディーガードとして800人の男と馬を連れてきたが、彼らは人生でこれまで収容所や機関車を見たこともなかった、中央アジアの奥地から来た野蛮な男と野蛮な馬だった。毎晩、これらの馬の群れは必ずかかとのロープを折って、暗闇の中で泥の中を野営地を上り下りしたり、ラクダが解き放たれて走り回ってテントのロープに落ちたりするでしょう。それが眠りに就こうとする男性にとってどれほど心地よいものだったか想像してみてください。私のテントはラクダの列から遠く離れたところにあったので、安全だと思いました。しかしある夜、男が頭を突っ込んで「早く出て行け！」と叫びました。彼らは来ています！テントがなくなってしまった！』

私は「彼ら」が誰であるか知っていたので、長靴を履いて水を履きました。

Machine Translated by Google

証明され、ぬかるみの中に逃げ込みました。私のフォックステリアの小さなビクセンが反対側から出て行きました。それから、轟音とうめき声と泡立ちが聞こえ、ポールが折れてテントが陥没し、狂った幽霊のように踊り始めるのが見えました。ラクダがそこに誤って入ってきて、濡れて怒っていた私は思わず笑ってしまいました。それから私は走り続けました。何頭のラクダが逃げ出すか分からなかったので、間もなく私は野営地から見えなくなり、泥の中をかき分けて進みました。

ついに私は大砲の尾端に落ち、それによって自分が夜に大砲が積み上げられている砲兵陣の近くのどこかにいることが分かりました。霧雨と暗闇の中をこれ以上歩き回りたくなかったので、防水銃を1つの銃の銃口にかぶせ、見つけた2、3本のランマーでウィグワムのようなものを作り、別の銃の尾部に沿って横たわりました銃を突きながら、ヴィクセンはどこへ行ったのか、そして私はどこにいるのか疑問に思いました。

私がちょうど寝る準備をしていたとき、ハーネスの音とうなり声が聞こえ、ラバが濡れた耳を振りながら私の横を通り過ぎました。彼はスクリューガンのバッテリーに属していました。ストラップ、リング、チェーン、サドルパッド上の物がガタガタする音が聞こえたからです。スクリューガンは 2 つの部分から作られた小さな小さな大砲で、使用するときに一緒にねじ込まれます。彼らは山やラバが道を見つけることができる場所ならどこにでも連れて行かれ、岩の多い国で戦うのに非常に役立ちます。

ラバの後ろにはラクダがいて、その大きくて柔らかい足を踏み鳴らして泥の中で滑り、首は迷った鶏のように前後に揺れていました。幸いなことに、私は十分に知っていました

Machine Translated by Google

野獣の言葉ではなく、もちろんキャンプの獣の言葉です。原住民が彼が何を言っているかを知るために。

私のテントに飛び込んできたのは彼だったに違いありません。なぜなら彼はラバに「どうしましょう？」と呼びかけたからです。どこに行こうか？波打つ白いものと格闘したことがありますが、それが棒になって私の首に当たりました。」（それは折れたテントポールでした。それを知ってとてもうれしかったです。）「走ってみましょうか？」

「ああ、キャンプを妨害しているのはあなたとあなたの友達ですか？」とラバは言いました。よし。朝にはこれで殴られるでしょう。でも、今はお返しをしたほうがいいかもしれないよ。』

ラバが後ずさりしてラクダの肋骨を二回蹴るのを受け止めたとき、ハーネスがジャラジャラと鳴り響き、太鼓のように鳴り響いた。「また今度は」と彼は言った、「『泥棒だ、火だ！』と叫びながら、夜にラバの砲台の中を走るよりも賢いことを知っているだろう」座って、愚かな首を静かにしてください。

ラクダは両足ルールのようにラクダのファッションを二重にして座り、泣き叫んでいました。暗闇の中で定期的にひづめの音が響き、大きな軍馬がまるでパレードをしているかのように着実に駈歩し、銃尾を飛び越えてラバの近くに着地した。

「それは恥ずべきことだ」と彼は鼻の穴をかみながら言った。「あのラクダがまた私たちの戦列を荒らして来た――今週三回目だ。馬は睡眠を許されないとどうやってコンディションを保てるのでしょうか。誰がいますか？'

「私は第 1 スクリュー砲台の 2 番砲の尾部ラバです。」とラバは言いました。「もう 1 人はあなたの友人です。」彼も私を起こしてくれました。あなたは誰ですか？'

Machine Translated by Google

「ナンバー15、E部隊、第9ランサーズ—ディック•カン—」
ライフの馬。ちょっとそこに立ってください。』

「ああ、ごめんなさい」とラバは言いました。 「暗すぎてよく見えない。このラクダはどうしようもなく気持ち悪すぎませんか ?私はここで少し平和と静けさを得るために列を離れました。」

「ご主人様、私たちは夜に悪い夢を見て、とても怖かったのです。」とラクダは謙虚に言いました。私は第 39 先住民歩兵隊の一荷物ラクダにすぎず、諸君らほど勇敢ではありません。」

「それでは、なぜ野営地中を走り回らずに、第39先住民歩兵隊のために荷物を運んだりしなかったのですか？」ラバは言いました。

「とても悪い夢でした」とラクダは言いました。 '私は
ごめん。聞く !それは何ですか ?また走りましょうか ?』

「座ってください」とラバは言いました、「さもないと長い棒の足を銃の間に折ってしまいますよ。」彼は片耳を傾けて聞いていました。
「牛だ！」彼は言った。 「ガンブロック。私の言葉によれば、あなたとあなたの友人たちはキャンプを徹底的に目覚めさせました。鉄砲玉を構えるにはかなりの勇気が必要だ。」

鎖が地面を引きずる音が聞こえ、象が発砲にこれ以上近づかないときに重い攻城砲を引きずる大きな不機嫌な白い雄牛のくびきが一緒に肩を組んでやって来た。そして、もう一頭のバッテリーラバが鎖を踏みつけようとしていて、「ビルリー」と激しく呼びかけていた。

「あれは私たちの新兵の一人です」と年老いたラバが軍馬に言いました。
「彼は私を呼んでいます。さあ、若者よ、金切り声をやめなさい。
闇はまだ誰も傷つけたことがない。」

鉄砲玉たちは一緒に横たわって噛み始めた

Machine Translated by Google

反芻しましたが、若いラバはビリーに寄り添いました。

'もの！'彼は言った。 「怖くて恐ろしいよ、ビリー！」私たちが眠っている間に彼らは私たちの列にやって来ました。彼らが私たちを殺すと思いますか？

「私はあなたにナンバーワンのキックを与える非常に素晴らしい精神を持っています」とビリーは言いました。 「あなたの訓練を受けた十四針のラバがこの紳士の前で砲台を辱めるという考えは！」

「優しく、優しく！」軍馬は言いました。 「彼らは最初からいつもこんな感じだということを覚えておいてください。初めて男性を見たのは（3歳のときオーストラリアでした）、半日走りました。もしラクダに出会っていたら、まだ走っているべきでした。」

英国騎兵隊のほぼすべての馬はオーストラリアからインドに運ばれ、騎兵自身によって慣らされます。

「その通りだよ」ビリーは言った。 「震えるのはやめなさい、若者よ。初めてフルハーネスをチェーンごと背中に装着されたとき、私は前足で立ち、すべてのチェーンを蹴り落としました。当時私はキックの本当の科学を学んでいませんでしたが、バッテリーはそのようなものは見たことがないと言いました。」

「でも、これはハーネスでもジャラジャラ音を立てるものでもありませんでした」と若いラバは言いました。 「今はそんなこと気にしてないのはわかってるよ、ビリー」それは木のようなもので、線の上に落ちたり、下に落ちたり、泡を立てたりしていました。ヘッドロープが切れて、運転手も見つからなかったし、ビリー、あなたも見つからなかったので、私は逃げました—
この紳士たちと一緒に。

「うーん！」ビリーは言いました。 「ラクダが放たれたと聞くとすぐに、私は自分の責任で立ち去りました。バッテリー、つまりねじ銃のラバが銃の雄を紳士と呼ぶとき、彼はこうでなければなりません

Machine Translated by Google

とてもひどく動揺した。そこの地上にいる皆さんは誰ですか？』

砲牛たちは反芻し、両方とも答えました、「大砲台の最初の砲の7番目のくびきです。」ラクダが来たとき、私たちは眠っていましたが、踏みつけられたとき、起き上がって歩き去りました。良い寝具に邪魔されるより、泥の中で静かに横たわっている方が良いです。私たちはここであなたの友人に、何も恐れることはないと言いましたが、彼はあまりにも多くのことを知っていたので、違う考えを持っていました。

わあ！

彼らは噛み続けた。

「それは恐れから来るものよ」とビリーは言いました。 「笑われるよね銃弾で。気に入っていただければ幸いです、若いお兄さん。

若いラバの歯が折れたとき、私は彼が世界中のどのような太い老牛も恐れることはないと何か言っているのを聞きました。しかし、牛たちは角を鳴らして噛み合うだけでした。

「さあ、怖くなった後は怒らないでください。それは最悪の卑劣さだよ』と兵馬は言った。 「夜に理解できないものを見たら怖がるのは誰でも許されると思います。私たちは何度も何度も、四百五十人でピケットを突破してきました。新入社員がオーストラリアの自宅で鞭蛇の話をしなければならなかったという理由だけで、私たちは頭の隅が怖くて死ぬほど怖くなったのです-ロープ。

「キャンプでは全く問題ないよ」とビリーは言った。 「1日か2日外出していないときは、楽しむために自分自身を踏み鳴らさないわけではありません。でも、現役時代は何をするんですか？』

Machine Translated by Google

「ああ、それはまったく新しい靴ですね」と軍馬は言いました。 「その時、ディック•カンリフが私の背中に乗って、膝を私に打ち込んできました。私がしなければならないのは、私が足を置く位置に注意し、後ろ足を私の下にしっかりと置き、手綱を付けることだけです。」

「手綱的には何ですか？」若いラバは言いました。

「背中のブロックの青い歯茎のせいで」と兵馬は鼻を鳴らした、「ビジネスにおいて手綱の使い方を教えられていないと言いたいのですか？」手綱を首に押し付けられたときに、一気に回転することができなければ、どうやって何ができるでしょうか？それはあなたの男性にとって生か死を意味します、そしてもちろんそれはあなたにとって生と死です。首に手綱を感じた瞬間に、後ろ足を下に曲げて体を丸めます。振り回す余裕がない場合は、少し後ろ向きになって後ろ足で回ってください。それは手綱のようなものだよ。』

「私たちはそのように教えられていません」とラバのビリーはきつく言いました。「私たちは、先頭に立っている人に従うように教えられています。彼がそう言ったら降り、彼がそう言ったら中に入るのです。」それは同じことになると思います。さて、この素晴らしい派手な仕事と飼育がすべてあり、それはあなたの飛節に非常に悪いに違いありません、あなたは何をしますか？

「それは場合によるよ」と軍馬が言いました。 「通常、私はナイフを持った、毛むくじゃらで叫び声を上げている男たちの中に行かなければなりません――長くて光沢のあるナイフで、装蹄師のナイフよりもひどいものです――を持っていて、ディックのブーツが隣の男のブーツを潰さないように触れているだけであることに注意しなければなりません。右目の右側にディックの槍が見え、安全であることがわかりました。私たちが急いでいるときにディックと私に立ち向かう人馬になることを気にする必要はありません。」

Machine Translated by Google

「ナイフは痛くないですか？」若いラバは言いました。

「そうですね、一度胸を切りましたが、それはディックのせいではありませんでした――」

「もし痛かったとしても、それが誰のせいだったのか、もっと気にすべきでした！」

若いラバは言いました。

「そうしなければなりません」と軍馬が言いました。 「相手を信用できないなら、すぐに逃げたほうがいいよ。それは私たちの馬の何頭かがしていることであり、私は彼らを責めません。先ほども言いましたが、それはディックのせいではありませんでした。男は地面に横たわっていたので、私が彼を踏まないように体を張ったところ、彼は私に切りかかりました。今度、横たわっている人の上を越えなければならないときは、しっかりと踏みつけてやろう。」

「うーん！」ビリーは言いました。 「それはとても愚かなことのように聞こえます。ナイフはいつでも汚れるものです。正しいことは、バランスのとれたサドルを持って山を登ることです。四本の足すべてと耳でつかまり、這い、這い、くねくねと進み、他の人より何百フィートも高い棚の上に出ます。ひづめが入るだけのスペースがある場所。

それからあなたは立ち止まって静かにします—若者よ、決して男性に頭を押さえるように頼んではなりません—銃が組み立てられている間静かにして、それから小さなケシの殻がずっと下の木のてっぺんに落ちていくのを眺めます。 '

「つまずくことはないんですか？」軍馬は言いました。

「ラバがつまずくと、鶏の耳が裂けると言われています」とビリーは言いました。 「時々、ひどい詰め込みのサドルがラバを動揺させることがあるかもしれませんが、それはめったにありません。私たちのビジネスをお見せできればと思います。それは美しいです。なんと、男たちが何に向かって運転していたのかを知るのに3年もかかりました。物事の科学は空の線に向かって現れることは決してありません。

Machine Translated by Google

そうすると、解雇される可能性があります。それを覚えておいてください、若い国連。たとえ1マイル離れた場所に行かなければならないとしても、常に可能な限り隠れてください。そういう登山に関しては、私がバッテリーを率いています。」

「発砲している人々にぶつかる可能性もなく発砲されました！」軍馬は一生懸命考えながら言いました。 「それは我慢できなかった。突撃したいのですが――ディックと一緒に。』

「ああ、いや、そんなことはないでしょう。銃が所定の位置に配置されるとすぐにすべての充電が行われることがわかります。それは科学的できちんとしたものです。でもナイフは――パァ！

荷物持ちのラクダは、しばらくの間、頭を前後に振り、何かを伝えようとしていました。それから私は彼が緊張した面持ちで咳払いをしながらこう言うのを聞いた。

「私は、私は、少し戦ったことがありますが、あの登り方や走り方ではありませんでした。」

'いいえ。そう言えば、ビリーは言いました。「あなたは、まるで登山やランニングをするために作られているようには見えません。
さて、どうでしたか、ヘイベール爺さん？

「正しい方法だよ」とラクダは言いました。 「私たちは皆座りました—」

「ああ、私のクルッパーと胸当てだ！」軍馬は言いました
彼の息の下で。 「座って！」

「私たちは大きな広場に座りました――百人が」とラクダは続けました、「男たちは広場の外に荷物と鞍を積み上げ、私たちの背中に向けて発砲しました、男たちは全員に銃を撃ちました」正方形の辺。

「どんな男性たち？一緒に来た男性はいますか？軍馬は言いました。 「乗馬学校では、横になって師匠に発砲してもらうように教えられますが、それをやってくれると私が信頼できる男はディック•カンリフだけです。それは私の胴回りをくすぐります、そして、その上、私は

Machine Translated by Google

頭を地面につけると見えません。』

「誰があなたに向けて発砲するかはどうでもいいのですか？」ラクダは言いました。 「近くにはたくさんの人たちとたくさんのラクダがいて、たくさんの煙が立ち上っています。そのとき私は怖くない。私はじっと座って待ちます。』

「それなのに、君は悪い夢を見て、夜になるとキャンプを混乱させるんだよ。」とビリーは言った。まあまあ !座るどころか、横になる前に、男が私に発砲する前に、私の踵と彼の頭が何かを言い合うでしょう。

そんなひどいことを聞いたことがありますか？』

長い沈黙があったが、やがて一頭の鉄砲牛が大きな頭をもたげて言った、「これは実に愚かなことだ」。戦う方法は一つしかない』

「ああ、続けて」ビリーは言いました。 「気にしないでください。あなたたちは尻尾を立てて戦っていると思いますか？

「片道だけよ」二人は一緒に言いました。 （双子だったはずです。） 『こっちですよ。トゥー•テイルズがラッパを吹き鳴らしたらすぐに、私たち20人のくびき全員を大きな銃に向けることです。」 （「Two Tails」とはゾウを意味するキャンプのスラングです。）

「トゥー•テイルズは何のためにラッパを吹いているのですか？」若いラバは言いました。

「彼が向こう側の煙にこれ以上近づくつもりはないことを示すためだ。」トゥー•テイルズは大の臆病者だ。それから私たちは一斉に大きな銃を引っ張ります—おい—やあ、万歳 !やあ !やあ !私たちは猫のように登ったり、子牛のように走ったりしません。私たちは平地を横切り、20のくびきを負って、再びくびきがなくなるまで、そして大砲が平原を横切って土壁のある町に向かって話しかける間、私たちは草を食み、壁の破片が落ち、砂埃が舞い上がります。たくさんの牛が家に帰ってきましたが。」

Machine Translated by Google

'おお !それでその時間を放牧に選んだのですか？』若いラバは言いました。

『あの時も、それ以外の時も。食べることはいつも良いことです。私たちは再びくびきがかかるまで食事をし、トゥー•テイルズが待っている場所に銃を引き戻します。時々、街には大きな銃が反撃し、私たちの何人かが殺され、そして残された人々はなおさら放牧されます。これが運命だ。それにもかかわらず、Two Tails は大の臆病者です。それが正しい戦い方だ。私たちはハプール出身の兄弟です。私たちの父はシヴァ神の聖なる雄牛でした。私たちは話しました。』

「そうですね、今夜は確かに何かを学びました」と軍馬は言いました。 「スクリューガン隊の紳士諸君、大きな銃で撃たれていて、ツー•テイルズが後ろにいるとき、食事をしたくなるだろうか？」

「私たちは、座って男たちに大の字にさせられたり、ナイフを持った人々にぶつかったりするのと同じくらいです。そんなこと聞いたことないよ。山の棚、バランスのとれた荷物、自分の道を選択させてくれる信頼できるドライバー、そして私はあなたのラバです。でも――他のことは――だめだ！」ビリーは足を踏み鳴らしながら言いました。

「もちろんです」と軍馬は言いました、「人間は皆同じように作られているわけではありませんし、あなたの父親側の家族が理解できないことはたくさんあるでしょう。」

「父方の家族は気にしないでください」とビリーは怒って言いました。なぜなら、ラバは誰でも自分の父親がロバだったことを思い出されるのが嫌いだからです。 「私の父は南部の紳士で、出会ったすべての馬を引き倒し、噛みつき、ボロ布を蹴り上げることができました。それを覚えていてください、この大きな茶色のブランビー！

ブランビーとは品種改良されていない野生の馬という意味です。画像-

Machine Translated by Google

もし車馬が彼女を「スケート」と呼んだとしたら、スノルの気持ちは同じだろう、そしてオーストラリアの馬がどのように感じたか想像できるだろう。暗闇の中で彼の白目が光るのが見えました。

「ほら、輸入マラガの馬鹿野郎の息子よ」と彼は歯の間で言った、「私がメルボルンカップ優勝者のカービンと母方の血縁関係にあること、そして私がどこから来たのかを知っておいてほしい」彼らは、豆鉄砲の砲台でオウムの口をしたブタ頭のラバに粗暴な靴を履かれて乗られることに慣れていない。準備はできたか？'

「後ろ足で！」ビリーは叫んだ。両者は向かい合って立ち上がったので、私は激しい戦いを期待していたが、そのとき、ゴロゴロとしたゴロゴロとした声が右側の暗闇から呼びかけた――「子供たち、そこで何を争っているのですか？」静かに。'

馬もラバも象の声を聞くことに耐えられないので、両方の獣は嫌悪の鼻を鳴らして倒れました。

「ツーテールだよ！」軍馬は言いました。 「彼には我慢できない。あ
両端に尾があるのは不公平です!」

「まさに私の気持ちです」とビリーは群衆に群がりながら言った――
会社用の馬。 「私たちはいくつかの点で非常に似ています。」

「おそらく私たちは母親から受け継いだものだと思います」と軍馬は言いました。 「それは喧嘩する価値はないよ。こんにちは！二つの尾、あなたは縛られていますか？

「はい」とトゥー•テイルズはトランクの中で笑いながら言った。 「今夜はピケにあるよ。皆さんが言っていることは聞いています。しかし、恐れることはありません。来ないよ。』

牛とラクダは半分声で言いました、「二尾が怖いなんて、ナンセンス！」そして牛たちは続けました、「私たちは

Machine Translated by Google

申し訳ありませんが、本当です。トゥー•テイルズ、なぜ銃が発砲するのを恐れるのですか？

「そうね」とトゥー•テイルズは、片方の後ろ足をもう片方の後ろ足にこすりつけながら言った。まさに小さな男の子が「君に理解してもらえるかどうかは分からないけど」と詩を詠んでいるような感じだった。

「そうではありませんが、銃を抜かなければなりません」と牛たちは言いました。

「私はそれを知っています、そしてあなたが自分で思っているよりもはるかに勇敢であることを知っています。しかし、私の場合は違います。先日、砲台長が私を厚皮症の時代錯誤だと言いました。」

「それも一つの戦い方だと思うよ？」元気を取り戻しつつあるビリーが言った。

「もちろん、あなたにはそれが何を意味するか分かりませんが、私には分かります。それは「中間」と「中間」を意味し、それがまさに私がいる場所です。
砲弾が破裂したときに何が起こるか、私には頭の中でわかりますが、あなたたち牛にはそれがわかりません。」

「できるよ」と軍馬は言いました。「少なくとも少しはね。それについては考えないようにしています。」

「私はあなたより多くのことを見ることができます、そしてそれについて考えます。私には世話をしなければならないことがたくさんあること、そして私が病気になったときに私を治す方法を誰も知らないことも知っています。彼らにできることは、私が回復するまで私の運転手の給料を停止することだけですが、私は運転手を信頼できません。」

「ああ！」軍馬は言いました。'なるほどね。私はディックを信頼できます。」

「ディックスの連隊全体を私の背中に乗せても、私の気分は少しも良くなりません。私は不快であることは十分に知っていますが、それにもかかわらず続けるほどではないことを知っています。」

Machine Translated by Google

「私たちには分かりません」と牛たちは言いました。

「あなたがそうじゃないことはわかっています。私はあなたに話しているわけではありません。あなたは血が何であるかを知りません。

「そうだよ」と牛たちは言いました。 「地面に染み込んで匂いがする赤いものです。」

軍馬は蹴りを飛ばし、バウンドして鼻を鳴らした。

「そのことについては話さないでください」と彼は言いました。 「今、思い出しただけで匂いがするよ。ディックをおんぶしていないときは、走りたくなります。」

「でも、ここにはいないよ」とラクダと牛が言いました。 「どうしてそんなにバカなの？」

「それは卑劣なことだ」とビリーは言った。 「走りたくないけど走らない」
それについて話したいのです。』

「そこにいるよ！」トゥー•テイルズは元平地に向かって尻尾を振りながら言った。

'きっと。そう、私たちは一晩中ここにいたのです」と牛たちは言いました。

二匹の尾は、その上の鉄の輪がジャラジャラと音を立てるまで彼の足を踏み鳴らした。 「ああ、私はあなたに話しているわけではありません。頭の中は見えないんだよ。』

'いいえ。私たちは四つの目で物を見ています」と牛たちは言いました。 '私たちは
私たちの前をまっすぐ見てください。

「もし私がそれしかできず、他に何もできなければ、あなたは大きな銃を握る必要がまったくなくなるでしょう。もし私が私の船長のようだったら――彼は発砲が始まる前に頭の中のことが見えて全身が震えるが、逃げるにはあまりにも多くのことを知っている――もし私が彼のようだったら、銃を引くことができるだろう。しかし、もし私がこれほど賢明であれば、私は決してここにいるべきではありません。私はかつてのように、一日の半分は寝て、寝るときは入浴する森の王様になるべきです。

Machine Translated by Google

好きでした。もう一ヶ月もまともにお風呂に入ってないんです。」

「それで結構です」とビリーは言いました。 「しかし、何かに長い名前を付けても、それがさらに良くなるわけではありません。」

「へっ！」軍馬は言いました。 「Two Tails の意味が分かった気がします。」

「すぐに理解できるでしょう」とトゥー•テイルズは怒りながら言った。 「さあ、なぜこれが気に入らないのか説明してください！」

彼はトランペットの高音で猛烈にトランペットを吹き始めた。

'それを停止する！'ビリーと軍馬が一緒に言いました、そして彼らが足を踏み鳴らして震えているのが聞こえました。象のラッパの鳴き声はいつも不快で、特に暗い夜にはそうである。

「止まらないよ」トゥー•テイルズは言った。 「それについて説明してもらえませんか？」うーん！うーん！うーん！ルルハハ！それから彼は突然止まりました、そして私は暗闇の中で小さな泣き声を聞き、ついにヴィクセンが私を見つけたことがわかりました。私と同じように彼女も、ゾウがこの世で他のものよりも恐れているものがあるとすれば、それは吠える小さな犬であることを知っていました。そこで彼女は立ち止まって、トゥー•テイルズをピケットでいじめ、彼の大きな足の周りで鳴き声を上げた。二匹の尻尾が足を引きずり、きしむ音を立てた。 「あっちへ行って、小さな犬！」彼は言った。 「私の足首を嗅がないでください。さもないと蹴ります。いい子犬、それではいい子犬ですね！家に帰れ、叫ぶ野獣め！ああ、なぜ誰かが彼女を連れ去らないのですか？彼女はすぐに私を噛むでしょう。」

「私には、」ビリーは軍馬に言いました、「私たちの友人のトゥー•テイルはほとんどのことを恐れているようです。」さて、もし私がパレード場を蹴り飛ばしたすべての犬の食事をお腹いっぱい食べたとしたら、私はほぼトゥー•テールと同じくらい太るはずです。」

私が口笛を吹くと、雌女が全身泥だらけになって私に駆け寄ってきました。

Machine Translated by Google

私の鼻をなめながら、キャンプ中ずっと私のために狩りをしていた長い話をしてくれました。私が野獣の言葉を理解していることを彼女に決して知らせませんでした。そうしなければ、彼女はあらゆる種類の自由を奪ったでしょう。そこで私は彼女をオーバーコートの胸元にボタンで留めると、トゥー•テイルズは足を引きずり足を踏み鳴らして独り言のようにうなり声を上げた。

'並外れた !最も素晴らしい !彼は言った。 「それは私たちの家族の中で受け継がれています。さて、あの意地悪な小さな獣はどこへ行ったのでしょうか？

彼がトランクをいじっているのが聞こえました。

「私たちは皆、さまざまな形で影響を受けているようです」と彼は鼻をかみながら続けた。 「さて、私がラッパを吹いたとき、諸君は驚いたと思います。」

「正確には、心配していません」と軍馬は言いました、「でも、鞍があるべきところにスズメバチがいるような気分になりました。もう始めないでください。

「私は小さな犬が怖い、そしてここのラクダは
夜の悪い夢に怯えています。」

「全員が同じように戦わなくて済むのは、私たちにとってとても幸運だ」と軍馬は語った。

「私が知りたいのは」と、長い間黙っていた若いラバは言った――「私が知りたいのは、そもそもなぜ私たちは戦わなければならないのかということだ。」

「そうするように言われているからだよ」と軍馬は軽蔑の鼻を鳴らして言った。

「命令です」とラバのビリーが言うと、歯が折れました。

「フクムハイ！」 （命令だ！）ラクダがゴロゴロと言うと、二尾と牛たちは「フクムハイ！」と繰り返しました。

「そうだけど、誰が命令するの？」新兵のラバは言いました。

「あなたの頭の上を歩いたり、仰向けに座ったり、ノーズロープを握ったり、尻尾をひねったりする男」と彼は言った。

Machine Translated by Google

ビリーと兵馬、ラクダ、牛が次々と出てきました。

「しかし、誰が彼らに命令を出したのでしょうか？」

「今、君は知りたがりすぎだよ、若い君」とビリーが言った、「それは蹴られる一つの方法だよ。あなたがしなければならないのは、頭上の人に何も質問せずに従うことだけです。』

「彼の言うことはまったく正しい」とトゥー•テイルズは言った。 「私は常に従うことはできません、なぜなら私は板挟みにいるからです。」しかし、ビリーは正しい。隣の人の命令に従わないと、のたうち回されるだけでなく、バッテリーがすべて止まってしまいます。」

鉄砲兵たちは立ち上がって出発した。 「朝が来たよ」と彼らは言いました。「我々は戦列に戻ります。確かに、私たちは目で見るだけで、あまり賢くないのです。しかし、それでも、今夜恐れていないのは私たちだけです。おやすみ、勇敢な皆さん。

誰も答えなかったので、軍馬は会話を変えるためにこう言いました、「あの小さな犬はどこですか？」犬というのは、どこかで人間を意味するのです。」

「ここにいるよ」とヴィクセンは叫びました、「男と一緒に銃尾の下で。大きくてドジなラクダの獣よ、あなたは私たちのテントをひっくり返しました。私の彼はとても怒っています。』

「ふう！」牛たちは言いました。 「彼は白人に違いない！」

「もちろんそうだよ」とヴィクセンは言った。 「私のことは黒人の牛追いが世話をしていると思いますか？」

「はあ！うわー！うーん！牛たちは言いました。 「早く逃げましょう。」

彼らは泥の中を前に進み、なんとか弾薬輸送車のポールにくびきを掛けたが、そこで弾薬が詰まってしまった。

Machine Translated by Google

「もう、やり遂げたね」ビリーは静かに言った。 「苦労しないでください。あなたは夜明けまで電話を切られています。いったい何が起こったんだ？』

牛たちはインドの牛が発する長いシューシューと鼻を鳴らし、押し寄せ、群がり、引きつけられ、踏みつけられ、滑って泥の中に倒れそうになり、野蛮なうめき声を上げた。

「すぐに首の骨が折れるぞ」と軍馬が言いました。 「白人男性はどうしたの？」私は「彼ら」と一緒に暮らしています。

「彼らは――私たちを――食べてしまうのだ！」引く！'近くの牛が言いました。くびきガタンと音が鳴り、二人は一緒によろよろと立ち去った。

インドの牛がなぜイギリス人をそこまで怖がらせるのか、私はこれまで全く知りませんでした。私たちは牛肉を食べますが、牛飼いは絶対に触らないものですが、もちろん牛は牛肉を好みません。

「私が自分のパッドチェーンで鞭打たれますように！」首を失ったような大きな塊が 2 つあるなんて誰が想像したでしょうか？ビリーは言いました。

'どうでも。この男を見てみます。私が知っているほとんどの白人男性はポケットに何かを入れています」と兵馬は言いました。

「それでは別れます。私自身、彼らのことが好きすぎるとは言えません。それに、寝る場所のない白人男性は泥棒になる可能性が高く、私はかなりの政府財産を背負っています。来てください、若い国連、そして私たちは列に戻ります。おやすみ、オーストラリア！明日のパレードでお会いしましょう。おやすみ、ヘイベールおじさん!—自分の感情をコントロールするように努めてくださいね?おやすみ、ツーテイルズ！明日、地上で私たちとすれ違っても、ラッパを吹かないでください。それは我々の陣形を台無しにする。』

ラバのビリーは、ふらふらと足を引きずってよろめきました。

Machine Translated by Google

年老いた運動家は、軍馬の頭が私の胸にすり寄ってきたので、私は彼にビスケットをあげましたが、ビクセンはとてもうぬぼれている小さな犬で、私と彼女が飼っていた何十頭もの馬について彼にふざけて話しました。

「明日のパレードに犬車で行きます」

彼女は言いました。 「どこにいますか？」

『第二戦隊の左手です。私の部隊全員の時間を設定しました、お嬢さん」と彼は丁寧に言った。 「さて、ディックのところに戻らなければなりません。私の尻尾はすっかり泥だらけだし、パレードに向けて私に服を着せるために2時間もかかるだろう。」

その日の午後、3万人全員による大規模なパレードが開催され、ヴィクセンと私はアストラハンウールの高くて大きな黒い帽子をかぶり、中央には大きなダイヤモンドの星があり、アフガニスタン副王とアミールに近い良い場所に陣取った。観閲式の最初の部分は晴天に恵まれ、連隊は足を波に動かし、一斉に動き、銃を一列に並べて通り過ぎ、目がくらむほどだった。

それから騎兵隊がやって来て、「ボニー•ダンディー」の美しい騎兵隊の駈歩に合わせて、ヴィクセンは犬車に座ったところで耳を傾けた。ランサーズの第二中隊が銃で通り過ぎると、そこには糸を紡いだような尻尾を持ち、頭を胸に引き寄せ、片方の耳を前方に、もう片方の耳を後ろに引き込み、全戦隊の時間を設定し、足を動かしていた兵馬がいた。ワルツ音楽のように滑らかに動きます。それから大きな大砲がやって来て、トゥー•テイルズと他の2頭の象が40ポンドの攻城砲につながれ、20頭の牛が後ろを歩いているのが見えました。 7 番目のペアには新しいヨークがあり、かなり硬くて疲れているように見えました。最後にスクリューガンが登場し、ラバのビリーはまるで命令したかのように体を動かしました

Machine Translated by Google

兵士全員と彼の馬具は油を塗られ、まばたきするまで磨かれた。私はラバのビリーを一人で応援しましたが、彼は右も左も見ませんでした。

雨が再び降り始め、しばらくは霧がかかって軍隊の様子が見えなかった。彼らは平原を大きく半円を描き、一列に広がっていた。その戦列はどんどん伸びていき、翼から翼までの長さは 4 分の 3 マイルに達し、人、馬、銃で構成される堅固な壁となりました。それからそれは副王とアミールに向かってまっすぐにやって来ました、そしてそれが近づくにつれて、エンジンが高速で回転しているときの汽船の甲板のように、地面が揺れ始めました。

現場に行ったことがない限り、たとえそれが単なる復習であるとわかっていても、この着実な軍隊の降下が観客にどれほど恐ろしい影響を与えるか想像できないでしょう。私はアミールを見た。それまで彼は驚きなどの影も見せなかった。しかし今、彼の目はますます大きくなり始め、馬の首にある手綱を手に取り、後ろを振り返りました。ほんの少しの間、彼は剣を抜いて、後ろの馬車に乗っているイギリス人の男性と女性を切り裂いて逃げようとしているように見えました。それから前進は止まり、地面は静止し、全列が敬礼し、30のバンドが一斉に演奏を始めた。これで再視察は終わり、連隊は雨の中キャンプへ出発したが、歩兵隊が攻撃した――

動物たちは二匹ずつ入ってきました、
万歳！

Machine Translated by Google

動物たちは二匹ずつ入ってきました、
象とバッテリーは、
そして彼らは皆箱舟に乗り込みました
雨から逃れるために！

その時、アミールとともに降りてきた白髪交じりの長髪の中央アジアの老人が現地の将校に質問しているのが聞こえた。

「さて、この素晴らしいことはどのようにして行われたのでしょうか？」と彼は言いました。

すると役人は、「命令が出されたので、彼らは従ったのです」と答えた。

「しかし、獣は人間と同じくらい賢いのでしょうか？」と署長は言いました。

「彼らも男性と同じように従うのです。」ラバ、馬、象、または牛、彼は運転手に服従し、運転手は軍曹に、軍曹は副官に、中尉は船長に、船長は少佐に、少佐は大佐に、大佐は軍曹に従う。 3つの連隊を指揮する准将と、皇后の従者である副王に従う将軍である准将。こうしてそれは完了した。』

「アフガニスタンでもそうなのだろうか！」 「そこでは私たちは自分たちの意志にしか従わないからです」と酋長は言いました。

「そういうわけで、」現地の士官は口ひげをひねりながら言った。「あなたが従わないアミールはここに来て、私たちの副王から命令を受けなければなりません。」

Machine Translated by Google

のパレードソング
キャンプの動物たち

ガンチームのエレファント

私たちはアレクサンダーにヘラクレスの力を貸しました。
私たちの額の知恵、膝の狡猾さ。
私たちは首を下げて奉仕しました。首が再び緩むことはありませんでした、
—
そこへ道を進めましょう—10フィートのチームへの道
40ポンド列車のことだ！

銃弾

ハーネスをつけた英雄たちは砲弾を避けますが、
そして、彼らが火薬について知っていることは、彼ら全員を動揺させます。
それから私たちは行動を開始し、再び銃を引っ張ります—
そこへ道を進め、二十くびきへの道を進みましょう
40ポンド列車のことだ！

騎兵馬

肩のブランドにかけて最高の曲を
ランサーズ、軽騎兵、竜騎兵によってプレイされます。
そしてそれは私にとって「厩舎」や「水」よりも甘いです—

Machine Translated by Google

「ボニー•ダンディー」のキャバルリー•キャンター！

それから私たちに食事を与え、私たちを壊し、扱い、手入れをし、
そして優秀なライダーと十分なスペースを与えてください。
そして私たちを戦隊の縦隊に投入して見てください
軍馬の「ボニー•ダンディー」への道！

スクリューガンミュール

私と仲間たちが丘を登っていたとき、
転がる石で道を見失いましたが、私たちはそれでも前進しました。
というのは、私たちは身をくねらせてよじ登ることができるし、どこにでも現れることができるか
らです。
ああ、足が 1 ～ 2 本あれば、山の高みに登れるのは私たちの喜びです。

それでは、すべての軍曹に幸運を祈ります。そうすれば、私たちは自分たちの道を選ぶことができます。
荷物を積み込めない運転手の皆さんは不運です。
というのは、私たちは身をくねらせてよじ登ることができるし、どこにでも現れることができるか
らです。
ああ、山の高さに足を 1 ～ 2 つ加えて登れるのは、私たちの喜びです。
予備の！

委員会のラクダ

私たちには独自のラクダのような曲はない
私たちが歩き回るのを助けるために、
でも、どの首もトロンボーンです
（ルッタタタ !はヘアトロンボーン！）

Machine Translated by Google

そしてこれが私たちの行進曲です：「無理！」やめ
てください !だめだ !そうしません！

線に沿って渡してください！

誰かの背中からリュックが滑り落ちた、それが私のものだっ
たらいいのに！

道路で誰かの荷物が転倒しました。停止して漕ぎましょう!

うーん !やったー !うーん !ああ！

今誰かが捕まえてるよ！

すべての野獣が一緒に

キャンプの子供たちは私たちであり、それ
ぞれの学位で奉仕しています。くびきと
突き棒の子供たち、パックとハーネス、パッド
と荷物。

平原を横切る私たちの列を見てください、
再び曲がったかかとのロープのように、
遠くまで届き、のたうち回り、転がり、すべてを
戦争に一掃します！

隣を歩く男たちは、ダスティで、沈黙し、重い目を
しながら、なぜ私たちや彼らが行進し、
毎日苦しんでいるのかわかりません。

キャンプの子供たちは私たちであり、それ
ぞれの学位で奉仕しています。くびきと
突き棒の子供たち、荷造りとハーネス、パッド
と荷物！